

今ヤ其工事ノ一半ヲ成效セリ。即チ該築港會社ハ第一期工事トシテ、右運河工竝ニ一泊船渠水面積三萬五千坪、有効岸壁長八百五十間、一年一百萬噸ノ荷役豫定ニシテ、水深ハ當初十七尺ニ止メ後二十尺トナス筈、前港幅六十間ニシテ右岸ニ一千間ノ岸壁ヲ築キ、水深二十尺トス、及小船碇泊渠(水深十尺)ノ築造ト、及各種陸上設備ノ建設ヲ終ヘ、爾後九十年ノ特許期間ハ、專ラ其全部竝ニ現存市有港設備一切ノ處理營業ニ任スルモノタリ。其豫定資本額ハ一千三百四十餘萬圓ニシテ、株主ハ白耳義政府、ぶらばん州、ぶりゆつせる市、及該運河沿ノ十個ノ市邑ヨリ成リ、其負擔

政府

四百萬圓

ぶらばん州

百六十萬圓

ぶりゆつせる市

九百七十六萬圓

ニシテ、爾餘ハ、各二萬圓以上ノ割ヲ以テ十個市邑ノ間ニ分タルベシ。但現時ノ推定ニヨレバ第一期工費二千萬圓ニ上ルベキヲ以テ、上記ノ負擔額亦多少ノ増加ヲ見ルベク、尙此他ニ港内鐵道及停車場工費六百萬圓ハ鐵道局ノ支出ニ係ルベキモノトス。

而ノ該會社ハぶりゆつせる市ニ對シ、現存運河、船渠、及倉庫ノ特別使用許可ノ報酬トシテ、毎年約十四萬六千圓ヲ先ヅ同市ニ納付スルヲ要ス。而ノ特許滿期ト共ニ、運河及附屬物件ハ政府ニ、港及其附屬設備ハぶりゆつせる市ノ所有ニ歸スベク、若シ當時萬一資金未償還額ヲ存スル場合ニ於テハ、市ハ直接、港ノ工事ニ關セル放資ニ對シ、無利息ヲ以テ各株主ニ償還ノ責ニ任ズベキヲ規定セリ。

ぶりゆつせる港第一期工事ノ開設ハ尙數年ノ後ニアリ、從テ未ダ其ノ成效如何ヲ知ラズト雖モ、最モ近キ海岸ニ達スルニ數十哩ヲ要スル内地ニ在テ、先ヅ水深二十尺ノ水路ヲ開キ、以テ從來ノ仲繼港タル安土府ニ於ケル貨物積換ヘノ手數ト、運送貨ノ輕減ヲ計ラントスルモノ、蓋シ該地方商工業上ノ利益著大ナルベキニ由ラズンバアラズ。殊ニ該運河沿ヒノ地域ガ、前ニ河ヲ帶ビ、後ニ鐵道ヲ通ズルヲ以テ、既ニ至便ナル製造工業用地トシテ一般ノ注意ヲ呼ビ、其賣却ニ應ジテ盛ニ大工場ノ建設ヲ急ゲル如キハ、又築港附帶ノ一利益トシテ該市ノ隆昌ニ資スルノ大ナルヲ證ス。

### 第二章 東京築港ノ價值

以上列舉セル處ノ事實ヲ通シテ略々看取シ得ベキ一般ノ趨向ハ、悉ク我東京築港ノ必要及利益ヲ主張スベキ第一理由タラズンバアラズ、即チ

- (一) 中央市場所在地ニ於テ直ニ深水港ヲ築成スルノ、眞個經濟的要求タルニ對シ、東京市ハ實ニ我國貨物集散ノ第一市場タルヲ。
- (二) 全國貿易系統ノ一半ヲ其勢力圈内ニ收メ、且ツ其背部交通上ノ利便著大ナルヲ。
- (三) 世界交通ノ幹線ニ對シテ橫濱港ト同一ノ價值ヲ有スルヲ。

ノ如キ先ヅ明カニ商港トシテ其經濟的位置ノ絶好ナルヲ示サマランヤ。



加之、假令其地勢ヨリシテ、築港上先ヅ運河ノ開鑿ヲ避ク可ラズトスルモ、其延長ハ五哩餘ニシテ足リ、且ツ敷地ノ買收、閘門、橋梁ノ建設、鐵道水路ノ交叉等、屢々他ニ見ルガ如キ多大ノ障礙ニヨリテ諸工事ヲ遷延シ、又ハ意外ニ工費ヲ膨大セシムベキ事故、一モ之ヲ存セザルオヤ。

然ラバ則チ既ニ此ノ如キ天與ノ形勝ヲ占メタル大都市ニシテ、而モ當然其地ニ附隨セル水運上ノ利益ヲ收ムルヲ爲サズ、其狀依然トシテ内地山間ノ都市ト擇ブ處ナキガ如キハ、先ヅ以テ其誤レルノ甚シキヲ見ルベシ。況ヤ更ニ進デ其利用ヲ擴大シ、一般經濟上ノ活動ト、都市ノ隆昌ヲ誘致スル能ハザルモノ愈々以テ其惜ムベキヲ如何。

東京築港ノ目的ヤ實ニ茲ニ存ス。而シテ其必要ヤ自然ナリ、其價值ヤ廣大ナリ。試ニ其利益ノ最モ手近キモノヲ擧グルモ、先ヅ京濱間輸送貨物運賃ニ於テ一年少クトモ百三十萬圓ヲ節スルヲ得ベク(後節參照)之ニ加ヘテ現在ノ輸送法ニ伴フ時間手數上ノ損害、運送ノ危險、及商機ノ齟齬等ヲ除却スベキヤ必セリ。

而シテ貨物輸送ノ便ト其運賃輕減ノ利ハ、自ラ惹テ一般商工業上ノ活動ヲ促

ガシ、且ツ一方ニハ物價ノ低減ヲ意味スベキヲ疑ハズ。彼ノ前述まんちえすた一港ノ例以テ證スベキナリ。

(備考)更ニ之ヲ佛國まるセ一埠港ニ見ルモ、其稅關ニ於ケル一ケ年ノ輸出入貨物評定價格ハ、一八七二年ニ於テ十九億二千萬法ナリシモ、一八九五年ニ於テハ十八億五千萬法ニ下リ、而シテ其間ニ於テ貨物ノ數量ハ殆ド倍加セルガ如キ、以テ一般ニ貨物價格ノ低落ヲ察スルニ足ラン。且ツ一八七二年ト一八八二年ノ十年間ニ於テ其低落ハ平均二割五分ヲ示シ、貨物ノ種類ニヨリテハ實ニ九割ニ及ブモノアリ。而シテ爾來モ尙引續キ下落ノ著シキヲ見ルベク、左ニ同地ニ於ケル近キ十年間ノ物價ノ二三ヲ對照ス。

	一八八五年ノ平均價格 (百キロニ付)	一八九五年ノ平均價格 (百キロニ付)
赤砂糖(第八十八號)	三九、八六	二六、六四
白砂糖(第三號)	四四、七六	二九、〇〇
珈琲	一〇二、〇〇	九七、〇〇
印度胡椒	一八〇、〇〇	六〇、〇〇
日本胡椒	三三、〇〇	二五、五〇
印度米	二六、〇〇	二一、五〇
日本米	二九、一三	二二、五〇
麻		



綿	九、〇〇
牛	一五二、五〇
羊	一六三、二〇
食料	七五、〇〇
英	二八、〇〇
國	二八、〇〇
石	二八、〇〇
炭	二八、〇〇
油	九八、五〇
肉	一六六、五〇
肉	一五四、〇〇

ノ如キ又以テ證スベケシ。

若シ更ニ注意スベキ利益ヲ舉グレバ、之ヲ港ノ開設ニ伴フ商工業的新生面ノ啓發ナリトス。即チ貨物運送ノ利便ハ、自ラ各種ノ新企業ヲ誘致シ、爲メニ東京市ヲシテ今日未ダ見ル可ラザル方面ニ、其新彩ヲ發揮セシムベキヲ疑ハズ。殊ニ製造工業上ノ施設ノ爲メニハ、前面、大船ヲ通ズル運河ヲ控へ、後方、直ニ鐵道ノ便ニ接シテ、廣大ナル新埋立地ヲ得ベク、其地域ノ至便至利ナルヲ以テ優ニ百般ノ劃策ヲ爲スニ適スルアリ。是豈東京市ノ發達ニ附與スルニ著大ナル新要素ヲ以テスルモノニ非ズヤ。而シテ彼ノまんちえすたー港ノ運河沿ヒ三哩餘ノ區域ガ今日各種ノ新築工場ヲ以テ充タサレツ、アルガ如キ、ぶりゆつせる港新運河ノ尙工事中ナルニ係ラズ、其右岸既ニ工場ノ建

設相繼ゲルガ如キ、或ハ全然工業地ナラザルリゾあぶる市ニシテ、港頭尙幾多ノ製造所ヲ認メ、或ハ漢堡ニ於テ、築港工事著手後十二年ニシテ、工場數八百餘ヨリ一千三百餘ニ増加シ、其職工數二萬五千ヨリ四萬三千ニ達セルガ如キ、以テ之ヲ推スルヲ得ン。

港ノ改良ニ伴フ貿易ノ進歩ハ、又顯著ナル一利益トシテ見ルニ足レリ。例セバ英ノぐらすごーニ於テハ、其築港後五十年ニシテ、船舶噸數ハ三倍シ、貨物噸數ハ五倍シ、港事會議所ノ收入ハ六倍シ、稅關ノ收入ハ三倍シ、市内ノ人口ハ倍加セルアリ。佛ノ馬耳塞港ニテハ、じよりえつと船渠開通以後ノ五十年ニシテ、船舶噸數ハ三倍シ、貨物噸數ハ四倍セルアリ。更ニ若干ノ港ニ付キ、單ニ最近十年間ニ於ケル貿易増進ノ割合ヲ見ルモ、實ニ左ノ如キモノアリ。

諸港貿易増加割合比較

港名	一八九〇年ニ於ケル 入港海船登簿噸數	一八九九年ニ於ケル 入港海船登簿噸數	右十年間ニ於ケル 貿易増加百分割合
ろつたーだむ	二、九一八、〇〇〇	六、三二六、〇〇〇	一一六、八
さうざんぶとん	一、六六九、〇〇〇	二、七八四、〇〇〇	六六、八
あんとわーぶ	四、五一八、〇〇〇	六、八四二、〇〇〇	五一、四







數ノ六割三分、品川沖荷役ノモノ二十一萬餘噸(八分)ニ當ル。而シテ是等ノ貨物ハ、皆等シク現在ノ舩舟荷役ニヨリ、其運賃、時間及手數上ニ著大ナル不利益ヲ蒙リツ、アルモノニシテ、爲メニ東京市ハ悉ク右輸送上ノ損害ヲ負擔スルノミナラズ、其分配ニ當リ更ニ之ヲ全國ニ波及セシムルヲ免レズ。加之、輸送上往々風波ノ爲メニ生ズル濡荷、打荷、流失、損傷等ノ缺損モ亦併セテ之ヲ負擔セザル能ハズ、サレド其損害ハ只間接ニ一般東京市及全國貨物價格ノ上ニ負課セラル、ニ止マリ、何人モ適切ニ其不利益ヲ覺知スルニ至ラズ、且ツ之ヲ計量スルコト極メテ困難ナリト雖モ、今少シク其大要ヲ述ベシニ、

先ヅ横濱經由貨物ノ場合ニ見レバ、其輸送時間ニ於テハ、横濱港内ヨリ曳船ニテ月島南角迄晴天ノ場合ニ六時間ヲ要シ、之ヨリ獨走ノ時ハ二時間、他ノ曳船ニ依ルトキハ一時間ニシテ深川ニ達スベシト雖モ、雨天ノ際ハ、微雨ト雖モ本船及倉庫ニ於テ荷役ヲ爲サザルヲ常トシ、且ツ風雨ノ時出船スルト否トハ曳船々長ノ見込如何ニ依ルモ、普通ハ出船セザルヲ例トセルヲ以テ往々甚シク輸送ノ遲滯ヲ生ジ、或ハ爲メニ商機ヲ失スルヲ免レズトス。而シテ

其運漕途中、大師河原沖、羽田沖、砲臺外等、嶮惡ノ場所ヲ存スルヲ以テ、如上ノ如ク風雨ニ注意ヲ加フルニ關セズ、尙每年平均二百六十餘艘(三十五年ニ於テハ四百五十七艘)ノ遭難ヲ生ズルモノニシテ、右ハ單ニ町村役場ノ證明書控ニ依ル、一方舩運送保險料ノ高價ナルニ見ルモ、東京市ノ如キ大市場ニ達スル水運方法トシテ、其不備ノ甚敷ニ驚カズンバアラズ。次ニ其運賃上ノ損害ヲ擧ゲンガ爲メニハ、曩ニ郵船會社ニ囑シテ調査シ得タルモノ最モ明確ナルヲ以テ、直ニ之ニヨリテ視ルベシ。

東京輸出入荷物費額概算比較

第一 内國航路

(甲)横濱著舩舩ニテ接續(現在)

横濱ニテ本船ヨリ舩ニ積移費	八錢五厘
京濱間舩費	四拾貳錢
同舩運送保險料	拾五錢
京濱間舩運送日數ニ對スル荷物ノ延滞損失見積	參拾壹錢五厘
計壹噸ニ付壹圓貳錢五厘	拾五錢(對一噸平均五圓ノ平利ノ日歩三錢ノ對)

(乙)東京著舩(將來)

(5)横濱寄港

帝都時代ノ港灣



(イ)本港揚

本船々費 六錢五厘  
 港 稅 七 錢  
 本船ヨリ揚陸費 五錢五厘  
 計壹噸ニ付拾九錢即チ現在ノ費額ニ比シ減少額八拾參錢五厘

(ロ)本港解取

本船々費 六錢五厘  
 港 稅 七 錢  
 本船ヨリ解ニ積移費 八錢五厘  
 本港市内間解賃 貳拾壹錢  
 市内ニ於テ揚陸費 五錢五厘  
 計壹噸ニ付四拾八錢五厘即チ現在ノ費額ニ比シ減少額五拾四錢

(ろ)直航

(イ)本港揚

本船々費 壹錢七厘  
 港 稅 七 錢  
 本船ヨリ揚陸費 五錢五厘  
 計壹噸ニ付拾四錢貳厘即チ現在ノ費額ニ比シ減少額八拾八錢參厘

(ロ)本港解取

本船々費 壹錢七厘  
 港 稅 七 錢  
 本船ヨリ解ニ積移費 八錢五厘  
 本港市内間解賃 貳拾壹錢  
 市内ニ於テ揚陸費 五錢五厘  
 計壹噸ニ付四拾參錢七厘即チ現在ノ費額ニ比シ減少額五拾八錢八厘

第二 外國航船

(甲)橫濱著船(現在)

(ス)解ニテ接續

橫濱ニ於テ本船ヨリ解ニ積移費 八錢五厘  
 同本船稅關間解賃 拾 七 錢  
 同解ヨリ稅關内ヘ揚陸費 拾 錢  
 同通關取扱手數料 參拾壹錢  
 同稅關ヨリ解ニ積移費 拾 錢  
 橫濱稅關ヨリ東京迄解費 五拾錢  
 同解運送保險料 貳拾錢  
 東京ニ於テ揚陸費 五錢五厘

(一噸二百圓ニ平均價格ニ對シ平均價格ノ割)



本船噸税ノ賦課  
 京濱間運送日數ニ對ス  
 荷物ノ延滞損失見積  
 計壹噸ニ付壹圓九拾六錢五厘  
 貳錢五厘  
 四拾貳錢(一噸二日百圓ノ平均價格ニ對シ)

(ろ)汽車ニテ運送

横濱ニ於テ本船ヨリ舢二積移費八錢五厘  
 同本船税關間舢賃 拾七錢  
 同舢ヨリ税關内へ揚陸費 拾錢  
 同通關取扱手数料 參拾壹錢  
 同陸送關ヨリ停車場迄 貳拾錢  
 京濱間汽車賃 五拾錢  
 横濱及新橋ニ於テ汽車ニ積卸賃四拾錢  
 新橋ヨリ市内へ陸送費 貳拾錢  
 本船噸税ノ賦課 貳錢五厘  
 京濱間汽車運送日數ニ對スル荷物ノ延滞損失見積 拾八錢(一噸三日百五十圓ノ平均價格ニ對シ)  
 計壹噸ニ付貳圓拾七錢

(乙)東京著船(將來)

(い)横濱寄港

(イ)本港揚

本船々費 六錢五厘  
 本船噸税ノ賦課 貳錢五厘  
 港 税 七錢  
 本船ヨリ揚陸費 五錢五厘  
 通關取扱手数料 拾五錢  
 計壹噸ニ付參拾六錢五厘即チ現在ノ費額ニ比シ減少額(舢接續一圓六十錢汽車陸送一圓八十錢五厘)

(ロ)本港解取

本船々費 六錢五厘  
 本船噸税ノ賦課 貳錢五厘  
 港 税 七錢  
 本船ヨリ舢ニ積移費 八錢五厘  
 本港市内間舢賃 貳拾壹錢  
 市内揚陸費 五錢五厘  
 通關取扱手数料 拾五錢  
 計壹噸ニ付六拾六錢即チ現在ノ費額ニ比シ減少額(舢接續一圓三十五錢一五厘)

(ろ)直航

(イ)本港揚

本船々費

帝都時代ノ港灣

壹錢七厘





本船噸税ノ賦課 貳錢五厘  
 港 税 七 錢  
 本船ヨリ揚陸費 五錢五厘  
 通關取扱手数料 拾五錢  
 計壹噸ニ付參拾壹錢七厘即チ現在ノ費額ニ比シ減少額(舁接續一圓六十四錢八厘) 汽車陸送一圓八十五錢三厘)

(ロ)本港解取

本船々費 壹錢七厘  
 本船噸税ノ賦課 貳錢五厘  
 港 税 七 錢  
 本船ヨリ舁ニ積移費 八錢五厘  
 本港市内間舁貨 貳拾壹錢  
 市内揚陸費 五錢五厘  
 通關取扱手数料 拾五錢

(附言)本表ノ費額ハ輸入ノ場合ニ係ルモノナレトモ輸出ノ場合モ同様ニ付之ヲ略ス。  
 前表ハ東京著船ノ場合ニ於テ假ニ港税一噸七錢ヲ見込メリト雖モ尙其凡テノ輸送手續ニ於テ横濱經由ノ損害多大ナルヲ示セリ且ツ縱令他日横濱税關ノ繫船岸工事竣功シ外國航船貨物ノ税關構内迄ノ運送揚陸費一切ヲ

減少スルヲ得ルトスルモ一噸ニ付キ三十五錢五厘ヲ減ズルニ過ギザルヲ以テ之ヲ東京著船ノ利便ニ比スルニ足ラズ況ヤ京濱間ノ鐵道ガ將來ト雖モ多額ナル東京輸出入貨物ニ對シ不足ナキ運搬力ヲ有シ得ベキカハ元ヨリ大ナル疑問ナルベク之ヲ現在新橋驛發著貨物最近三年(自三十三年至三十五年)ノ平均ニ見ルモ其總量三十六萬五千噸ニ對シ京濱間ノミノハ僅ニ五萬六千噸ニ過ギズ從テ單ニ外國貨物五十萬噸ノ輸送ノ爲メニモ其百般ノ設備ヲ倍加スルノ要アルベキオヤ。

今試ニ三年間(自三十三年至三十五年)ノ平均横濱經由東京出入貨物數量ニ對スル運送費總額ヲ掲ゲテ以テ前表ト照應セシムレバ左ノ如シ。

東京輸出入荷物費總額概算比較

第一、内國航船ニヨル貨物(百二十二萬噸)

運 輸 方 法	總 額	現在ノ費額ニ比シ減少額
(甲) 横濱著舁船ニテ接續(現在)	一、二五〇、五〇〇円	
(乙) 東 京 著 船(將來)		
(丙) 横 濱 寄 航		



(イ) 本港揚	二三一、八〇〇	一、〇一八、七〇〇 <small>円</small>
(ロ) 本港解	五九一、七〇〇	六五八、八〇〇
(ろ) 直航		
(イ) 本港揚	一七三、二四〇	一、〇七七、二六〇
(ロ) 本港解	五三三、一四〇	七一七、三六〇

第二、外國航船ニヨル貨物(五十一萬七千噸)

運輸方法	總額	現在ノ費額ニ比シ減少額	
		解接續ニ對シ減少	汽車陸送ニ對シ減少
(甲) 橫濱著船(現在)			
(イ) 解ニテ接續	一、〇一五、九〇五 <small>円</small>		
(ろ) 汽車ニテ運送	一一、二二一、八九〇		
(乙) 東京著船(將來)			
(い) 橫濱寄航			
(イ) 本港揚	一八八、七〇五	八二七、二〇〇 <small>円</small>	九三三、一八五 <small>円</small>
(ロ) 本港解	三四一、二二〇	六七四、六八五	七八〇、六七〇
(ろ) 直航			
(イ) 本港揚	一六三、八八九	八五二、〇一六	九五八、〇〇一
(ロ) 本港解	三一六、四〇四	六九九、五〇一	八〇五、四八六

是ニ由レバ、其最モ不利益ナル場合、即チ船舶ガ悉ク一度橫濱ニ寄航シテ更ニ東京ニ入港シ、其貨物ハ再ビ本港ヨリ解船ニテ深川等ニ輸送サル、場合ノミニ就テ考フルモ、是ヲ現在ノ橫濱港ヨリ解取リトナスモノニ比シテ、内外國貨物總計ニ於テ、一年百三十三萬餘圓ノ冗費ヲ節約スルヲ得ベク、若シ東京直航本港揚ゲノ利便ヲ得ルニ於テハ、約百九拾三萬圓ニ達セシムルヲ得ベシ。即チ此百三十萬乃至百九十萬圓ノ運送費減少ハ、東京築港ノ爲メニ生ズル最モ卑近ナル一利益ニシテ、而モ其金額ハ、逐年増進ノ割合正確タル貨物ノ數量ト共ニ、愈々増加スベキヲ必シ、現ニ三十五年ノ數量ヨリシテ計算セバ、即チ既ニ百三十八萬圓乃至二百萬圓ノ減少ニ當ルヲ見ル。但シ前表中ニ見込マル港税(一噸七錢ニシテ此總額十二萬餘圓)ハ、港ノ維持修繕費トナスニ於テ餘リアリト雖モ、之レ只一個ノ假定ニシテ元ヨリ何等ノ考量ヲ經タルモノニ非ズ。且ツ今之ニ論及スルノ要ナキヲ以テ、其當否如何ハ暫ク之ヲ問ハズ。

次ニ轉ジテ品川沖碇泊船ノ現況ヲ見ルニ、同地ハ東南ニ面シ、夏季ハ南風ヲ受ケ、冬季ハ北西風強キモ、其附近風勢ヲ遮ルベキ何等ノ障屏ナク、而シテ本船



ハ陸地ヲ距ル約三湮餘ノ沖ニ碇泊スルヲ以テ風波ヲ受クル最モ烈シク何レノ風向ニテモ十分ナル荷役整ハズ爲メニ多クハ片側荷役ノ不便ヲ忍ビ或ハ空シク碇泊セザル可ラザルニ至ル故ニ大形汽船ハ近來横濱ニ入港シ同港ヨリ舢舨ニテ貨物ヲ東京ニ輸送スルモノ益々多キヲ致シ昨今常ニ品川ニ投錨スルモノ如キハ僅ニ攝海丸多聞丸旺洋丸外數艘ニ過ギズ稍大ナル帆船ノ如キモ滿載シテ河内ニ入船シ能ハザルモノハ品川ニ假泊シテ若干ノ積荷ヲ舢舨ニ移シ船脚ヲ輕減シテ多ク曳船ニヨリ河内へ入著ス品川ヨリ永代橋迄ハ約六湮半ナリ。

且ツ右ノ船舶ニ對シテハ品川ニ在テ之ヲ取扱フ回漕店ナク凡テ東京ヨリ直接ニ船主或ハ取扱店ニテ積荷揚荷等ヲ差配スルモノニシテ必要ナル人夫ノ如キモ往時同地出入ノ船舶多カリシ場合ト異リ現今ハ其多數ヲ常備スルヲ無ク必要ニ際シテハ大森桐谷四谷或ハ遠ク横濱等ヨリ之ヲ募集スルモノニシテ不便實ニ甚シク又舢舨ノ如キモ品川荷役専用ノ舢舨トテハ殆ド之レナク悉皆京濱間使用ノモノヲ時ニ臨ミテ流用セリ此方法ニヨル汽船貨物ノ總噸數ハ

一ケ年分(自三十五年平均) 積荷 十七萬五千二百噸

ニシテ荷役所要時間ノ如キハ元ヨリ船舶ノ大小荷物ノ種類拔錨時間ノ都合等ニヨリテ區々タルノミナラズ殊ニ風波ノ影響多大ナルヲ以テ之ヲ一定シ能ハザレドモ假リニ凡ソ千五百噸ノ揚荷ト三百噸位ノ積荷ヲ爲ス汽船アリテ午前著港シタルキハ良好ノ場合ニ於テハ其積荷ハ本船入港前日ニ多ク小網町河岸邊ニテ舢舨ニ積入レ置キ本船品川ニ著港スルト同時ニ揚荷及積荷役ニ著手シ約二日間ニ本船荷役ヲ濟シ揚荷舢舨ハ深川或ハ小網町河岸等へ回著シ本船著日ヨリ凡ソ四日目ニシテ陸揚ヲ終了スルモノトス。而シテ貨物陸揚費ノ概略左ノ如シ。

一、本船人足賃

品目	割合	賃金	品目	割合	賃金
雜貨物	一個	七厘五毛	石炭	一噸	十四錢
穀類	百石ニ付	一圓八十五錢	石切	一噸	二錢五厘
粕類	一個	一錢五厘	木セメント	大樽	二錢五厘
食鹽	小大俵	三五厘八毛	材	百石	六圓



二、品川沖ヨリ貨物解賃定額

品名	數量	解賃	賃
穀物類	百石ニ付	四圓五十錢ヨリ	五圓迄
雜種貨物	同	同	同
麥類	同	同	同
食鹽	同	四圓六十錢ヨリ	五圓三十錢迄
魚油	同	五圓五十錢ヨリ	六圓迄
材木	千才ニ付	八圓五十錢ヨリ	九圓迄
石炭	一噸ニ付	三十錢ヨリ	三十二錢迄
			解船取曳船付

但本船豫定ヨリ延著ノ爲メニ生ズル待船料、或ハ都合ニヨリ夜間荷役等ノ爲メニ生ズル曳船其他臨時ノ費用ハ其都度取極メノ事トス。

三、陸揚人足賃

本船人足賃ト略同一ナリ。

然ラバ則チ東京港開始ト共ニ、現在品川荷役ノ大船ニ向ツテモ、亦其利益ノ

見ルベキモノアルヤ、略々以テ想像スルニ足ラン。

第三章 横濱港トノ關係

東京築港ノ價值ヲシテ更ニ明確ナラシメンガ爲メニハ、須ラク一方横濱港トノ關係ニ對シテ、其疑惑ヲ解カザル可カラズ。何トナレバ世人往々ニシテ口ヲ國家經濟ニ藉リ、簡單ナル推理ヲ楯ニ、全然東京港ノ必要ヲ否定シ去ラントスルガ如キモノアレバナリ。即チ其言ニ曰ク、現ニ横濱港ノ在ルアリ、僅々二十哩ノ距離ニシテ何ゾ更ニ新港ヲ築クノ要アラシヤ、是レ實ニ同港ノ衰微ヲ來シ、且ツ諸般ノ商工設備ヲ攪亂セシムルモノニシテ、國家經濟上甚敷不利益ヲ免レズト。寔ニ一應ノ理アルガ如シト雖モ、其所謂國家經濟上ノ利害ノ如キハ、未ダシカク無雜作ニ判定シ得可カラザルヲ如何。

東京港ノ開始ガ、横濱ヲシテ直チニ其盛運ヲ危フカラシムル虞アリトハ、論者ノ最モ憂フル處ナリ。此點ニ就テハ、余輩ハ別ニ信ズル處アリト雖モ、ソハ暫ク後ニ譲リ、先ヅ一應論者ノ言ニ同ジテ問ハン。シカク横濱港ノ存在ヲシテ危ブカラシムベキモノ、是レ即チ一方ニ東京港ノ價值ノ大ナルヲ示シ、且ツ其施設ノ、直ニ商工經濟上ノ要求ニ適合スル所以ナルヲ察知セシム可キ



ニハ非ザルカト。然ラバ即チ京濱二港ノ盛衰ハ二港自身ニ於テハ各大ニ悲喜スベキモノアリトセンモ、若シ之ヲ國家ヨリシテ觀レバ、明カニ經濟上ノ必要ニ由リテ起レル自然ノ推移ノミ。商工業上ノ利益ニ基ケル必然ノ發作ノミ。而シテ二港ノ消長如何ニ關ラズ、國家ハ直ニ其消長ヲ促ガスニ至リシ必要ニ對シ、之ニ相當スル經濟上ノ利益ヲ享クベキヤ論ナク、若シ故ラニ僻見ヲ持シテ此自然ノ大勢ニ抗スルニ於テハ、即チ却テ國家ノ發展ヲ阻害スベキヲ必セリ。

論者或ハ強テ右ノ經濟的要求ヲ以テ、其勢力微少ナリトセンカ、然リ其勢力ハ今日ノ我國ニ於テハ未ダ著大ナラザルノ感アラシ。即チ全國ヲ通ジテ未ダ何等ノ商港の新設備ヲ有セズ、且ツ大阪港ノ築設ヲ目シテ等シク不急工事タリトシ、又ハ其失敗ヲ臆測シテ冷評シ得ベキ程ノ時ニ於テハ、其必要敢テ甚敷切迫セリト云フ能ハザラン。サレド之レ果シテ何時迄カ能ク此ノ如キ。内外貿易ノ進歩年ト共ニ加ハリ、實業上ノ競争愈々激烈ナルヲ致サバ、貨物輸送費ノ少額ノ差ト雖モ、其齎ラスベキ結果ハ即チ莫大ナル經濟上ノ損益ニ關ス。而モ其繋ガル處ハ國家永久ノ利害ニシテ、單ニ築港費支出ノ不便

ノ數年ノミニシテ終ルガ如キニハ非ズ。乃チ今日未ダ經濟上ノ要求著大ナラザルノ觀アルモ、以テ數年ノ後ヲ推知スルニ足ラズ、況ンヤ直ニ百年ノ利害ヲ忖度スルオヤ、試ニ一度眼ヲ放チテ海外諸港ヲ見ヨ、滔々タル如上ノ趨勢ハ既ニ其盛衰ノ基礎ヲ動カシ、興亡ノ素因ヲ進メルニ非ズヤ。然ラズンバ則チ如何ニシテ漢堡ろつた。だむ、近時ノ發達ヲ得ン、如何ニシテあむすた。だむ、まんちえすた。だむ、興起ヲ見ン、將タ又如何ニシテぶりつせる、ぶりゆ。だむ、等ノ大膽ナル經營ヲ呼バン、苟モ國家經濟ヲ云爲シテ而モ尙此機運ヲ察セザルモノ、近クハ大阪港ノ開始ヲ俟チテ、其迂ヲ自覺スルヲ得バ幸ナリ。論者或ハ更ニ、横濱港ノ設備ヲ改良セバ、以テ大勢ニ抗スベシトナサンカ。右ノ改良ハ或程度迄同港内ニ於ケル大船出入ノ安全、海陸連絡ノ利便ヲ達スルヲ得ン、サレド京濱間ノ貨物輸送方法ハ、爲メニ幾何ノ改善ヲ得ベキカ。現在新橋驛發著貨物中、京濱間ノモノハ僅カニ五萬六千噸ナルノミニ對シ、一方京濱間水運貨物ハ即チ一年平均百七十四萬噸ヲ算ス。故ニ若シ之ヲシテ悉ク鐵道ノ便ニ依ラシメントセバ、其改良工事費ノ巨額ナル毫モ東京築港工費ニ讓ラザルベク、更ニ新橋ヨリシテ深川方面ニ運送スルノ不便ハ、水陸



共ニ甚敷ヲ免レズ。

且ツ縱令此ノ如キ施設ノ完成ヲ見ルモ、鐵道輸送ノ運賃ハ遂ニ水運ヨリ低廉ナルヲ能ハズ。即チ數條ノ鐵路ハ相竝デ岸頭ニ連ナルモ、大部分ノ貨物ハ運送費ノ經濟ヨリ打算シテ、依然舥舟運送ノ稚態ニ就クベキノミ。既ニ舥舟ノ不便ト危險トヲ避ケンコトヲ欲シテ這般ノ改良ヲ策シ、而モ其結果ハ尙舥舟ノ利ヲ思ハシムルニ終ラバ、是レ改良ニ非ズシテ改惡ノミ。故ニ此ノ如キハ畢竟一個ノ空想タルニ止マリ、到底實行シ得可ラザルノミナラズ、又或程度以外ハ斷ジテ國家經濟上ノ不利タルヲ云フニ憚ラズ。然ラバ則チ京濱間輸送ノ要アル貨物百七十四萬噸ハ、水上運送ノ方法ヲ改善スルニ非ザルヨリハ、到底以テ其經濟的利益ヲ圖ルヲ能ハズ、而シテ其方法ヲ問ハ、單ニ東京港開成ノ一アルノミ。彼ノ歐米諸市ガ假令最近ノ港ニ達スルニ鐵道ノ便完備セルニモ關セズ、尙直ニ海ニ通ズベキ新水路ヲ開キ、之ヲ改良センガ爲メニ極力勉メテ止ムナキモノ亦寔ニ之ガ爲メニシテ、若シ少シク近時内地深水港ノ興隆ニ察セバ蓋シ思半ニ過グルモノアラシ。

東京築港ノ擧ガ、國家百年ノ利益ニ繋リ、我國商工經濟上ノ必要ニ基キ、決シ

テ單ニ一都市ノミノ事業ヲ以テ目ス可ラザルコト、既ニ此ノ如シ。然ラバ則チ其築設ニ伴フ橫濱港ノ將來ハ如何。

之ヲ海外ノ狀況ニ觀ルニ、一般經濟上ノ大勢ハ、今ヤ雷ニ諸港ノ盛衰ヲ左右シ去ルノミナラズ、更ニ進ンデ海港ト内地深水港トノ必要ヲ區別シ、其特色ヲ確立セシムルノ域ニ達セリ。即チ前者ハ主トシテ定期郵船ノ發著ニ利シ、後者ハ專ラ貨物船ノ出入ヲ目的トナスベキコト是ナリ。而シテ事實ハ、恰モ彼ノ船舶ニ客船及貨物船ノ區別ヲ促シ、又ハ鐵道ニ於テ旅客及貨物ノ停車場ヲ區分スルヲ要スルト等シク、共ニ商工經濟ノ發展ニ伴フ必然的趨向ニ出デ、各般ノ交通機關ヲ通ジテ遂ニ之ヲ避クルコト能ハズ。

夫レ二者既ニ其特長ヲ異ニス、其發達ノ方面又同ジキヲ得ンヤ。即チ海港ハ電メテ世界交通ノ幹線ニ接セル海角ヲ占メ、專ラ旅客竝ニ急送輕量貨物ノ輸送出入ニ適スル施設ヲ完備シ、且ツ内地諸都市トノ鐵道接著ノ利便ヲ大ニスルニヨリテ發達スベク、内地深水港ハ却テ先ヅ中央市場ニ對スル位置ノ便宜ヲ主トシ、貨物揚卸シノ設備ヲ完整シ、且ツ内地各市場トノ水陸運送上ノ機關ヲ具備スルニヨリテ興起セザル可ラズ。



此ノ如キハ既ニ海外一般ノ經濟的大勢タリ。若シ畿テ京濱二港ニ見レバ、一ハ海洋ニ接セルノ利アルモ、未ダ一大市場タルノ實ナク、且ツ其地區狹隘ニシテ到底茲ニ商工業上ノ施設ヲ縱横ナラシムル能ハズ。他ハ稍内地ニ僻在スト雖、直ニ我國無比ノ中央市場ヲ成シ、且ツ其四周廣大ニシテ優ニ萬般ノ新經營ニ適ス。然ラバ則チ將來ニ於ケル兩者ノ關係ノ如キ、又直ニ右ノ大勢ニ見テ之ヲ推定シ得ザランヤ。

夫レ横濱港ノ興ルヤ、一ニ其地理的形勝ニ由レリ。而シテ茲ニ一大商港ヲ建設センガ爲メニハ、既ニ其要素ニ於テ甚シク缺クル處アリ、故ニ同港將來ノ發達ハ專ラ其地理的利便ヲ擴大シテ海港ノ特長ヲ發揮セシムルニアルベシ。東京港ノ興ラントスルハ、之レ其經濟的利便ノ爲メニシテ、稍内地ニ僻在セルノ不便ハ又免カル、能ハズ、故ニ其隆榮ハ主トシテ商工業ノ活動ヲ助長シ、貿易港ノ實利ヲ擧グルヨリシテ來ラザル可カラズ。是レ等シク其位置ノ自然ニ應ジ、其固有ノ特長ヲ増進セシムル所以ノ道ニシテ、假令故ラニ此ノ如クナラシメズトスルモ、二港併立ノ結果ハ自ラ此ノ如キ進路ニ出ヅベキヲ必シ、且ツ内地各市場ニ對スル勢力範圍モ、亦自ラ其距離ノ長短運送ノ便

否ニヨリテ截然區分セラルベキヲ疑ハズ。故ニ若シ卒然トシテ之ヲ見レバ、二港ノ利害相容レザルガ如キモ、更ニ之ヲ察スル片ハ、二者相俟ツテ初メテ一大港ノ面目ヲ完備スルヲ得ベク、即チ相互ノ利益ハ多ク牴觸スベキニ非ザルノミカ、却テ相依リ相利スベキヲ、尙もんとりゝるノくゑべつくニ於ケル(米、るゝあんノはゝづるニ於ケル(佛、まんちえすたゝノりぢあぶゝるニ於ケル(英、ぶれまゝゝはゝふえんノぶれゝめんニ於ケル(獨、漢口ノ上海ニ於ケル(支)ガ如キモノアルヲ必ス。

若シ更ニ顧ミテ横濱港頭現在ノ設備ニ察センカ、船客貨物ニ對スル海運聯絡ノ利便ハ未ダ多ク之ヲ認ムルニ足ラズ。故ニ今京濱二港相竝立シテ互ニ其特色ニ應ジ、其勢力圈ニ對シテ適切ナル經營ヲ爲サントスルモ、二港等シク其施設ノ多大ニシテ其工費ノ巨額ナルアリ、縱令相互ノ協力ヲ以テスルモ尙且ツ及バザルニ庶幾ク、而モ其效果ハ決シテ一日ニシテ擧グルヲ能ハズ。然ルヲ況ヤ其一ヲ以テ他ヲ蔽ハントスルガ如キ、既ニ其力ニ於テ堪フル能ハズ、又其時ニ於テ忍ブ可ラザルヲ如何、此故ニ今ニ於テ能ク二者ノ力ヲ致シ、且ツ國家ノ補助ニ俟チテ各自必要ノ經營ニ處シ、其發達ヲ期セシムル



ハ是レ實ニ我國商港ノ不備ヲ治メ、其改良ヲ早メテ以テ海運急劇ノ進歩ニ應ゼシムベキ當然ノ道タリ。國家經濟上ノ利益即チ茲ニ於テカ云フベシ。要スルニ今日尙橫濱港ノ利用スベキヲ説キ、又ハ東京港ノ成效ヲ危ブムガ如キハ、之レ只在來ノ習慣ヲ愛惜シ、若クハ己ガ佛ヲ以テ尊シト爲スノ陋見ノミ。今敢テ此以上ヲ説カザルベシト雖ドモ、若シ更ニ地方的利害ヨリシテ之ヲ爭フヲ許サバ、乃チ東京市ハ一層其主張ヲ唱導スベキ理由ヲ有ス。何トナレバ之レ明カニ自家ニ附隨セル當然ノ利益ヲ收メントスルニ外ナラザレバナリ。

#### 第四章 港ノ經濟

東京港ノ價值及橫濱港トノ關係ニシテ略々前述ノ如クンバ、則チ斷ジテ其遂行ノ利ナルヲ見ル、何ゾ一時ノ負擔ニ遲疑シテ以テ百年ノ大計ヲ逸スルヲ爲サン。況ンヤ其經營ノ如キモ經濟上敢テ世人ノ想像セルガ如ク、シカク困難ナラザルニ於テオヤ。

蓋シ商港經濟ノ獨立經營シ得ベキハ、海外諸港ノ事例一トシテ之ヲ證セザルナシ。然ラザルモ先ヅ現在如何ニ多數ノ港ガ、敢テ中央政府ノ協力ヲ俟タズ、優ニ都市有利事業トシテ成效シ、且ツ或者ノ如キハ簡人又ハ會社ニ依リテ單獨經營セラレツ、アルカニ見バ、以テ直ニ其左券ト爲スニ足ラン。即チ當初其工費ノ醵集ニ際シテハ若干ノ困難アルベシトセンモ、一度其港ヲ開クニ至ラバ、賃地料、賣却地代、竝ニ船舶貨物ニ賦課スル港稅等ノ收入ヲ以テ、一方港ノ維持修繕ニ充ツルト共ニ、他方工費償還及ビ利子支拂ヲ辨ジ得ベキハ、何レノ港ヲ問ハズシテ比々皆此ノ如シ。而モ其貿易ハ年ト共ニ増加シ、其支出ハ却テ漸次減少スルニ至ラバ、其收入ハ更ニ以テ改善擴張工事ニ資スベク、又ハ早晚積極的利潤トシテ之ヲ處置シ得ベキヲ必ス。

但シ人或ハ之ヲ以テ其利益ヲ説クト誇大ニ失セリト爲シ、海外諸港ノ經濟ト雖モ亦常ニ多大ノ利潤ヲ伴ヘルニ非ズト云ハンカ。然リ、商港經營ハ其放資ノ巨大ナル割ニ、未ダ以テ一般好望ナル營利事業ニ比肩スベキ程ノ利潤ヲ擧グルヲ見ズ、故ニ其事業自身ヲ以テ直ニ非常ニ有利ナルモノトシテ考フ可ラザルハ事實ナリ、然レモ之レ固ヨリ其所ナリ。何トナレバ此種ノ公共事業ニ在リテハ、性質上其收益ノ多キヲ貪ルヲ許サズ、否却テ之ヲ獨立維持ノ必要程度ニ制限シ、僅カニ若干ノ過剩ヲ蓄積シテ施設ノ改善擴張ニ資セ



シムルヲ旨トシ、以テ一方船舶貨物ニ對スル賦課ノ輕減ヲ圖リ、一般ノ利益ヲ増大セシメザル可ラザレバナリ。海外商港ノ經營實ニ此方針ニ出デ、更ニ諸港ノ競争ニ由リテ愈々其必要ヲ確實ナラシムルアリ、是レ其歴史ニ於テ賦課税目及税率ノ屢々輕減セラレタルヲ認ムル所以。彼ノ卒然トシテ收支ノ現狀ニ見、直ニ其利益ノ多大ナラザルヲ以テ之ヲ非難セントスルガ如キハ、蓋シ大ニ誤ラズンバアラズ。

之ヲ彼ノ箇人又ハ會社ニ屬スル諸港ニ見ルニ、近時其收益ノ著シク減少シタルハ事實ナリ。或者ノ如キハ營利會社トシテ無配當ノ苦境ニ陥レルサヘ之アリ。サレド之レ畢竟箇人、又ハ會社ノ營利ニ汲々トシテ、公共ノ利益ヲ無視スルニ鑑ミ、他ニ市有又ハ國有港設備ヲ起シテ其獨占的專横ヲ殺ギ、若クハ幾多競争港ノ興起ニ逢ヒテ自ラ港稅ノ輕減ヲ強ヒラレタルガ爲メニシテ、自然一營利事業トシテハ其存立ヲ危フカラシムルニ至レルモノアリトセンモ、直ニ以テ港ノ獨立經營シ能ハザルノ證左ト爲スヲ得ズ。蓋シ港稅ハ船舶貨物ニ對スル重大ノ負擔タリト雖モ、若シ其負擔額ニシテ、築港以前ノ碇泊費、運送費等巨多ノ費額ヲ超過セルニ於テハ、即チ既ニ若干

ノ輕減ヲ得タルニ等シク、更ニ之ニヨリテ愈々港頭設備ノ改善擴張ヲ進ムルヲ得バ、船舶貨物ニ與フル利益ハ時ト共ニ益々増加スベシ、之レ海外諸港ノ現今凡テ其獨立維持ノ基礎ヲ港稅ニ置ケル所以。縱令將來ニ於テハ、漸次其輕減ヲ講ゼザル可ラズトスルモ、今日未ダ港頭ノ施設完全ノ域ニ達セス、其經營上巨大ノ放資ヲ必要トスルノ時ニ在リテハ、全ク之ヲ無視スルコト能ハザルヲ見ルベシ。即チ既ニ港稅ヲ以テ其經濟ヲ率ス、之ヲ營利事業トシテ其擅斷ニ委スルハ斷ジテ不可ナリト雖モ、若シ專ラ公共ノ利害ニ鑑ミ、港ノ平時ト擴張ノ場合ニ應ジ、伸縮自在ニ之ヲ適用スルヲ得バ、港ノ獨立經營ニ於テ毫末ノ遺憾ナキハ元ヨリ、船舶貨物ノ經濟ニ向ツテモ、亦何等ノ苦痛ヲ與フルモノニ非ズ。試ニ著名ナル諸港ノ稅率ヲ舉グレバ左ノ如シ。

船舶登簿一噸ニ對スル港稅

あんといわいぶ (河沿岸壁使用) 同 (泊船渠使用)	燈標稅	港稅	市稅	船渠稅	岸繫稅	檢疫稅	水濟稅	難	合計
	錢厘	錢厘	錢厘	錢厘	錢厘	錢厘	錢厘	錢厘	錢厘
	1	1	1	210	126	1	1	1	216



あむすたーだむ	一四、四	一四、四	一四、四	一四、四	一四、四	一四、四	一四、四	一四、四	一四、四
ろつたーだむ	一五、〇	一五、〇	一五、〇	一五、〇	一五、〇	一五、〇	一五、〇	一五、〇	一五、〇
はんぶるぐ (河内繫泊)	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇
同(繫船岸使用)	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇	一六、〇
ぶれまーはーふえ	一四、六	一四、六	一四、六	一四、六	一四、六	一四、六	一四、六	一四、六	一四、六
るあーざる	一五、二	一五、二	一五、二	一五、二	一五、二	一五、二	一五、二	一五、二	一五、二
か	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七
どんけるく	六、一	六、一	六、一	六、一	六、一	六、一	六、一	六、一	六、一
るーあん	二一、〇	二一、〇	二一、〇	二一、〇	二一、〇	二一、〇	二一、〇	二一、〇	二一、〇
ろんどん	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇	一一、〇

但シ予ハ今之ヲ以テ直ニ我東京灣ノ場合ニ於ケル港税ノ必要又ハ其賦課率如何ヲ議セントスルモノニ非ズ。只商港經營ヲ以テ直ニ一般營利事業ト同一視スルノ誤謬ヲ指摘シ、且其獨立維持ニ關シテハ、毫モ困難ナラザル所以ヲ説明シ得バ足ルノミ。

若シ夫レ築港ニ附帶シテ優ニ營利的性質ヲ具スルモノヲ擧グレバ、其事業他ニ極メテ多シ。即チ起重機、秤量機等ノ諸機械、及倉庫、上屋、荷役場等ノ貸付ノ如キ、水先案内及ビ曳船業ノ如キ、船舶給水及夜業點火ノ如キ、臨港鐵道ノ

營業ノ如キ、又ハ修船渠業ノ如キ、何レモ當初ノ設備費ニ對シテ十分ノ利潤ヲ生ズベキヲ必ス。之レ海外諸港ノ多クハ是ヲ築港經營者ノ掌裡ニ收メ、其利潤ヲ以テ築港費財源ノ一部ヲ填補シ、以テ益々其獨立維持ノ基礎ヲ確立セシムル所以。コモ亦築港經濟上ノ重要ナル問題トシテ他日ノ研究ヲ俟タザル可ラス。

夫レ築港ハ其事業自身ノ收利ヲ以テ目的ト爲スモノニ非ズ、其利益ハ却テ專ラ間接ナル方面ニ存シ、其價值ハ廣大ナル範圍ニ及ブ。然ラバ則チ單ニ港ノ經濟如何ニ見テ利害ヲ云爲セントスルモノ、抑モ末ナリト雖モ、其事業ノ宏大ナルニ拘ラズ、尙能ク獨立維持シ得ベキモノ、又畢竟其經營ヲ促スベキ第一因タラザランヤ。

以下更ニ少シク諸港ノ經濟事情ヲ擧ゲテ説明ノ足ラザルヲ補ハン。

第一、箇人又ハ會社ニ屬スルモノ

之ヲ英國ニ見ルニ、其商港ハ悉ク個人商社、鐵道會社、汽船會社、又ハ市ノ經營スル處ニ係リ、若クハ港事會議所ト名ヅクル委員組織ノ下ニ獨立シ、政府ハ單ニ其新計畫ニ際シ又ハ工事費公債募集等ニ對シテ、之ヲ許否スルニ止マ



ルノミ。

即チ箇人ノ專有ニハぐらんとん、しりー、つるーんノ三アリ。特別ナル會社ニ屬セルモノニハろんどん、まんちえすたー、かーぢつふ、あーどろつさん、みるふおると、及ビぶりまうす等ノ十ヶ所ヲ舉グベク、鐵道又ハ汽船會社ニ屬シテハぐりむしー、はる、ふおーくすとん、ばろー、ぐーる等又十ヶ所ヲ算ス。

米國ニ於テハ、近年ニ至ル迄船渠棧橋等ノ設備ハ殆ド全部私有ナリシト云フベク、左ニ其主要ナルモノヲ舉グルモ、鐵道會社及個人ノ施設ニ成レルモノニハぼーとらんど、ぼすとん、にゆーぼーとにゆーす、さざあな、ちやーるすとん、がるぞえすとん等アリ。市有、鐵道會社有、及私有設備ノ混在セルモノニハ、紐育、費府、ばるちもーあ、のるふおるく、にゆーおーれあんす等アリ。歐洲大陸ニ於テハ殆ド是等ノ私設ヲ見ル能ハズト雖、尙佛國まるせーゆ港内ニ船渠及倉庫會社ノ獨力其特許區域内ノ經營ヲ計レルアリ、獨逸ノぶれーめん港ハ市之ヲ築設セリト雖、其營業ハ之ヲ一會社ニ委託シ、丁抹ノこーべんはーげん自由港モ、其陸上設備ノ建設ト、港ノ營業トヲ併セテ株式會社之ヲ擔當ス。而シテ白耳義ニ於ケルぶりゆつせる及ぶりゆーぢ二新港ノ組織亦

之ニ類ス。

夫レ箇人又ハ會社事業トシテ、獨力一港ノ經營ニ任ジ、又ハ其設備ヲ專有スルガ如キ、其施設ノ利害得失ハサテ措キ、兎ニ角其事例ノ少ナカラザルニ見レバ、以テ其事業ノ經濟上優ニ獨立シ得ベキモノタルヲ察セザランヤ。

左ニ其一ニ取リテ收支ノ關係ヲ述ベンカ。

ぶれーめん倉庫會社

ぶれーめん港ハ全部市ノ築設ニ成レルモ、其經理ハ舉ゲテ之ヲぶれーめん倉庫會社ニ一任セルモノニシテ、會社ハ證據資金五十萬馬克ヲ以テ其業ヲ營ミ、規定ニヨリ毎年先ヅ純益ノ七割五分以上ヲ市ニ納付ス。而シテ一九〇〇年及一九〇一年度ノ營業成績ニ由レバ、會社ノ配當ハ年七分ニシテ、市ヘノ納付金ハ其陸上設備費六百三十萬圓ニ對シテ四分七厘ニ相當セリ。

試ニ一九〇一年度ノ會社ノ營業報告ヲ示セバ左ノ如シ。

(一)營業決算書

一 收入ノ部

繫船岸營業

帝都時代ノ港灣



起重機及鐵道使用料ヲ含ム  
 倉庫營業  
 荷造料等ヲモ含ム  
 雜收入  
 合計  
 二、五三六、七〇五

支出ノ部

監理費  
 保險料  
 營業費  
 繫船岸營業  
 倉庫營業  
 維持費  
 建物機械器具修繕  
 修繕費積立金  
 合計  
 當季收益金  
 六三一、二八〇

(二)收益配當表

摘要	收益金	配當額	
		州廳	會社
起重機及鐵道使用料ヲ含ム	一、五三一、六七五		
倉庫營業	九八八、六〇四		
荷造料等ヲモ含ム	六、四二六		
雜收入	二、五三六、七〇五		
合計	一、四四、八六一		
監理費	八二、四五六		
保險料	一、九〇五、四二五		
營業費	六三一、二八〇		
繫船岸營業	一、一五〇、六二一		
倉庫營業	三三三、〇七七		
維持費	一、四八三、六九八		
建物機械器具修繕	一、三九、四三五		
修繕費積立金	五四、九七五		
合計	一、九〇五、四二五		
當季收益金	六三一、二八〇		

當季收益金 六三一、二八〇  
 社員賞與金(二分) 一二、六二六  
 借入資金利子 五〇〇、四三三  
 純益金配當割 五一三、〇五九

摘要	收益金	配當額	
		州廳	會社
(一)初メノ五萬馬克ニ對シ	三七、五〇〇		一一、五〇〇
(二)次ノ五萬馬克ニ對シ	四〇、〇〇〇		一〇、〇〇〇
(三)更ニ其殘額ニ對シ	一五、四八八		二、七三三
純益金	九二、九八八		二五、二三三
總配當割合	六一三、二八〇		三七、八五九
右總配當割合	一、〇〇〇		〇、〇〇六
一九〇〇年度	六七〇、六一六		四四、八二三
右總配當割合	一、〇〇〇		〇、〇〇七

(三)損益對照表(一九〇一年末)

一、益ノ部

帝都時代ノ港灣



東京市史稿

前年度純益繰越高

本年度收入

會社ノ財産ヨリノ收入

營業純益

合計

一、損ノ部

税金及雜費

純益

本年度

前年度繰越

純益ノ配當

配當額年七分

勞働者貸與資金

扶助資金

謝禮金

次年度繰越金

小計

合計

(四)貸借對照表(一九〇一年末)

前年度純益繰越高	1106
本年度收入	26964
會社ノ財産ヨリノ收入	25233
營業純益	54937
合計	82740
税金及雜費	3901
純益	48296
本年度	2740
前年度繰越	51036
純益ノ配當	35000
配當額年七分	2000
勞働者貸與資金	6000
扶助資金	4716
謝禮金	3320
次年度繰越金	51036
小計	54937
合計	82740

借方

資本

特別豫備資金

勞働者貸與資金

扶助資金

損益決算(益)

合計

貸方

資本ニ對スル債券

保險契約

株銀行貯金及現金

合計

更ニぶれ一めん市ハ直接ぶれま一は一ふえん港ヲ築設經營セルヲ以テ、今之ヲ附記スベシ。

(二)一八二八年以後今日迄ノ築港土木費(維持修繕費ヲ除ク)

約百五十萬圓

一、古 港

二〇七

帝都時代ノ港灣



一、新 港

一、かいざい船渠第一期工事

一、同 擴張工事

一、かいざい修船渠工事

合 計

二千五百萬圓

三百萬圓

四百萬圓

九百萬圓

三百萬圓

(二)收支計算

年次	收 入	經 費	利 潤
一八九五	一七二、八〇〇 <small>円</small>	二〇六、八九〇 <small>円</small>	不 足 三四、〇九〇 <small>円</small>
一八九六	一六二、〇六〇	二二四、四七〇	不 足 六二、四一〇
一八九七	三二五、一五〇	二七四、七七〇	足 五〇、三八〇
一八九八	四八〇、八八〇	三六二、四〇〇	足 一一八、四八〇
一八九九	五三九、二三〇	三四五、一六〇	足 一九四、〇七〇

船渠及倉庫會社ノ收支

佛國まるせいゆ港内ニ在ル該會社ハ、一八五六年以後特許ヲ得テ自ラ二泊船渠及附屬陸上設備ヲ築造シ、全ク獨立シテ其經營ヲ圖ルモノニシテ、營業ハ一八六四年ヲ以テ開始シ、更ニ一八七一年以後修船渠營業ヲ併セ行ヘリ、

(其放資額ハ一八九九年迄ニ一千四百六十萬圓ヲ算ス)今該社毎年ノ利益配當率ヲ擧グレバ左ノ如シ。

年次	利益配當率	年次	利益配當率	年次	利益配當率
一八六四	五分	一八七五	五分	一八八六	五分
一八六五	六分	一八七六	五分四厘	一八八七	五分
一八六六	三分六厘	一八七七	五分	一八八八	五分四厘
一八六七	二分八厘	一八七八	七分	一八八九	五分二厘
一八六八	三分二厘	一八七九	七分	一八九〇	五分二厘
一八六九	二分	一八八〇	七分	一八九一	五分二厘
一八七〇	四分	一八八一	七分	一八九二	五分
一八七一	四分	一八八二	七分	一八九三	五分
一八七二	四分	一八八三	七分	一八九四	四分
一八七三	四分六厘	一八八四	五分	一八九五	三分六厘
一八七四	五分	一八八五	五分	一八九六	三分六厘

由來低利ナル海外ニ於テ五分乃至七分ノ配當ヲ爲スモノ、以テ築港ノ有利事業タリ得ベキヲ見ルベシ。而シテ近年其配當ノ甚敷減少シタルハ、之レ該會社  
帝都時代ノ港灣



社ノ獨占ヲ制シテ公共ノ利益ヲ擧ゲンガ爲メニ、一八八四年以後廣大ナル新設船渠ニ對シ、同地商業會議所ノ新ニ自ラ各般ノ設備ヲ整へ、之ト競争シ初メタルニ由ルナリ。

左ニ同會社一八九六年末ノ收支決算ヲ擧ゲンニ、

(一)貸借對照表

起業費	五九、三三一、四三五 <sup>法</sup>
社債及株券償還濟	二、六四一、六七七
差引	五六、六八九、七五八
借方勘定ヨリ	
各種債券	二、七九七、四三四
合計	五九、四八七、一九三
株券及社債	三九、〇〇〇、〇〇〇 <sup>法</sup>
株券七萬八千株	一七、六三二、五〇一
合計	五六、六三二、五〇一

社債及株券償還額

二、六四一、六七七

貸方勘定ヨリ

五三、九九〇、八二四

規定積立金	一、五〇〇、〇〇〇
準備金	三〇七、〇五七
養老基金	九八九、四二〇
本年度養老基金追加	四七九
雜目	一、七三二、二六六
合計	四、五二九、二二二
本年度積算	一、五三六、四八〇
内	
本年十二月一日、七萬五千九百十	
一株ニ對シ七法半宛ノ内渡シ金	五六九、三三三
差引	九六七、一四七
總計	五九、四八七、一九三

(二)一八九六年度收支決算

營業收入	八、三二九、五一七 <sup>法</sup>
營業費	五、六五九、一二九
帝都時代ノ港灣	二二一



營業純益  
預金利息  
總益金

二、六七〇、三八八  
四、三八九  
二、六七四、七七七

支出ノ部

社債利息並ニ償還  
公債償還  
市ヘノ納附年金  
養老基金利息  
支出合計  
本年度純益  
前年度繰越高  
合計  
分配  
配當金一株付十八法  
殘金  
準備金組入  
次年度繰越金  
小計

九六二、四一〇  
七一、五〇〇  
一〇〇、〇〇〇  
四五、七一八  
一、一七九、六二八  
一、四九五、一四八  
四一、三三一  
一、五三六、四八〇  
一、三六六、三九八  
一七〇、〇八一  
一一九、二四三  
五〇、八三九  
一七〇、〇八一

ろんどん港

現在ノ倫敦港ハろんどん、ゑんど、いんぢあ船渠會社、東西印度船渠會社及ろんどん、ゑんど、せんとかざりん船渠會社ノ一八八九年ヲ以テ合同シタルモノ竝ニされ、みるおゝる二船渠會社ノ各自獨立經營セル處ニシテ、其放資總額ハ實ニ二億二千八百萬圓ニ達セリ。サレドされ、船渠會社ノ外ハ、其經濟事情多年紛糾ヲ極メ、營利會社トシテハ殆ンド堪ユ可カラザルモノアリ、之ヲ株券ノ時價ニ見ルモ、

一九〇一年四月廿三日ニ於ケル各船渠會社株ノ市價

株券發行價格	市場價格	發行價格ニ對スル市價ノ割合	
ろんどん、ゑんど、いんぢあ船渠會社	一八、五八三、〇三九 <sup>磅</sup>	一、二、八九二、二三五 <sup>磅</sup>	〇、六九
みるおゝる	二、〇九四、一五七	一、五〇八、六六四	〇、七二
され	二、一二四、一〇五	二、七二七、五四九	一、二八

ヲ示シ、利益配當ノ如キ殆ド云フニ足ラズ。乃チ近年是等ノ諸會社ヲ買收シテ港事會議所組織タラシメントスルノ希望漸ク盛ナルヲ致シ、著々之ニ對スル調査ノ進行セルヲ見ル。



今試ニ二大船渠會社近年ノ收支ヲ擧ゲンニ、

(一)ろんどん及せんとかざりん船渠會社

	純益	總放資額累計	純益(百分割)	優先株ニ對スル配當(百分割)	普通株ニ對スル配當(百分割)
一八六六	三三九、六四九	八、六四六、六六二	三、九二	種々	三、五〇
一八六八	二九四、四六九	八、六六〇、九八一	三、三九	同	三、七五
一八七〇	三二四、八四一	八、五五七、七五八	三、七九	同	二、七五
一八七二	三六一、三七〇	八、六二四、六三三	四、一八	同	三、〇一
一八七四	三八五、四四九	八、六九一、五七九	四、四三	同	四、〇〇
一八七六	三四七、三二〇	八、八九〇、七五一	三、九〇	同	三、二五
一八七八	三〇四、二八八	九、二七三、〇七七	三、二八	同	三、〇〇
一八八〇	三一九、一二四	九、七八三、八七五	三、二六	同	三、〇〇
一八八二	三九〇、四三九	一〇、〇一八、四六七	二、八九	同	二、二五
一八八四	三二五、三六五	一〇、一七二、七一七	三、一九	同	二、五〇
一八八六	二九五、八九九	一〇、六八九、四七四	二、七六	同	一、〇〇
一八八八	二三六、一一三	一〇、七二〇、八一六	二、二〇	同	一、〇〇
一八九〇	二六七、八六四	一〇、六二七、一一一	二、五二	同	一、二五
一八九二	三五五、一五四	一〇、六三一、九四三	三、三四	同	二、五〇

(二)東西印度船渠會社

	純益	總放資額累計	純益(百分割)	優先株ニ對スル配當(百分割)	普通株ニ對スル配當(百分割)
一八九四	三二二、九八〇	一〇、六八四、五一七	三、〇二	同	二、〇一
一八九六	三三五、四〇七	一〇、七二六、一四六	三、一二	同	二、二五
一八九八	三四五、七二〇	一〇、六九一、七七九	三、二三	同	二、五〇
一八九九	三五三、一六二	一〇、六九二、九五〇	三、三〇	同	二、五〇
一八六六	一五四、九六六	二、〇六五、六六八	七、五〇	種々	七、〇〇
一八六八	一三二、七四八	二、〇六五、六六八	六、四三	種々	七、〇〇
一八七〇	一三七、六九二	二、五八五、五〇〇	五、三三	種々	六、〇〇
一八七二	一一〇、四八五	二、六七五、五〇〇	四、一三	種々	五、〇〇
一八七四	一五九、八八一	二、七〇五、五〇〇	五、九一	種々	六、〇〇
一八七六	一六八、五八七	三、一〇六、九七一	五、四三	種々	六、〇〇
一八七八	一七二、〇四一	三、一八〇、四三八	五、四一	種々	五、五〇
一八八〇	一四七、四七二	三、三五一、六五一	四、四〇	種々	四、五〇
一八八二	一三四、三五三	三、五九六、三〇五	三、七三	種々	四、二五
一八八四	一四一、二九二	四、二三七、四六五	三、三三	種々	四、五〇
一八八六	六九、五六六	五、六九四、六一七	一、二二	種々	一、五〇



一八八八	一七、五六六	五、七八五、八七二	〇、三〇	〇、〇〇	〇、〇〇
一八九〇	五八、九八二	六、〇八九、〇〇三	〇、九七	四分以下種々	〇、〇〇
一八九二	一五三、九九七	五、八二八、八四四	二、六四	九分以下種々	〇、〇〇
一八九四	一二〇、一〇九	五、八三八、七五三	二、〇六	四分以下種々	〇、〇〇
一八九六	一三〇、七〇一	五、九〇五、二七七	二、二一	同	〇、〇〇
一八九八	一四五、二〇三	六、八〇〇、一八一	二、一四	同	〇、一七
一八九九	一五八、六三四	六、九一四、三六三	二、二九	同	〇、五〇

但シ右ノ二船渠會社ハ一八八九年以後合同シテ其業ヲ營メルモノニシテ、其合同收支ハ即チ左ノ如シ。

(三)ろんどん及いんぢあ船渠會社收支計算表

年	收	入	經	費	收	益
一八八八	一、六二八、六六五	一、二〇一、七三二	一、二〇一、七三二	四二六、九三三	四二六、九三三	
一八九〇	一、七六七、一六五	一、三四〇、一七三	一、三四〇、一七三	四二六、九九二	四二六、九九二	
一八九一	一、七三三、二三八	一、二〇〇、六五七	一、二〇〇、六五七	五三二、五八一	五三二、五八一	
一八九二	一、八二五、八三五	一、二五四、四六六	一、二五四、四六六	五七一、三六九	五七一、三六九	
一八九三	一、六六一、五五四	一、一八三、三七七	一、一八三、三七七	四七八、一七七	四七八、一七七	

年	收	入	經	費	收	益
一八九四	一、六六五、六二九	一、一六五、二〇七	一、一六五、二〇七	五〇〇、四二二	五〇〇、四二二	
一八九五	一、六九三、六一四	一、二〇〇、〇六一	一、二〇〇、〇六一	四九三、五五三	四九三、五五三	
一八九六	一、七二二、七四四	一、二〇三、四七九	一、二〇三、四七九	五一九、二六五	五一九、二六五	
一八九七	一、七六二、八〇一	一、二一三、〇二四	一、二一三、〇二四	五四九、七七七	五四九、七七七	
一八九八	一、七〇四、九二五	一、一六六、九一三	一、一六六、九一三	五三八、〇一二	五三八、〇一二	
一八九九	一、七四五、九六五	一、一八九、一二四	一、一八九、一二四	五五六、八四一	五五六、八四一	

若シ更ニ最近一年ニ於ケル各會社ノ收支計算ヲ示サバ、  
(四)一八九九年ろんどん港各船渠會社收支計算表

項目	收入合計	經費合計	收	益
ろんどん、えんど、いんぢあ船渠會社	一、七四五、九六五	一、一八九、一二四	五五六、八四一	
されー船渠會社	三四一、二六二	二四〇、一六五	一〇一、〇九七	
みるおーる船渠會社	二二五、八五六	一八二、一八一	四三、六七五	
總計	二、三三三、〇八四	一、六一一、四七〇	七〇一、六一三	

右ノ如キ三大船渠會社ヲ買收シテ、新ニ港事會議所ヲ起サンガ爲メニハ、先ヅ二億五千萬圓以上ノ基本債務ヲ負擔セザル可ラズ、即チ一年ノ利子ノミ  
帝都時代ノ港灣



ニシテ九百萬圓ニ近ク、寔ニ容易ノ業ニ非ズトス。只其調査ノ進行ハ甚ダ趣味アル事實タルベキヲ以テ、左ニ右會議所ノ經費豫算ニ對スル研究ノ一ヲ擧ゲン。

(一)ろんどん港事會議所收支豫算

收入ノ部

各船渠總收入(現在ノ船舶噸稅等)	二、三一三、〇八四 <sup>磅</sup>
港 稅(出入貨物ニ對スル新稅)	八九九、七四一
水先案内料、プーイ使用料、燈稅ハ未詳、但シ其收支相殺スルモノト假定ス。	三、二二二、八二五
總計	三、二二二、八二五

支出ノ部

各船渠總支出(現在ノ支出額ニヨル)	一、六一一、四七〇
てゝむす下流維持費	六六、六〇〇
水上警察費	二一、七〇〇
總計	一、六九九、七七〇
總益額	一、五一三、〇五五

(二)負債額處分法

各船渠財産評價額總計(一九〇一年四月廿三日ノ市價ニヨル)

一七、七二八、四五〇<sup>磅</sup>

普通株券	四、八五一、五四四 <sup>磅</sup>
其他ノ株券	一二、八七六、九〇六
合計	一七、七二八、四五〇
普通株ノ買入ニ對シ價格ノ一割ヲ見込ム	四八五、一五四 <sup>磅</sup>
此合計	一八、二一三、六〇四

附加支出

特別浚深	二、〇〇〇、〇〇〇 <sup>磅</sup>
岸壁擴張	二、〇〇〇、〇〇〇
船渠擴張改良	三、〇〇〇、〇〇〇
てゝむす河監理公債	九〇、〇〇〇
合計	七、〇〇〇、〇〇〇

港事會議所ノ基本債務	二五、三〇三、六〇四
其利子(三分五厘ト見積ル)	八八五、六二六
同上一年ノ收益額(前掲)	一、五一三、〇五五
差引一年ノ純益額(債務償還及噸稅輕減ニ充ツベキモノ)	六二七、四二九
まんちえすたゝ港	六二七、四二九

同港ニ關スル事情ノ一端ハ既ニ之ヲ説ケリ、故ニ以下只其收支計算ヲ述ブベシ。



(一) 收入計算表

収入額 借入金ヨリノ 収入ヲ除ク	支出額(借入金ヨリノ 支出ヲ除ク)	
	經常費	債務利子支拂
一八九四	七八、〇七六	三〇七、六三九
一八九五	一一五、三二九	三二一、二八〇
一八九六	一八二、二六六	三一四、四八五
一八九七	一八六、五五〇	三一四、四八五
一八九八	一七六、八九七	三一四、四八五
一八九九	一九一、一六五	三一六、四八五
三一一、一九七		

(二) 債務處辨表

本年度ニ於ケル借入金	借入金ヨリ支出經費	年度末ニ於ケル債務總額
一八九五	三六八、〇六九	七、四〇七、〇〇〇
一八九六	六七、三四九	七、四〇七、〇〇〇
一八九七	六、六二五	七、四〇七、〇〇〇
一八九八	二〇、四九九	七、四五七、〇〇〇
一八九九	六五、七六七	七、四五七、〇〇〇
五〇、〇〇〇		七、四五七、〇〇〇

(三) 一八九九年ノ收支計算表

収入ノ部		支出ノ部	
一輸出入噸稅	四、一五八	一維持修繕費	六一、七五七
一其他ノ雜種稅	二三一、七三五	一點燈費	二、二一二
一貨料其他	二二、二一五	一俸給	二三、四七三
一雜收入	五三、〇八七	一廳費	二二、〇六八
總計	三一一、一九七	一雜支出	八一、六五五
		小計	一九一、一六五
		社債利子支拂	三一六、四八五
		總計	五〇七、六五〇

第二、市事業ノモノ

箇人又ハ會社有諸港ハ、一般ニ不便、不秩序、不經濟等、其弊害ノ免ル可ラザル



モノアリ、是レ英國ニ於テ近時此種ノ新起業ヲ許可セズ、且ツ漸次其權利ヲ買收シテ、市有又ハ港事會議所組織タラシメントスルノ方針ヲ採ルニ至レル所以ニシテ、即チ現時市有ニハ、ぶりすとる、わいまうす、ぼーつまうす等其數二十ヲ算シ、港事會議所有ニハ、りづあぶーる、ぐらすごー、にゆーかつする、さんだーらんど、ぐりーのつく、りーす等、大小ヲ合セバ七十港以上ニ達ス。就中港事會議所ハ、直接、港ニ關係アル營業者團體、及市會ノ撰出セル委員ヲ以テ組織シ、且ツ多クハ市長ヲ推シテ會頭トナシ、港内百般ノ施設悉ク其經營ニ係ルモノニシテ、何等他ノ掣肘ヲ容レズ、從テ其效績最モ顯著ナリトス。而シテ濠州ニ於ケルしどに、めるぼるん等ノ行政又之ニ類ス。米國ニアリテモ、近時商工業上ノ發達ヲ増大センガ爲メニ、諸港等シク其革進ヲ講ゼザルナク、即チ紐育、費府、にゆーおーれあんす等ハ、率先シテ市有主義ヲ標榜シ、桑港ハ既ニ其全部ヲ州有ニ歸シ、ぼすとんモ亦近ク州有、又ハ市有トシテ其改良ヲ圖ラントセリ。和蘭及白耳義二國ニテハ、政府ハ水路ノ改良維持ニ任ジ、商港ノ經營ハ専ラ市ヲシテ之ニ當ラシムルヲ常トス。即チ宏壯ナルろつたーだむ、あんとわー

ぶ及あむすたーだむノ如キモ、畢竟一都市ノ力ニ成レリ。獨乙ノ二大商港タル、漢堡及ぶれーめんノ如キモ、亦一ノ市事業ニシテ、正當ニ之ヲ云へバ各其州ノ事業ニ屬スト雖、二州ノ廣袤殆ド二市ト撰ブ處ナキヲ以テ、州有即チ市有タルニ等シ、其施設ニ要セシ工費ハ、過去二十年間ニ於テ、漢堡ハ實ニ一億五千萬圓、ぶれーめんハ即チ七千萬圓トナス。其他すてっちん、だんち、ひノ如キ、けるん、ぢゆ、せるどるふ、ぢゆいすぶるひ、るーるおるとノ如キ、重要ナル工事ハ何レモ其市ノ經營ニ成レリ。其他、那威、瑞典ノ沿海諸市ハ、舉リテ船渠埠頭ヲ所有シ、西班牙ノばるせるな港ノ如キ、露國ノりが市ノ如キ、亦市ノ活動ニ依リテ、近時等シク壯大ナル經營ヲ自ラセリ。左ニ其一ニ例セシ。

## 紐育港

紐育市ノ埠頭棧橋ハ、當初殖民時代ニ於テ、特ニ市ノ監理ニ委セラレタリシモノナリト雖、爾後河岸地ノ一半ハ種々ノ口實ノ下ニ私有ニ歸シ終レルノ狀アリ。仍テ市ハ一八七〇年五月ヲ以テ新ニ船渠部ヲ設置シ、私有船渠ノ取締ニ任ズルト共ニ、一方之ヲ收メテ漸次市有設備ノ擴張ヲ圖レリ。今該部



創設以後一八九八年末迄ノ總收支ニ見ルニ、

支 出 總 額	四〇、五三一、七六八・四五
内	
工 事 費	二三、三八三、〇七五・一六
私有棧橋等買上料	九、三九九、九九〇・七二
修繕及維持費	三、八一〇、一四六・三三
俸給及廳費	三、九三八、五五六・二四
收 入 總 額	四三、八〇一、六二八・三二
内	
棧 橋 賃 付 料	三六、九〇〇、一五九・一一
渡船場賃料及特許料	六、九〇一、四六九・二一
差引收入剩過額	三、一六九、八五九・八七

而シテ此間、船渠公債募集總額ハ約八千萬圓(四〇、七二八、二九四弗五四)ニ達ス  
 サレド現今、まはつたん島河岸總價格ノ三分ノ一ハ尙私有ニ屬シ、徵稅局  
 ノ評價ニヨレバ、該私有船渠設備ノ價格三千七百二十餘萬圓ニシテ、市有ノ  
 モノハ七千六百四十餘萬圓ナリト云フ。然レモ右評價格ハ、該私有權ヲ收用  
 シテ市有トナスガ爲メニ要スル實價ヲ示スコトヲ得ズ。故ニ若シ右ヲ以テ買

收價格ノ五割ヲ示ストセバ、市ガまはつたん島全河岸ノ所有權ヲ收メ  
 ガ爲メニハ、將來更ニ七千二百萬圓ヲ投ゼザル可カラズ、サレド該市商工業  
 上ノ優勝ハ一ニ其港頭施設ノ發達ニ由來シ、更ニ其施設ノ完備ハ市有ニ於  
 テ初メテ之ヲ望ムベキヲ既ニ一般ノ明知セル處ニシテ、船渠部ハ即チ此目  
 的ヲ遂行スルニ足ルベキ一切ノ權限ヲ交附セラレタリ。且ツ縱令商工業上  
 ノ利益ヲ外ニスルモ、船渠市有ハ同市ニ於ケル一大有利事業ニシテ、試ニ一  
 八九九年度ニ於ケル收支ニ見ルモ、其支出總額五百二十萬圓ニ對シ、利益金  
 四十四萬圓即チ一年八分六厘ニ當レリ。而シテ右ノ支出ニ對スル公債平均利  
 率ハ三分二厘五毛ナルヲ以テ、即チ一年五分三厘五毛(二十八萬圓)ノ純益ニ  
 相當ス。

一八九九年度船渠部收支計算表

收 入 總 額	二、八二八、三五九・六一
内	
棧 橋 賃 付 料	二、三六六、四〇九・三四
渡船場賃料及特許料	三七二、四五一・〇三
雜 收 入	八九、四九九・二四



支 出 總 額

二、六〇三、九一〇・七九

内 工 事 費

一、七三四、〇五一・七九

私有棧橋等買上料

三一〇、五二五・二七

修繕及維持費

四七二、三七四・七八

俸給及局費

八六、九五八・九五

差引利益額

二二四、四四八・八二

桑 港

由來桑港ハ灣廣ク水深ク殊ニ風波ノ危険ヲ知ラズ其地勢ニ於テ實ニ天與ノ絶勝タリ而モ一八六三年港事委員會ノ組織ヨリ以來一九〇〇年六月ニ至ル三十七年間其改良工事ニ支出セル費額ハ三千百五十萬圓ヲ超ユルモノアリ若シ彼ノ自然ニ委シテ此人工ヲ加ヘズンバ何ゾ能ク同港今日ノ隆盛ヲ得ンヤ其收支左ノ如シ。

收支總計(港稅棧橋稅貸付料其他)	一八六三年度收支	一八九九年度收支	自一八六三年度至一八九九年度 收支總計
支 出 總 計	一一七、八四八 <small>卍</small>	六九五、〇三三 <small>卍</small>	一六、二二八、一五五 <small>卍</small>
	九三、六三一	六四五、〇三四	一五、七六四、七三八

内	一八六三年度	一八九九年度	自一八六三年度至一八九九年度
俸給及廳費	二五、三五五	一五〇、五三三	三、五九六、一一三
建設及修繕工費	六七、六〇〇	三八五、六六二	七、一六八、三三五
岸壁建設及修繕費			二、六四五、六七一
浚渫工費		六〇、五九四	一、七二五、二二八
浚渫機購入及修繕費			二〇八、八四七
港内一週鐵道線建設及營業費		三七、四七七	二五一、〇五四
雜費	六七六	一〇、七六八	一六九、四九〇
差引收支超過額	二四、二一七	四九、九九九	四六三、四一七
右ノ收支ニ關シ			
州廳會計部納付額	七一、八九七	六三三、七八〇	九、〇九九、七〇五
同上ヨリ支出額	四七、六八〇	五八三、七八一	八、六三六、二八八

リヂあぶる港

港事會議所ハ委員二十八名ヲ以テ成リ内二十四名ハ船渠稅納稅者ノ撰舉ニヨリ他ノ四名ハマイセイ港監理委員會ノ指命ニヨル而シテ該船渠納稅者ノ撰舉資格ハ一年十磅以上ノ港稅又ハ貨物稅ヲ納ムルモノニシテ被撰者ハ同ジク一年廿五磅以上ノ納稅者タルヲ要ス。











一八九一	二二二、五五〇	一五二、九二八	四、六三四、九四〇	一八、四一二
一八九二	三八三、八一四	二五五、七〇四	四、七六三、〇五〇	一八、八八七
一八九三	四四三、六一四	二五八、二四一	四、九四八、四二三	二〇、八二六
一八九四	二二六、〇九一	二〇一、〇五八	五、一六三、七一九	九、八三九
一八九五	一九三、七〇二	一七三、一二〇	五、三三五、五七一	二二、六七九
一八九六	七五、〇三三	一八六、一五六	五、四〇〇、七五四	二八、一八七
一八九七	八〇、五〇五	一三九、二九六	五、四五七、四七九	三一、九三九
一八九八	一七九、九〇一	一八八、二三五	五、六〇九、一八〇	三五、二一二
一八九九	一五九、二四六	一七九、九五五	五、七三六、三二五	

にゆゝかつする港

港事會議所ハ委員三十三人ヨリ成リ、たいん河沿岸五市ノ撰出十五人、石炭業者、船主、及貿易業者ノ撰出十五人、及監督廳ノ撰出三人トス。而シテ一八九九年末ニ於ケル未償還債務ハ四千百萬圓ニ近シ。

(一)收支計算表

年 度	收 入 額	支 出 額		剩 餘 額
		經 費	債 務 利 子	

(二)一八九九年度ノ收支計算表

一八九〇	三〇五、六三三	九六、〇〇四	一六六、九六一	四二、六六八
一八九一	三〇八、七三二	一〇〇、〇六五	一六六、九三一	四一、七三六
一八九二	二八二、六七八	九九、一〇八	一六七、六三三	一五、九三七
一八九三	三〇二、五六六	九七、二六八	一六六、一三二	四三、一六六
一八九四	三三二、九七六	一〇六、八八二	一六四、三四四	六一、七五〇
一八九五	三〇九、二五六	一一六、九〇〇	一六五、一三三	二七、二二三
一八九六	三一九、四八四	一二五、二九一	一六二、四五七	三一、七三六
一八九七	三四六、六一八	一二四、九一二	一六二、二七八	五九、四二八
一八九八	三七四、九二五	一四七、三一	一五四、二一五	七三、三九九
一八九九	三六六、三七八	一四九、九五七	一六〇、三一五	五六、一〇六

收入ノ部

輸出入噸税	二七四、七六五
雜種税	八六、三五三
貸附料	五、一六九
其他	九一
總計	三六六、三七八
帝都時代ノ港灣	二三三



支出ノ部

修營及維持	五七、八六九
點燈	四、三七〇
俸給	八、〇二九
廳費	六一、六〇五
其他	一八、〇八四
小計	一五〇、〇五七
公債利子	一六〇、二一五
總計	三一〇、二七二
收益	五六、一〇六

ろつたーだむ港

同港ハ、其航路タルみゆーす川及鐵道船渠ト呼ブ一船渠ニ關スルモノ、外、悉ク同市ノ經營ニ成リ、毫モ政府又ハ州ノ補助ヲ受ケタルコトナシ。而シテ其行政ハ、市一般ノ土木事業ト共ニ土木委員會ノ司ル處ナレバ、只其陸上設備ニ關スル事項ハ市ノ商事委員會ニ於テ之ヲ監理ス。

一八七〇年以後、市ハみゆーす左岸ニ著大ノ築港工事ヲ起シ、一九〇〇年ニ至ル三十年間ノ總工費額一千百七十萬圓ニ達ス。且ツ此以外ニ、

一八八二年ニ於ケル舊港設備買收費	三百四十九萬圓
みゆーす下流改良工ニ對シ政府ヘノ獻金	百六十七萬四千圓
船渠建設	百五十四萬圓
電燈設備	百二十一萬圓

等アリ。而シテ是等ノ工費償還ノ一財源ハ、土地賣却費ニシテ、一八九九年末迄ノ賣却代金二百九十八萬圓トス。

但シ市ハ近年新ニ巨額ノ工費ヲ投ジテ、まゝ泊船渠ノ建設中ナリト雖モ、未ダ之ヲ知ルコト能ハズ。

一九〇〇年收支計算表

一、港ノ收入

橋梁開閉手数料	三四、〇〇〇 <small>ギルダイ</small>
繫船岸稅	九七、〇〇〇
海船港稅	一、〇二五、〇〇〇
河舟港稅	二六〇、〇〇〇
みゆーす右岸起重機使用料	一、〇〇〇
開門手数料	一一、〇〇〇
公共用繫船岸使用料	六、七〇〇
帝都時代ノ港灣	二三五



船渠沿貨地料	九〇、四〇〇
商事委員會ニ屬スル收入	一一三、八〇〇
自由倉庫收入	六六、〇〇〇
船渠收入	一〇三、〇〇〇
合計	一、八一八、九〇〇

一、港ノ支出

俸給	八九、三〇〇
橋梁及渡舟維持費	九五、六〇〇
船渠運河岸壁維持費	三一四、七〇〇
新工事費	一、九〇〇
氣象臺費	三、八〇〇
和蘭鐵道會社ニ對スル償還金	三、〇〇〇
合計	五〇八、三〇〇
差引收入超過額	一、三一〇、六〇〇
今參考ノ爲メ一九〇〇年度ニ於ケル同市々事業ノ收入超過額ヲ對比セバ、	一、三一一、六〇〇
港道	一、三一一、六〇〇
水道	二〇〇、四〇〇
瓦斯	六八〇、五〇〇
電氣	一二六、五〇〇

獨乙諸河港

最後ニ獨乙諸河港ノ二三ニ就テ、一九〇〇年ニ於ケル經濟狀況ヲ示サバ、左ノ如シ。

築港工費	一、三五〇、〇〇〇	マルク	けるん	一、一〇〇、〇〇〇	マルク	ぶちゆいぐす	一、二〇〇、〇〇〇	マルク	るーるなると	一、〇一三、八九二	マルク	ちどつせ	八、四八九、一五七	マルク	まぐてぶるぐ	一、六六五、九四六	マルク	むんすたー
工費一年ニ付	四七二、五〇〇			三三四、〇〇〇			四二〇、〇〇〇		三三五	三三三、六七二			三三九、五六六		四〇	五八、三〇八		三五
利子率	三五			三〇			三五		三三	三三			四〇					三三
工費金額工費	一、三五〇、〇〇〇			一〇九、〇〇〇			一〇九、〇〇〇		一一五、六〇〇	一一五、六〇〇			一一五、六〇〇			一六六、六〇〇		一〇
償還トノ割合	一〇			一〇			一〇		一一	一一			一一			一〇		一〇
工費利子及償還割合	四五			四〇			四〇		四五	四五			四五			四五		四五
經常費及維持費	四〇六、五九〇			六五五、八〇〇			三七九、〇〇〇		三二四、九四三	四二二、八九一			四二二、八九一			四一、六九三		四五
收入額	六〇一、五三三			一、二四二、〇〇〇			七九五、五〇〇		六一三、三二八	五五〇、六二四			五五〇、六二四			九九〇、七九		四五
收入過剩額	一九五、九四三			五六一、二〇〇			四一六、五〇〇		二九八、三八五	一三七、七三三			一三七、七三三			五七、三八六		四五
收入過剩ヨリ支拂得ベキ工費利子及償還割合	一四四			四九〇			三四七		二九〇	一六二			一六二			三四五		四五

但シ右ノ表中ニ示セル收入ハ單ニ港稅等ヨリ生ゼルモノニ過ギズ。而モ一帝都時代ノ港灣



港ノ收益ハ、却テ陸上設備使用料、土地貸付料等ニ於テ著シキヲ常トシ、例セ  
 べるゝるおると港ニテ、石炭船積機使用ヨリシテ毎年八分又ハ九分ノ純益  
 ヲ見ルガ多キ、ふらんくふおると、あん、まいん港ノ毫モ港税ヲ課セズシテ優  
 ニ其維持擴張ヲ營メルガ如キモノアリトス。

第三、政府事業ノモノ

商港經營ノ、都市事業トシテ成效セルモノ既ニ甚敷多數ヲ占メ、且ツ主トシ  
 テ現代著名ノ大港ヲ含メルヲ右ノ如シ。然レモ又此間、佛、伊、埃、露ノ諸國ノ如  
 ク商港ノ國有ヲ以テ方針トナスモノアリ。  
 今佛國ニ就テ之ヲ述ベンニ、其築設維持ハ共ニ工務省ノ所轄ニ屬シ、重要ノ  
 工事ハ直接之ヲ經營シ、只鐵道營業及貨物ノ取扱ヒ、貯藏等ニ關スル設備ハ  
 會社又ハ商業會議所等ニ委スルヲ常トス。サレド維持改良工費ハ全部國庫  
 ノ負擔ニ依ラズ、港ノ所在地ノ商業會議所及市、州等ノ寄附金等ヲ以テ其一  
 部ニ充ツルモノニシテ、往時ハ其額工費ノ三分ノ一ヲ超ヘザリシト雖モ、近  
 年大ニ増加シテ往々其半額ニ達シ、時トシテハ其三分ノ二又ハ全部ヲ釀出  
 セシムルコトアリ。而シテ商業會議所ハ右寄附金及利子償却ノ爲メニ、必要ナル

期間、其出入船舶、貨物若クハ船客ニ對スル課税ノ特許ヲ受ケ、市及州ハ右寄  
 附金負擔ヲ一般課税ニ仰ギテ、經常豫算ニ組ミ入ル、モノトス。  
 乃チ先ヅ試ニ政府ノ經費ニ對シ、其收入トナルベキモノヲ擧ゲンニ、一八七  
 二年以後佛國內各港ニ適用セル船舶噸税(繫船岸税ト名ヅク)ハ其主ナルモ  
 ノニシテ載貨船舶ハ其内外國船ノ別ナク左ノ規程ニヨリテ之ヲ賦課ス。  
 一、歐州及地中海ヨリ來レル船舶 登簿一噸ニツキ 五十サンチーム  
 一、亞弗利加もろつこ國沿岸ヨリスルモノ 同 五十サンチーム  
 一、爾餘ノ諸國ヨリスルモノ 同 一法

而シテ一八九五年ニ於ケル繫船岸税ト維持費ノ關係左ノ如シ。

港名	繫船岸税	維持費	收入過剩
どんけりく	七八三	四四八、三七五 <sup>法</sup>	三三五、六一三 <sup>法</sup>
かれい	一二九、一八五	一九一、一五五	六一、九七〇
ぶろん	一六一、〇三〇	一四二、七七〇	一八、二六〇
ちえつぶ	一五七、九五二	一二一、六〇二	三六、三五〇
あざる	一、三九四、三八六	六三三、七六二	七六〇、六二四
あざる	三六四、六〇六	四四、一一七	三二〇、四八九



しえるぶーる	二九、二九三	三一、九九一	(不足)	二、六九八
さんまろ	七四、八九〇	四五、六七六	(不足)	二九、二一四
ぶれすと	三一、八九七	三五、〇〇〇	(不足)	三、一〇三
なんと	七七、六八七	四〇、二一四	(不足)	三七、四七三
さんなぎーる	二九四、六六三	二八六、九六〇	(不足)	七、七〇三
らろつしえる及らばりす	一六二、二二五	一八九、九七一	(不足)	二七、七四六
ろつしゆふおーる	五八、〇五七	七〇、二〇〇	(不足)	一一、一四三
ぼるどー	四六七、一七二	五九〇、八六〇	(不足)	一二三、六八八
ぼふんぬ	八九、三六一	二八、六七七	(不足)	六〇、六八四
せつと	三一四、五〇一	二五五、一五〇	(不足)	五九、三五一
馬耳塞	二、〇三二、八七五	四一五、一三〇	(不足)	一、六一七、七四五
つろん	一二、三六六	一〇、三八八	(不足)	一、九七八
にす	三七、四二五	一二、二二九	(不足)	二五、二九六
小計	六、六七三、五五九	三、五九四、一二七	(不足)	三、〇七九、四三二
其他ノ諸港	八二六、四四一	一、四〇一、二四六	(不足)	五八三、八〇五
總計	七、五〇〇、〇〇〇	五、〇〇四、三七三	(不足)	二、四九五、六二七
諸港合計		三〇八、〇〇〇 <sup>法</sup>		

但シ尙本表以外ニ於テ、

各種證明書税及許可税等ノ收入

諸港合計

三〇八、〇〇〇<sup>法</sup>

大修繕工費及雜費支出

同

一、五九九、二六〇

アルヲ以テ、之ヲ合算スル時ハ左ノ如シ。

政府收入總計

七、八〇八、〇〇〇<sup>法</sup>

同 支出總計

六、六〇三、六三三

差引收入過剩額

一、二〇四、三六七

次ニ、寄附金回收ノ爲メニ、商業會議所及市ノ賦課スル船舶噸税ヲ擧グレバ左ノ如シ。但シ右税率ハ港ニヨリテ相違シ、殊ニまるせーゆ港ノ如キハ、噸メテ之ヲ輕減シ、更ニ必要ナル税源ヲ出入貨物、船客等ニ求ムル方針ナルヲ以テ、比較的其收入少シトス。

商業會議所及市ノ收入ニ關スル船舶噸税

港名	一八九四年	一八九五年	一八九六年
どんけーるく	一、〇二七、〇四八 <sup>法</sup>	九四四、五〇九 <sup>法</sup>	一、〇三一、一〇〇 <sup>法</sup>
かれー	五三一、〇一二	五六七、一一一	五九四、七〇四
ぶろん	三六六、二二二	三八九、一三六	三七九、五一八
ちえーつぶ	二九三、五三三	二九七、六四六	三一二、八四〇



るあーぶる	六八七、六〇九	七〇二、八三七	七五一、六一〇
るーあん	六二一、九五三	四八七、二〇〇	五三〇、一二六
しえるぶる	二二、八六三	二七、二八七	二三、三七九
きんまろ	四三、四五四	四二、一四六	四二、八五三
きんざーる	二二五、四三三	二二二、四二〇	二七七、九三七
なんと	七一、六九一	七二、一一八	一〇四、六八〇
らろっしえる(本港)	三六、四七九	四一、三〇八	四一、五一二
らろっしえる(らばりす)	一五、八四七	二六、二七六	二五、六八〇
ろっしゆふおーる	三〇、九四八	二八、二二九	二二、四三八
ぼるどー	五八三、四二七	五五七、九〇三	五二一、四二五
ばふんと	一一四、五九四	三八、六六二	一一八、二九八
せつと	五二一、九一一	一四四、三七四	一八〇、〇六〇
馬耳塞	五、一九四、〇二四	五、二〇八、六四〇	五、四九二、五九八
小計	二七七、二五〇	三二一、二〇七	四七三、七三八
其他ノ諸港	五、四七一、四九〇	五、五〇七、六〇七	五、九六六、三三六
總計			

而ノ商業會議所ハ、更ニ政府ノ特許ヲ得テ、起業機、上屋等ノ陸上設備ヲ施コ  
 スヲ常トシ、時ニハ修船渠、倉庫及曳船ノ施設ニ任スルヲアリ。右ノ特許ハ普  
 通三十年乃至六十年ニ互リ、其満期ト共ニ、設備一切ヲ舉ゲテ國家ノ所有ニ

歸セシムルモノニシテ、其期間會議所ハ使用料ヲ徴收シテ各種設備ヲ運用  
 シ、且ツ船舶貨物旅客等ニ特別税ヲ賦課シテ工費ノ償還ヲ期スベシト雖モ、  
 以テ自己ノ利益ヲ收ムルヲ許サズ。若シ又其收支償フ能ハザルニ於テハ、  
 更ニ船舶及一般商業上ノ課税ヲ以テ之ヲ補足スルモノトス。  
 故ニ佛國ニ於テハ、商港ノ國有主義ヲ採レルモ、實際ニ於テハ政府、州、市、及商  
 業會議所等ノ共同經營ニ異ナラズ。而モ是等ノ諸機關ヲシテ同時ニ港ノ運  
 用ニ關係セシムルハ、完全ナル計畫ヲ施コスニ方リ、却テ障礙ノ百出ヲ免レ  
 ズ。加之、一般國有制度ノ通弊トシテ、縦令一港ノ改良擴張大ニ其急ヲ告グル  
 モ、其手續徒ラニ繁冗ニシテ施設ノ敏活ヲ期ス可ラズ。且ツ此場合、議會ニ於  
 ケル地方的利害ノ關係ハ、常ニ他ノ大小諸港ヲシテ齊シク改良工費請求ノ  
 機ヲ得セシメ、之ガ均霑ヲ強迫セラル、ガ如キアリ。其利益饒多ナル大港ニ  
 アリテモ、其收利ヲ舉ゲテ直ニ自家必要ノ設備ヲ充實セシムルヲ得ズシテ、  
 却テ幾多小港ノ經費補足ニ流用セラル、ガ如キアリ、爲メニ海運ノ進歩ヲ  
 阻害スルヲ少ナカラズトス。近時佛國ニ於テ英、米、蘭、白、諸港ノ施設ニ鑑ミ、商  
 港ノ獨立經營ヲ主張スルノ聲漸ク大ナルモノ、以テ之ヲ察スルニ足ラン。



以下例ニヨリ一ノ港ヲ舉ゲン。一八八五年ヨリ一八九九年ニ至ル八十五年間ニ於ケルまるせしゆ築港及設備工費總額ハ約五千八百八十萬圓ニ達シ、其分擔左ノ如シ。

自一八八五年まるせしゆ築港及設備費  
至一八九九年まるせしゆ

政 府	商 業 會 議 所	船 渠 及 倉 庫 會 社	市 役 所	總 計	築 港 土 木 費	陸 上 設 備 費	合 計	負 擔 割 合
八三〇一、五七七・六九	二七〇、〇〇〇・〇〇	九五五、三三三・六六	一、七五〇、四一〇・〇一	九、五四四、七六六・六六	七、一三三、〇〇〇・〇六	二、六九三、四三三・六三	八、三〇一、五七七・六九	〇・七三
							九、八五五、〇三〇・〇六	〇・〇六
							三、四八八、六七〇・九	〇・二八
							一、七五〇、四一〇・〇一	〇・〇一
							三、九四九、三三三・八五	〇・〇〇
								一、〇〇〇

但シ右ノ内ニハ左ノ諸工事ヲ含マズ。

- 一、本港附屬ふりうゝる築港費百二十八萬餘圓
- 一、港ノ區域外ニ於ケル臨港停車場及其支線ニ屬スル工費
- 一、會社、私人等ノ所有ニ屬スル港内荷役用諸設備費約百二十八萬圓
- 一、市ノ施行ニ係ル繫船岸上ノ瓦斯及水道敷設費

一、燈臺及燈船設備費  
一、港ノ維持費(政府負擔ノ工事ニ對スル分ノミニテ尙每年平均十六萬圓ニ達ス)

而シテ一八九七年以後、更ニ新擴張工事ニ著手シ、目下施行中ニ屬ス。其工費豫算八百萬圓ニシテ、政府ハ其三分ノ二ヲ支出シ、商業會議所ハ三分ノ一ヲ負擔ス。ト共ニ、其債額償還ノ爲メ、新ニ入港貨物一個又ハ重量一千キログラム又ハ容積一立方米ニ付、五サンチム(二錢)ヲ課シ、且ツ、獸類一頭ニ付、其生死ヲ問ハズ、五サンチムヲ課スルノ特許ヲ得、現今ニ到ル迄同會議所ハ公債ヲ募ラズ、右ノ通過税ニヨリテ必要ナル工費ヲ支辨セリ。而シテ新岸壁上ノ設備一切モ亦同所ニ於テ負擔スベク、目下其計畫中ナリトス。

試ニ一八九八年ニ於ケル同港ノ收支ヲ示セバ即チ左ノ如シ。

行 政 廳	經 費	收 入	收 入 過 剩 額
第二政 府 一、港ノ監理及維持 政 府 港 務 基 金	五三一、九〇〇 <sub>法</sub> 一四二、一〇〇	一六〇、〇〇〇 <sub>法</sub>	



小計	六七四、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	
一、檢疫所	八五、四〇〇	三八九、三七八	
一、關稅	一、九九〇、〇〇〇	六一、八六二、九二一	
一、繫船岸稅	八、九〇〇	一、七八五、八四三	
一、登記及印稅	八〇〇	一、〇一七、七八一	
一、直稅	五六、六三〇	一九、二二一	
一、間稅	一一〇、〇〇〇	八九三、八一七	
一、水先案内	二、九二五、七三〇	四七七、五八一	五九、二九四、八六八 <sup>法</sup>
合計		六二、二二〇、五九八	
第二市			
一、給水費	七、〇〇〇		
一、點燈費	四〇、〇〇〇		
一、消防費	二五、〇〇〇	一、一二六、五五五	
一、警察費	二〇、〇〇〇		
一、貨物入市稅	二五三、〇〇〇		
一、貨物秤量稅	三五三、〇〇〇	九、三四九	
一、關稅		二四、一五六	
一、直稅		一、一六〇、〇六〇	四六二、〇六〇
合計	六九八、〇〇〇		

第三州  
一、直稅

四〇、八四〇

四〇、八四〇

第四 商業會議所

- 一、船舶及貨物噸數
- 一、陸上設備

一、四九三  
五五二、七一九  
五五四、二二二

二二八、四〇八  
五七九、三九五  
八〇七、八〇三

二五三、五九一

第五 船渠及倉庫會社

六、八四〇、〇〇〇

八、三三〇、〇〇〇

一、四九〇、〇〇〇

但シ本表ノ經費中、商業會議所ノ部ニハ公債償還及利子支拂金額ヲ含ミ、船渠及倉庫會社ノ部ニハ社債償還及利子支拂金額ヲ含メリ。

次ニ右商業會議所ノ經濟ヲ見ルニ、一八九八年ニ於ケル收支計算左ノ如シ。

(一)營業ニ關スル收支計算表

收入ノ部

上屋使用料	四〇九、五七五・九〇 <sup>法</sup>
上屋夜業用點火料	一、八九一・九五
繫留船舶用給水料	四二〇、九〇二・三五 <sup>法</sup>
	一九、四三四・五〇



水壓設備  
あばつとあゝる橋用水壓使用料  
諸器械使用料

一二、一〇七・三五  
一二一、四五八・四五  
一三三、五六五・八〇

雜收入

合計

二四、九二七・三五  
五七九、三九五・五〇

支出ノ部

備人給料

二九、九九七・六五

廳費

一、九二一・〇〇

點燈費

五、六四六・六四

保險料

三、五一〇・五〇

諸税金

二一、六三四・九八

修繕及維持費

二九、二八三・九二

雜費

四二、一七七

船舶給水費

二、二八五・四〇

給料

五五、一九二・一〇

石炭費

一三、八七一・八〇

機械維持費及重油費

九、二一〇・六〇

使用水料

六〇〇・二五

家屋維持費

五八八・六〇

廳費

二、九九九・七五

雜費

二、九二〇・七〇

水壓設備

八五、三八三・八〇

合計

一、四八五・九六

雜支出  
維持費積立金

合計

七〇、〇〇〇・二四

差引收入超過額

二六七、五七一・九五

内上屋及水壓裝置ニ關スル公債償還金中ニ繰込ム分

三一、八二三・五五

維持費ニ繰込ム分

五九、四八一・〇〇

(二)公債ニ關スル收支計算表

收入ノ部

上屋及水壓設備

五九、四八一・〇〇

其收入超過ヨリ繰込ミシ分

一一九、二四〇・二二

一噸六サンチームノ噸稅收入ノ一部

一七、八七二・二二

二十五サンチームノ通過料收入

六二、七一八・四一

鐵道

四六、四五〇・六二

一噸六サンチームノ噸稅收入ノ一部

一〇九、九八〇・九九

預金利子

八一・一九六

支出ノ部

一七、八七二・二二

上屋及水壓設備

九三、六一五・八七

上屋ニ關スル二百二十萬法ノ公債利子及償還

一七八、七二一・二二

水壓裝置ニ關スル二百萬法ノ公債利子及償還

八五、一〇五・三五

港内鐵道布設ニ關スル二百三十萬法ノ公債利子及償還

九七、八七一・一四

同上追加公債二百五十萬法ノ利子及償還

一〇、六一六・七四

噸稅收入ニ關スル費用等

一、四九三・一一



備考 一噸六センチメートルノ噸税ハ、新擴張工事ニ對シ一八九四年五月ノ勅定ニヨリテ定メラレタルモノナリ。

(三)上屋及水壓裝置維持改良準備基金ニ關スル收入

收入ノ部

前年度ノ繰越金 五四八、九二二・四〇<sup>法</sup>  
 本年度營業豫算中ニ記入セル積立金額ノ交附 七〇、〇〇〇・二四  
 本年度營業決算ニヨリ收入剩餘金ノ一部 二五二、三四二・五五  
 預金利子 五、三〇一・〇一  
 合計 八七六、五六六・二〇

支出ノ部

機械、貯水池、冷箱新造工費補充 五一、四一五・〇〇  
 上屋大修繕工費 一六、五二四・二五  
 合計 六七、九三九・二五  
 差引本年度末ニ於ケル改良準備基金 八〇八、六二六・九五

而シテ商業會議所ハ、一八九四年以後其收入剩餘金ノ増大セル爲メ、最早新公債ヲ起スコトナクシテ年々必要ナル設備ノ改良ヲ圖ルニ至レルモノニシテ、試ニ各設備ノ創設以來ノ營業成績ヲ見レバ、以テ其増加ノ著シキヲ察ス

ルニ足ルモノアリ。

年次	上屋ノ收入	水壓裝置ノ收入	港内鐵道通過料ノ收入
一八八四年	一一二、五七二 <sup>法</sup> (初業)		
一八八五年	一六七、八九三		
一八八六年	二〇四、二一七		
一八八七年	一九八、五七八	一六、二〇二 <sup>法</sup> (初業)	八、六九三 <sup>法</sup> (初業)
一八八八年	一七九、一七二	四七、九二〇	四五、八九二
一八八九年	二〇四、三七四	五九、七七九	五四、〇九三
一八九〇年	二五八、八三二	六八、七六九	五四、〇九三
一八九一年	二七九、六〇八	七二、六〇六	五一、四〇〇
一八九二年	二五二、三〇一	七三、五九八	五四、二一七
一八九三年	二三八、五〇四	七四、八四三	五〇、〇九二
一八九四年	二八三、三八七	八一、九三〇	五三、五〇三
一八九五年	三三三、一六六	一一、五二二	六六、八六九
一八九六年	三四一、五五九	一一七、三四二	五〇、一一一
一八九七年	四一一、八四〇	一二〇、〇一八	四六、八五〇
一八九八年	四二〇、九〇三	一三三、五六六	六二、七一八
一八九九年	四四八、七一一	一三九、二六五	一〇六、五四五



どんけるく港

同港ハ一八七九年ノ法律ニヨリテ著大ナル擴張工事ヲ營ミ、一八八九年其落成ヲ告ルヤ、更ニ翌年以後、東部突堤改築工ニ從事セルモノニシテ、前者ニ對シテハ、市及商業會議所ヨリ三千百萬法ヲ政府ニ寄附シテ、入港船舶登簿一噸ニ付五十四サンチームノ噸稅ヲ課スルノ許可ヲ得、後者ニ對シテハ商業會議所ヨリ四百五十萬法ヲ寄附シテ十六サンチームノ噸稅許可ヲ得タリ。今右ニ對スル爾後ノ經濟事情ヲ見ルニ、一九〇一年末ニ於テ、

市及商業會議所ノ連帶ニ係ル三千百萬法ノ債務ニ對シ其未償還額  
 東部突堤改築ニ關シ商業會議所ノ負擔ニ係ル四百五十萬法ノ債務ニ對スル未償還額

一、七六四、一〇六・四五<sub>法</sub>  
 三、五四四、一五五・二〇

トス。而シテ右ニ對スル噸稅收入額ハ、

第一、市及商業會議所ニ屬スル五十四サンチームノ噸稅收入

年次	總收入	雜支出	純收入
一八九六	六八六、四四七 <sub>法</sub>	六、二三八 <sub>法</sub>	六八〇、二〇九 <sub>法</sub>
一九〇七	七二二、四三九	六、八〇六	七一五、六三三

一八九八	七八一、五八一	九、四七九	七七二、一〇二
一八九九	七四四、一六九	一二、五九三	七三一、五七六
一九〇〇	七二八、六一八	八、七七三	七一九、八四五
平均	七三二、六五一	八、七七八	七二三、八七三

(右純收入額ハ一九〇一年七月末ニ於テ未償還債務ノ六分四厘ニ相當シ、公債利子四分一厘五毛ヲ控除シタルモノハ以テ其償還ニ充ツルニ足レリ。)

第二、商業會議所ニ屬スル十六サンチームノ噸稅收入

年次	總收入	雜支出	純收入
一八九六	二〇三、三八五 <sub>法</sub>	三、五六三 <sub>法</sub>	一九九、八二二 <sub>法</sub>
一八九七	二一四、〇五六	三、五一一	二一〇、五四五
一八九八	二六一、五八〇	四、二一九	二二七、三六一
一八九九	二二〇、四九六	三、四〇二	二一七、〇九四
一九〇〇	二一五、八八七	二、〇一三	二一三、八七四
平均	二一七、〇八一	三、三四二	二一三、七三九

(右純收入額ハ一九〇一年七月末ニ於テ未償還債務ノ約八分ニ相當ス。)



且ツ商業會議所ハ其陸上設備費百八十萬法ニ對シ、一八八八年以後十サン  
チムノ入港船舶登簿噸稅ヲ課スルノ特許ヲ有ス其收入左ノ如シ。

年次	收入	年次	收入
一八九六	一四一、二六八 <sub>法</sub>	一八九九	一六〇、八五四 <sub>法</sub>
一八九七	一五一、三四一	一九〇〇	一五六、二七三
一八九八	一六四、三二〇	一九〇一	一五八、四三六

次ニ政府ノ收入タルベキ諸稅額中、繫船岸稅增加ヲ見ルニ左ノ如シ。

年次	繫船岸稅	年次	繫船岸稅
一八七四	三一四、四二四 <sub>法</sub>	一八九二	八六四、八二四 <sub>法</sub>
一八七九	四五二、二八二	一八九五	七八五、五〇一
一八八四	六二六、二五六	一九〇一	九二六、八三二
一八八九	七八二、八九七	一九〇一	七四〇、六九三

第五章 東京築港ノ設計

以上ハ略々以テ東京港ノ主張ニ關スル若干ノ疑惑ニ答ヘ得タリト信ズ。故  
ニ以下更ニ進ンデ其築港設計ノ得失ニ關スルモノヲ述ベン。  
惟フニ東京築港ノ第一期工事ハ、當時ノ財況等ニ應ジテ縱令如何ナル小規  
模ニ甘ゼザル可ラズトスルモ、其標準的大設計ニ至ツテハ、斷ジテ苟且ノ施  
設ヲ許サズ。必ズヤ百年不惑ノ長計ヨリ打算シテ是ヲ決定シ、各期ノ工事ハ  
凡テ此標準ニ向ツテ到達スベキ楷程タラシムルヲ要ス。而シテ今古市民  
ノ計畫ニ見ルニ、其港門ヲ羽根田ニ置キ、本港ヲ芝浦地先ニ設ケ、運河ニヨリ  
テ兩者ヲ連結スルノ方針ニ至ツテハ、之レ實ニ東京灣頭ノ地勢上到底動カ  
ス可カラザル鐵案ニシテ、而モ其規模ノ雄大ナル、能ク東京港百年ノ施設ヲ  
通ジテ、一貫セル標準ト爲スベシ。  
若シ夫レ今日迄ニ、右ノ設計ニ對シテ爲サレシ唯一ノ非難ヲ擧グレバ、即チ  
本港ノ位置ヲ以テ、市ノ中心ヲ去ル丁遠キニ失ストナスニアリ。蓋シ本港ヲ  
シテ成ル可ク市ノ中心ニ接近セシムルノ利ナルハ何人モ之ヲ認ムルヲ得  
ベシ。然レモ我東京港ノ場合ニ於テハ、其地勢竝ニ工費ノ經濟ヲ全然無視ス  
ルニ非ルヨリハ、遂ニ能ク此ノ如キ希望ヲ達ス可ラザルヲ如何。



即チ試ニ隅田川口ヲ利用シテ茲ニ大船出入ノ便ヲ開クトセンカ、現計畫以外ニ増大スベキ工費ノ主ナルモノヲ擧グルモ、(一)河底ノ浚渫、(二)河幅ノ擴大、(三)防砂ノ設備、(四)兩岸ノ土地買収、(五)廣大ナル潰地ノ損害等ニ加ヘテ、(六)港口ヨリ本港ニ至ル運河延長ノ増加ノ如キ、何レカ一トシテ莫大ナル經費ヲ意味セザルアラシヤ。或ハ越中島若クハ靈岸島附近ヲ利用スルトセンカ、コモ亦等シク廣大ナル現在ノ市街地ヲ潰鑿スルニ非ルヨリハ、以テ現計畫以上ニ市ノ中心ニ接近セシムルヲ能ハズ、從テ其經費ノ増加ハ、各項ヲ通ジテ何等前者ト撰ブ處ナシ。

故ニ斯ノ如キハ、先ヅ工費ノ經濟ヨリシテ到底行フ可ラザルノ空想タリ。且ツ既ニ一方現計畫ニ對シテスラモ、工費ノ巨大ヲ云爲シテ空シク其決行ヲ躊躇セシムルモノアルニ方リ、更ニ其經費殆ド幾倍スルカヲ知ラザルモノヲ想像シ來ツテ徒ラニ其利害ヲ對比スルガ如キ、縱令利益ノ見ル可キアルモ、實行上何ノ價值ヲカ存セン。況ヤ更ニ斯クシテ得ベキ市ノ中心トノ接近ガ、實際果シテ幾何ノ利便ヲ與フベキカヲ見ヨ。深川若クハ京橋日本橋附近ノ現在倉庫ニ到ル水路距離ハ即チ多少ノ短縮ヲ得ン。然レモ元來水路運賃

ノ大部ハ貨物積卸ノ費用ニシテ、運漕距離ノ長短ハ殆ド影響スル處ニ非ザルヲ以テ、其利益ト云フモ亦知ルベキナリ。只一方陸上輸送ニ於テハ、其距離ニ應ジテ直ニ運賃ノ増減ヲ生ズベシト雖ドモ、而モ陸上運送費ハ到底以テ水上運送費ノ至廉ナルニ比スル能ハズ。故ニ特別ノ必要アル貨物ニ非ラザルヨリハ、主トシテ水路ニ依頼スベク、從テ陸運ニ及ボス利益ト云フモ、亦畢竟極メテ僅少ナルノ外ナシ。現在ノ狀況ヨリシテ見ルモ尙此ノ如シ。況ヤ將來ニ於テハ、(一)水陸輸送機關ノ改良ニヨリテ其運賃モ次第ニ輕減セラル、ヲ得ベク、(二)港ノ利用宜敷ヲ得ルト共ニ現物取引ノ陋習亦漸次消滅セラルベキ傾向ヲ有シ、共ニ其所謂利益ノ愈々縮少セラルベキヲ示ス。然ラバ則チ此ノ少許ノ利益ノ爲メニ莫大ノ工費ヲ賭シ、且ツ廣大ナル現在市街地ノ潰鑿ヲ敢テセントスルガ如キハ、遂ニ其策ノ得タルヲ知ラザルナリ。

之ヲ海外ニ見ルモ、港ノ利便ノ爲メニ初メテ興起セル小都市、若シクハ地勢上容易ナルモノアルニ非ルヨリハ、市ノ中心ト大船出入港トノ位置、往々ニシテ著シク懸隔ス。是レ豈工費經濟上ノ得失ヨリシテ遂ニ止ムヲ得ザルガ爲メナラザランヤ。彼ノ倫敦市ノ大ヲ以テスルモ、未ダるんどん橋下直ニ深



水港ヲ設置セルヲ見ズ、否其距離ノ不便ハ遙ニ我東京港ノ場合ヲ超絶セリ。左ニ二三ノ港ヲ例シ、其株式取引所ヨリ大船用泊船渠ニ達スル距離ヲ擧ゲンニ、

倫敦 三千間乃至二萬間ニ出ヅ。

リヂあぶーる まーせー川ニ沿ヒテ上流ハ二千間、下流ハ三千二百間ニ

達ス、而シテ大船ニ對スル船渠ハ主トシテ此兩端ニ存ス。

はんぶるぐ 漢堡亞米利加汽船會社ノ使用セルはんざ船渠、及新船渠ハ

共ニ約二千間ヲ距ツ。

まるせーゆ 新工事中ノモノハ二千五百間ヲ距ツ。

ぶれーめん 現在ノモノハ一千五百間、新港ハ二千間乃至二千五百間。

まんちゑすたー 二千間。

ぐらすごー 二千間。

にゆーかつする 二千間以上、遙ニ數哩ノ下流ニ達ス。

こーぺんはーげん 陸路二千間、水路二千七百間。

はーづる 一千七百間、(べろー船渠)

只あむすたーだむ 一千三百間乃至二千四百間。

東京港 三千間。

以テ海外著名ノ諸港ト雖、亦必ズシモ常ニ其位置上ノ利ヲ占ムルニ非ルヲ知ルベク、而モ實際上毫末ノ遺憾ヲ存セザルハ、之レ畢竟水陸ヲ問ハズ各種ノ施設ニヨリテ容易ニ其不便ヲ除去シ得ルガ爲メノミ。東京港ノ三千間又何ゾ特ニ堪フ可ラズトセンヤ。

或ハ深川、京橋、日本橋等ノ利害ニ執著シテ以テ、芝浦ニ本港ヲ置カバ、市ノ中心モ亦漸次其附近ニ移動スベキヲ恐ル、モノアリ。サレド予ノ見ル處ハ然ラズ。惟フニ芝浦附近ハ港ニ接近セルニヨリテ新生面ヲ發揮スルヲ得ベシ。サレド是レ畢竟市ノ膨脹ノミ、其隆昌ナル區域ノ増大ノミ、以テ直ニ中心商業區域ノ推移ト爲サンハ誤レリ。何トナレバ芝浦ノ本港ハ單ニ大船ニ依ル貨物ノ出入積卸シヲ爲スベキ關門タリ。之ガ荷捌キヲナシ、混合、仕替ヲナシ、或ハ蓄積上ノ手數ヲ省キ、或ハ發送上ノ敏捷ヲ期スベキ地點タリ。倉庫取引見本賣買ノ如キハ即チ茲ニ行フヲ得ベシト雖、更ニ貨物ヲ目的ノ地區ニ水陸輸送シ終ルニ非ズンバ以テ店前取引又ハ小賣商賣ヲナス能ハズ、以テ



商業中心區域トノ直接關係ヲ生ズル能ハザルナリ。而シテ既ニ市内ノ重要區劃ニ達スルニ水陸輸送上ノ便アリ、商賈ノ往來ニハ交通機關益々發達セントスルアリ、何ツ特ニ市ノ中心ヲシテ倉庫所在地ト隣接セシメザル可ラザルノ要アラン。將タ中心區劃ノシカク容易ニ移動スルコヲ得ンヤ。海外諸港ノ實際毫モカ、ル事實アルヲ示サルモノ、誠ニ故アル哉。茲ニ到ツテ、予ハ世人ノ往々ニシテ港ニ對スル觀念ヲ誤解セザルカヲ疑フ。彼ノ神戸又ハ横濱ノ如キ我國現在ノ港ヲ目撃スルモノハ、直ニ港頭ノ美觀ト海岸通リノ繁華ニ連想スルヲ禁ズル能ハズ、都市ノ中心ノ此附近ニ推移センコヲ恐ル、モノ、亦畢竟這般ノ幻影ニ捉ハル、ガ爲ナラザルカ、果々然ラバ之レ非常ノ誤解ナリ。前ニ巨船ノ出入ヲ控ヘテ直ニ大小ノ商店櫛比シ、或ハ居留地ノ美アリ、遊園ノ清アリ。賈客往來シ觀者徘徊スルガ如キハ、今日迄ノ我港ニ於テ或ハ之レアリ、只近時ノ商港トシテ何レノ處ガ能ク此ノ如キヲ得ン。試ニ其一端ヲ敘スレバ、船ニ接シテ直ニ起重機アリ、軌道アリ、更ニ上屋アリ、倉庫アリ。既ニ船ニアツテ水ヲ見ズ、倉庫ニヨツテ船アルヲ知ラズ、只耳ニスルハ起重機ノ騒音ノミ、人夫ノ喧囂ノミ。目ニ觸ル、モノハ貨物ノ

山積ノミ、貨車ノ往來ノミ。一場ノ光景、只雜然騷然タル熱鬧叫喚ノ巷ニシテ、而モ塵埃縱橫、惡臭紛々、斷ジテ觀覽ノ人ヲ容レズ。且ツ其附近ハ數萬ノ勞働夫ニ便スベキ屋舎小店ノ櫛比シ若クハ數多工場ノ建設物相列ナルヲ見シモ、到底直ニ大厦高樓ノ聳立ヲ許サズ、況ヤ繁華ノ街衢オヤ。而モ一日ノ業終ルヤ、人夫ハ四散シ盡シテ港内忽チニ落寞ヲ極メ、衆相戒メテ之ニ近ヅクコナク、晝ハ熱殺ノ區ニシテ、夜ハ即チ罪惡ノ府タリ。惡疫ノ因、火災ノ厄、又時ニ之レヲ伴フヲ免レズ。然ラバ則チ此區ニ於ケル繁榮ト云フモ、畢竟數萬ノ勞働夫ト數多ノ工場ノ爲メニ生ズベキモノニシテ、他ノ地區ハ却テ貨物輸送ノ利便ヲ得テ商業上ノ隆盛ヲ見ルベシ。夫レ此ノ如キモノ之レ一般ニ近時商港ノ狀況タリ、且ツ其面目タリ。此ノ如クシテ遺憾ナク貨物輸送ノ機能ヲ發揮スルヲ得ベク、又初メテ貿易ノ發達ニ應ズルヲ得ベシ。夫ノ商工經濟上ノ趨勢ニ應ジテ起ルベキ東京港ノ面目亦實ニ此ノ如クナラザランヤ。乃チ中心地區推移ノ如キ、遂ニ一個ノ杞憂タルベキノミ。故ニ若シ東京灣頭ノ地勢ヲ經トシ、適切ナル工費ノ經濟ヲ緯トシテ、以テ築港計畫ヲ編マンカ、其港門、運河ノ位置ハ元ヨリ、本港ト雖凡亦遂ニ現設計ノ



如クナルヲ以テ最モ其當ヲ得タリト爲サバ、ル可カラズ。而シテ一方、隅田川利用ノ途ハ別ニ是レアリ。若シ能ク該河口ノ改善發達ヲ期センカ、宜敷其實行スル能ハザル深水港策ノ妄想ヲ去リ、其勢ニ鑑ミ、其必要ニ應ジテ、適當ナル計畫ヲ立テ、以テ現在ノ不便ト混雜ヲ避クベキノミナラズ、又漸次小河港ノ設備ヲ完成セシムルヲ要ス。別冊隅田川口改良ニ關スル意見書参照。是レ管ニ該河利用ノ道ヲ盡ス所以タルノミナラズ、一方大船ニ對スル深水港ノ開設ト相俟テ、愈々其價值ヲ發揮スベキノ道タリ。

夫レ水運ノ用途ヤ廣大ニシテ其作業ハ千差萬別タリ。從テ之ニ應ズル船舶ハ自ラ其種類ヲ異ニシ其大小ヲ變ゼザル可ラズ。故ニ縱令一方ニ大船ノ寸法愈々増大スルモ、小船ノ必要ハ依然トシテ減ズルコトナク、大船ノ出入頻繁ナル港ニアリテハ、小舟ノ利用亦愈々複雑ナルベキヲ必ス。之レ何レノ港ト雖ドモ、常ニ大小船舶ニ對スル碇泊地ヲ區劃シ、其ノ水深ニ差等ヲ附シ、雙互相依リテ以ツテ港内萬般ノ機能ヲ全タカラシムルト共ニ、併セテ港ノ秩序ヲ保持スル所以、抑モ亦タ以ツテ築港工事上ノ經濟ヲ擧グルガ爲メナラザランヤ。

河港トシテ隅田川將來ノ價值ハ、尙彼ノてゝむす上流ノ倫敦港ニ於ケルト一般優ニ淺水港トシテ其資質相當ノ發達ヲ遂グベシ。之レ實ニ觀易キノ理ナリ。而モ人或ハ芝浦ノ築港ヲ以テ直ニ該河ノ利用ヲ無視スルガ如キヲ疑フ、何ゾ其思ハザルノ甚シキヤ。

## 第六章 第一期工事

故ニ將來我東京港ノ大成ヲ期センガ爲メニハ、其標準計畫トシテ古市氏ノ設計ノ既ニ毫末ノ遺憾ヲ存セザルヲ見ル。只之ヲ實現スルニ方リテハ、先ヅ電メテ其必要ヲ内輪ニ見積リ、其工事ノ程度ヲ縮少シ、效果ノ顯然タルヲ俟テ次第ニ改善擴張ヲ策シ、序ヲ踏ミ順ヲ追フテ其進捗ヲ圖ルベキヲ論ナシ。即チ是レ更ニ同氏ニヨリテ第一期工事貳千三百五拾萬圓案ノ提出セラレタル所以。而シテ之ニ關スル意見ハ該報告書中ニ明白ナルヲ以テ今敢テ是ヲ贅スルヲ俟タズト雖ドモ、今一二ノ材料ニヨリテ、其要求ノ度ノ如何ニ適切ナルカヲ察知スルニ資センカ。

第一、取扱フベキ貨物ノ數量 橫濱港ヲ經由シテ東京市ニ出入スル水運貨物一年ノ數量ハ、最近三ヶ年(自三十三年至三十五年)ノ平均ニ於テ總計約百七十萬噸(外



國輸出入貨物五拾貳萬噸、內國輸出入貨物百二十二萬噸ヲ示シ、實ニ橫濱港出入貨物總量ノ八割一分強(輸出ニ於テ五割四分、輸入ニ於テ八割八分)ニ相當シ、且ツ逐年増加ノ割合極テ確實ナリ。(三十五年ニ於テハ既ニ其總額百八十萬噸ヲ超ユ)而シテ之等ノ貨物ハ、悉ク直接ニ現時ノ輸送方法ニヨリテ、其運賃時間及手數上等著シキ損害ヲ蒙レルモノナルヲ以テ、東京港ノ開始サル、以上ハ當然容易ニ其來集ヲ見ルベキヲ必ス。而モ我第一期工事ニ於テハ、右ノ數量ノ八割(百四十萬噸)ヲ採リテ施設上ノ目安ト爲セリ。但シ現時東京市ノ出入貨物ハ、右橫濱經由ノ百七拾四萬噸ニ加ヘテ、更ニ品川沖碇泊船ニヨルモノ(二十一萬噸)及ビ河內碇泊船ニヨルモノ(六十六萬噸)アリテ、其總量平均二百七十二萬噸(三十五年ニハ既ニ二百八十四萬噸ニ達セリ)ニ上レルヲ以テ見ルトキハ、港ノ利用區域ハ更ニ擴大セラルベキヲ察スベク、第一期工事ニ於テ、當初單ニ百四十萬噸ニ對セル規模ヲ置クハ、縱令過小ノ嫌アルモ、決シテ其過大ナル所以ヲ知ラズ。第二、收容スベキ船舶數 最近三年ノ平均ニ見ルニ、橫濱入港船舶數、一年七千六百餘噸(外國通航船八百艘、內國通航船六千八百艘)ニシテ、同港一日ノ收

容船數ハ、三十五年ニ於テ五十四艘、外國航船十八艘、內國航汽船十九艘、同帆船十七艘)ニ達セル時アリ。故ニ今東京港ニ於テ、先ヅ一日約四十八艘ノ收容ヲ爲スベキ規模ヲ置クモノ、亦極メテ適切ナリトスベシ。況ヤ更ニ品川沖出入船舶ノ自ラ之ヲ利用スルニ至ルベキオヤ。第三、船舶ノ寸法 現時橫濱港ニ往來スル外國汽船中ニハ、既ニ其噸數一萬噸以上ナルモノ二三ニシテ止マラズ、就中こりあ號ノ如キハ、總噸數一萬一千餘噸、載貨吃水三十四呎ヲ稱シ、又最近入港セルもんごりあ號ハ即チ總噸數一萬三千六百餘噸、吃水二十六呎ニ達ス。而モ船舶ノ寸法増加ハ今ヤ一般ノ大勢ニシテ、東京港開始ノ場合、更ニ幾何ノ變化ヲ來スベキヤヲ知ラズ。故ニ港ノ一部ニ水深三十尺ノ部分ヲ備フルガ如キモ、其必要又遂ニ避ク可ラズ。夫レ計畫ノ規模ニシテ、斯ノ如ク適切ナル必要ニ準據シ、更ニ其工事ハ、單ニ緊急施設ヲ要スルモノニ限り實行センコトヲ期ス。乃チ是ヲ以テ、第一期工事縮少ノ限度ト云ハンモ敢テ過言トナサズ。且ツ此以內ノ縮少ハ、必然之ニ伴フテ著シク港ノ利益ヲ減殺スベキヲ以テ、苟モ東京港ノ海門ヲ開ク以上ハ、



其必要上、先ヅ少クモ該程度ノ工事ヲ主張セザル可ラズ。而シテ若シ一方東京港ノ價值ニシテ明確ナル了解ヲ得、其事業ノ經濟モ亦敢テ困難ナラザルヲ判知サル、ヲ得バ、我東京市ノ富ト力ヲ信ズルニ於テ、何等其決行ノ疑惧スベキモノアラシヤ。宜敷更ニ工費減縮ノ姑息ヲ策スルナク、直ニ本程度ノ設備ヲ具ヘテ以テ其利用ノ效果ヲ多大ナラシムベキナリ。

但シ單ニ力ヲ揚言スルノミニテハ尙盡クササルモノアリ。世人ハ往々我築港設計ガ、當初ノ四千百萬圓案ヨリ、三千四百百萬圓案トナリ、次ニ二千三百五十萬圓案ヲ生ミ出セルニ見テ、更ニ其縮少ノ任意自由ニ期待ラセル、ガ如キノ觀アリ、故ニ今寧ロ其縮少ノ極限ヲ劃シ、其規模竝ニ工費ヲ擧ゲテ較査ノ資トナスモノ。又其必要ナクンバアラズ。

一、縮少ノ極限

第一期工事ノ原計畫(二千三百五十萬圓案)以內ニ一層之ガ縮少ヲ工風スルニ方リ、先ヅ豫メ注意ヲ要スル點アリ。即チ其規模及設備ニ對シ、如何ニ東京港當然ノ必要程度ヲ無視スト雖モ、其縮少ハ地勢上到底自在ニ期待シ得ベカラザルコト之ナリ。試ニ東京灣頭ノ地勢ニ見ヨ、其海底一面ノ傾斜緩漫ニシ

テ水深淺少ナル事實ハ、築港上、先ヅ明カニ運河及前港ノ必須工事タルコトヲ示サバランヤ。且ツ其工事ハ、營ニ何等ノ設計ヲ以テスルモ遂ニ之ヲ避ク可ラズト云フニ止ラズ、古市氏ノ計畫ニ於テ初メテ其位置最モ經濟的ナルヲ得、更ニ其第一期工事原案ニ於テ、殆ド極度ニ工法ノ節略ヲ加ヘラレタルヲ知ルベシ。夫レ然リ而シテ尙此部分ノミノ工費約一千萬圓ナルヲ免レザルニ於テハ、乃チ如何ニ築港工費ノ縮少ヲ圖ラントスルモ、其節減ヤ斷ジテ任意ナルコト能ハズ。

此ノ如キハ實ニ是ヲ我國現在諸港ノ、凡テ天與ノ形勝ヲ占メ得タルニ比シテ、甚敷地理上ノ不利益ヲ感ゼシメズンバアラズ、サレド若シ顧ミテ現時著明ナル海外諸港ニ察スルキハ、其多數ハ當初又等シク此種ノ不利ヲ有セシニ拘ラズ、熱心其經營ヲ圖リテ以テ今日ノ隆昌ヲ致シタルヲ知ルベク、而シテ此事實ハ、即チ明カニ港ノ經濟的位置ガ、常ニ其地理的位置ノ利便ト一致スルヲ得ザルノミナラズ、近時ノ趨勢ハ、愈々前者ガ後者ヲ壓倒シテ港ノ盛衰ヲ左右スルニ至リシ所以ヲ證スルモノニシテ、既ニ我東京築港ノ經營ガ、其絶好ナル經濟的位置ノ爲メニ喚發セラレシ自然ノ要求タル以上ハ、地勢



上避クベカラザル若干ノ不利ノ如キ多ク之ヲ云フニ足ラズト信ズ。夫レ既ニ東京築港工事ハ其如何ナル場合ヲ論ゼズ先ヅ本港外工事ノ當然同一工費(約一千万圓)ヲ以テ附加スルアリ。然ラバ即チ何等ノ縮少考案ト云フモ、畢竟主トシテ本港内工事ノ減縮ニ歸著セザル可ラズ。從テ今其極端ナル縮少案ヲ想像スルヲ難カラズ、即チ本港内ニ於テハ單ニ一船溜ヲ掘鑿スルニ止メ、其水面積ト雖ドモ、以テ必要程度ノ一小部分ヲ充スヲ度トシ、且ツ落沿物揚場護岸ハ當初五百間ヲ築キテ他ハ假護岸トナシ、更ニ前港浚渫面積ニ於テ原案ノ四分ノ一ヲ減ジ、其浚渫土ト雖ドモ、一部ハ單ニ埋築豫定地域内ニ投棄スルニ止メテ工費豫算ノ單價ヲ減ジ、其他各種ノ工事ニ通ジテ、他日容易ニ改善シ得ベキモノハ更ニ能フ限リノ減縮ヲ敢テスルヲ是ナリ。而シテ之ニ依レバ其工費一千四百萬圓ナルベシ。

(備考) 或ハ單ニ亞細亞貿易ノミヲ以テ目安トナスニ於テハ、一時港内ノ水深ヲ二  
十八尺ニ止ムルヲ得ベシト雖ドモ、更ニ之ガ爲メニ減少スベキ工費ハ五十萬圓ノ  
ミニ過ギズ。而シテ横濱港ノ外國貿易貨物四ヶ年ノ平均ニ見ルニ、亞細亞及濠洲貿  
易ハ、貨物數量ニ於テ四割一分、價格ニ於テ二割二分ヲ充スノミナルニ反シ、歐米貨  
物ハ數量五割七分、價格七割七分ノ多キヲ示シ、且ツ歐米貿易ノ專ラ大船ニ依リテ

行ハル、ノミナラズ、亞細亞貿易ノ一半モ、之等歐洲航路ノ巨船ニ依レルヲ以テ見  
レバ、僅ニ五十萬圓ヲ節センガ爲メニ、吃水二十六尺以上ノ大船ノ出入ヲ防遏セン  
トスルガ如キハ、其不利元ヨリ甚シキヲ必ス。

故ニ若シ今日ニ於テ、單ニ東京港ノ基礎ヲ置クニ止メントセバ、右ノ縮少限  
度ノ計畫ヲ採ルモ亦之ヲ妨グズト雖モ、以テ直ニ著大ナル築港ノ利益ヲ期  
待ス可ラザルヤ明カナリ。殊ニ本港内ニ於テ全然繫船岸ノ設備ヲ削除シテ  
港ノ眼目タルベキ荷役上ノ利便ヲ缺キ、其嶄新ナル機能ヲ示シテ以テ其發  
展ヲ促スノ機ヲ逸セシメ、依然トシテ舢舨荷役ノ陋態ヲノミ是レ事トスルノ  
外ナカラシムルガ如キハ、其遺憾實ニ甚シキモノアリ。且ツ惟フニ、近ク横濱、  
大阪等ニ於テ繫船岸組織ノ活用ヲ見、其價值ヲ發揮スルノ日ニ際セバ、我築  
港工事落成以前、既ニ其施設ノ餘リニ姑息ニ失シタルヲ悔ユベキヲ必シ、而  
モ其時ニ於テ急カニ之ヲ改善セントスルガ如キハ、到底工費上ノ不經濟ヲ  
免レズトス。

或ハ適宜ニ棧橋設備ヲ具ヘテ船舶繫留ノ利便ヲ收ムベシトセンカ、木造棧  
橋ニ依ラバ其工費廉ナリト雖ドモ、海蟲ノ侵蝕劇シキ我東京ニ在リテハ其



生命極メテ短カキガ爲メニ、其不利ヤ却テ大ナリ。然レドモ亦鐵棧橋ニ在リテハ其工費殆ド岸壁ニ讓ラズ、大阪港ニ於ケル新設棧橋ニ見ルニ水深二十八尺ノ處ニ在リテ、全長二百五十間、有效長二百二十間、工費總額八十四萬八千八百餘圓トス。故ニ若シ其兩側延長ヲ合シテ計算スルモ、有效長一間ニツキ一千九百三十圓ニ相當ス。而シテ一方東京港岸壁工費ハ水深二十七尺ノ分一間ニ付キ二千圓、同三十尺ノ分二千三百圓ナリ。而モ其利用ノ程度ニ於テ莫大ノ差異アルヲ、元ヨリ比較ノ要ナシトス。

故ニ我東京港ノ場合ニ於テハ、少クトモ繫船岸ノ一部ヲ今日ニ築造シテ、其活動ヲ示シ、其利益ヲ擧ゲ、且ツ將來ノ擴張ヲ促進セザル可ラザルヲ、其積極的必要ハ元ヨリ、縱令之ヲ消極的見地ヨリスルモ、將タ其體面ヨリスルモ斷ジテ免ル、能ハズ。乃チ此意味ヨリシテ、試ニ第一號及第二號繫船岸ノミヲ築造スルモノトシ、他ハ一千四百萬圓案ニ於ケルト同ジキ減縮ヲ圖ルニ於テハ、更ニ一千六百萬圓案ヲ得ベシ。

サレド、茲ニ同案ニ付キテ其巨細ヲ説明スルガ如キハ徒ラニ敘述ノ煩瑣ヲ來スノ恐レアルヲ以テ、寧ロ左ニ要點ヲ摘ンデ三案ノ差異ヲ對照シ、其工事

ノ程度ヲ推知シ得ルニ止メントス。

(一)第一期工事案比較

第一、本港内

淺 深 水 面 積	二千三百五拾萬圓案	壹千六百萬圓案	壹千四百萬圓案
水深三十尺ノ分	二九四、〇〇〇坪	二二三、〇〇〇坪	二〇一、〇〇〇坪
同 二十七尺ノ分	一五九、〇〇〇	一二四、一〇〇	一一七、〇〇〇
同 二十四尺ノ分	二二、〇〇〇	九、五〇〇	
同 二十尺ノ分	六四、〇〇〇	五〇、四〇〇	四〇、〇〇〇
岸 壁 總 長	四九、〇〇〇	四九、〇〇〇	四四、〇〇〇
同 有 效 長	二、七七三間	六、〇〇〇間	
岸壁有效長(卅尺ノ分)	二、一九〇	六〇〇	
同 (二十七尺ノ分)	七、一〇〇	八〇	
同 (二十四尺ノ分)	三五〇	一五〇	
同 (二十尺ノ分)	九一〇	二八〇	
滯沿物揚場有效長	一一、一九五	一五〇	五〇〇間
埋 築 地 面 積	五七七、〇〇〇坪	四八六、〇〇〇坪	四〇八、〇〇〇坪



第二、本港外		港附屬地面積	市街地面積	浚深土量	船溜石垣長	岸壁取扱 貨物噸數 （當初一間二 噸付一年五百 噸下見込）	繫船杭使用 船貨物取扱噸 數推定	右合計
前港浚深面積	二千三百五十萬圓案	三四四、五〇〇	二八八、〇〇〇	一、三二〇、〇〇〇	六三五	一、〇九五、〇〇〇	三三〇、〇〇〇	一、四二五、〇〇〇
同浚深土量	壹千六百萬圓案	一九八、〇〇〇	一九八、〇〇〇	一、〇四〇、〇〇〇	九〇〇	三〇〇、〇〇〇	三三〇、〇〇〇	六三〇、〇〇〇
前港附近埋立地面積	壹千四百萬圓案	二三六、〇〇〇	一七二、〇〇〇	八八四、〇〇〇	九〇〇	三九〇、〇〇〇	三九〇、〇〇〇	三九〇、〇〇〇

(一)第一期工事案工費比較

總工費	二千三百五十萬圓案	壹千六百萬圓案	壹千四百萬圓案
突堤工費	一、六二〇、〇〇〇	一、三四〇、〇〇〇	一、三四〇、〇〇〇
運河沿防波堤護岸工費	一、五六八、〇〇〇	一、一二〇、〇〇〇	一、一二〇、〇〇〇
各種護岸工費	一、四三四、〇〇〇	九九九、〇〇〇	九九九、〇〇〇
浚深埋立工費	四、三七四、〇〇〇	三、二二一、〇〇〇	二、九八七、〇〇〇
岸壁工費	五、五〇七、〇〇〇	一、一九九、〇〇〇	四九七、〇〇〇
雜工事費	五一四、〇〇〇	四九七、〇〇〇	四九七、〇〇〇
假工事假建物費	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇	五〇〇、〇〇〇
機械工場費	一、〇〇〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇	九〇〇、〇〇〇
機械器具費	四、一〇〇、〇〇〇	四、〇二〇、〇〇〇	三、七〇〇、〇〇〇
測量及試驗費	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
事務所費	一、二〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
豫備費	一、五八三、〇〇〇	一、一〇四、〇〇〇	八五七、〇〇〇
總計	二三、五〇〇、〇〇〇	一六、〇〇〇、〇〇〇	一四、〇〇〇、〇〇〇

二、縮少案ニ對スル私見

上記三案ノ價值ヲ對比スルニ方リ、其著大ナル差異ハ、主トシテ荷役ニ對スル  
 帝都時代ノ港灣



本港ノ規模及設備ノ上ニ存セザル可ラズ。依テ今其規模ノ標準、即チ其取扱  
ヒ得ベキ貨物噸數ヨリシテ之ヲ見ルニ、

噸數	一、七四〇、〇〇〇噸	一、四二五、〇〇〇噸	六三〇、〇〇〇噸	三九〇、〇〇〇噸
割合	一、〇〇〇	〇、八〇	〇、三六	〇、二二
	現在船中ニヨリ横濱ヲ 經テ東京ニ出入スル貨 物一年ノ平均噸數	二千三百五十萬圓案ニ 於テ取扱ヒ得ベキ貨物 噸數見込額	一千六百萬圓案ニ於テ 取扱ヒ得ベキ貨物噸數 見込額	一千四百萬圓案ニ於テ 取扱ヒ得ベキ貨物噸數 見込額

由是觀之、夫ノ一千四百萬圓案ノ如キ、其規模ニ於テハ僅ニ必要程度ノ二分  
許ヲ充タスニ過ギス、其設備ハ皆無ニシテ即チ船荷役ノ一法ヲ存スルノ  
ミナルヲ以テ、單ニ築港工事ノ縮少極限ヲ劃スルガ爲メニハ、之ヲ想像シ來  
ルノ必要アリシト雖、實際第一期工事實行計畫策トシテハ殆ンド之ヲ顧  
ミルニ足ラズ。且縱令此案ヲ採リテ工事ヲ起ストセンモ、實際ニ於テハ、荷役  
上ノ要求ヨリシテ直ニ若干ノ棧橋設備ヲ附加セザル可カラザルヲ必シ、爲  
メニ一千六百萬圓案ト、其工費ニ於テハ差異ナク、而モ其價值ニ於テハ著大  
ノ相違アルニ終ランヲ恐ル。或ハ之等ノ荷役設備ヲ舉ゲテ箇人ノ經營ニ委  
スベシトセンカ、海外往々ニシテ見ル處ノ私有設備ノ弊竇續出シテ永久ニ

港ノ發達ヲ阻害シ、且ツ築港經濟ヲ錯亂セシムルニ至ランノミ。

故ニ實行計畫トシテハ少クトモ一千六百萬圓案ヲ以テ其縮少極限ト見做  
サバル可ラズ。而シテ其荷役上ノ能度ハ尙僅ニ必要ノ三割六分ニ應ズルニ  
止マルノミト雖、其以上ハ則チ放資ノ多少ニ對シ、築港價值ノ増進極メテ  
急劇ナルモノアリ。茲ニ二百萬圓ヲ加フレバ直ニ必要ノ一半ニ應ズベク、更  
ニ三百萬圓ヲ投ズレバ略々其七割ニ匹敵シ、遂ニ二千三百五十萬圓ニ達シ  
テ最モ適切ナル要求ト合致ス。

然ラバ則チ第一期工事ノ程度ハ、遂ニ一千六百萬圓乃至二千三百五十萬圓  
ノ間ニ於テ之ヲ決定スルノ外ナシ。而モ之等ハ既ニ其設計ノ標準ヲ一ニシ、  
單ニ工事ノ範圍ヲ異ニセルニ過ギザルヲ以テ、其何レヲ選バンカハ、一ニ繫  
ツテ財界ノ狀況如何ニ存スベキノミ。

即チ若シ、我國現下ノ財況ヲ悲觀シテ徒ラニ經費ノ巨大ナルヲ惧レ、其解決  
ヲ阻ミ、爲メニ本市當然ノ發達ヲ抑止シ、且ツ一般經濟上ノ利益ヲ放棄スル  
ガ如キニ比センカ、縱令當初多少ノ施設ヲ缺キ、幾分ノ價值ヲ殺グヲ忍ブモ、  
麗メテ工費ノ輕減ヲ旨トシ、以テ其遂行ノ速カナルヲ期セザル可ラズ。況ヤ



其工事如何ニ小ナリトスルモ、尙之ニ伴フ若干ノ其利便ハ即チ本市ニ對スル新方面ノ利便ニシテ、其發達ニ附與スルニ巔然タル新彩ヲ以テスルモノ、必ズヤ一般ノ港ニ對スル熱心ヲ喚發シテ、將來ノ改善擴張ヲ促スニ至ラン。然ラバ工事上便宜ナル一楷程トシテ見ル、又甚敷非議スベキニハアラジ。是レ極端ナル縮少案ト雖ドモ、尙以テ比較考量ニ資スベキ所以。然レモ一方其以上ノ投資ハ、以テ直ニ多大ナル收利ノ増進ヲ得ベク、茲ニ附加スル工費ハ即チ大小悉ク實價以上ノ活用ヲ爲スベキモノアリ。故ニ若シ市民ニシテ果シテ能ク東京港ノ價值ヲ會得シ、且ツ築港經濟上ノ杞憂ヲ解除シ得ンカ、其必要ノ利益ヲ收ムルニ於テ、今少シク大膽ナリ得ベキモノト信ズ。乃チ此際大ニ築港ノ價值ヲ唱道シ輿論ヲ喚發スルハ、之レ却テ工費問題解決ノ捷路タリトスベク、更ニ近ク好望ナル財界新機運ノ發現ニ乗ジテ、幾多有力ナル手段ヲ盡スアラシカ、一舉姑息ナル縮少案ヲ排シテ、直ニ二千三百五十萬圓案ノ實行ヲ見ルノ甚ダ難カラザルヲ思惟ス。況ヤ東洋大帝國ノ首府トシテ之ヲ見ル、其築港上、切ニ此ノ如キ機運ノ高潮ヲ仰望セズンバアラザルナリ。

余ハ曩ニ白國あんとわいぶ港ニ於テ、偶々其開港一百年祭ニ際會シタルヲ想起ス。而シテ之レ實ニ奈翁一世ガ初メテ同地ニ大小二船渠ヲ築造シ、以テ同市發達ノ基礎ヲ建テタル英識ヲ贊美センガ爲メニシテ、佛國政府ハ特ニ軍艦數隻ヲ派シテ其榮ヲ分チ、市民ハ狂躍シテ一週間ノ盛典ニ從ヘリ。今ニシテ之ヲ見レバ、右ノ二船渠ノ如キハ其規模甚ダ小ナリト雖ドモ、而モ當然能ク之ガ遂行ヲ斷ジテ、今日ノ隆盛ヲ導キタル奈翁ノ明ハ、即チ市民永久ノ感謝ニ價セズンバアラズ。惟フニ今日我東京港ノ事ノ如キ、抑モ亦遂ニ識者ノ一斷ニ俟ツノ外アラシヤ。

○附圖

- 第一期工事縮少計畫壹千四百萬圓案(略)
- 第一期工事縮少計畫壹千六百萬圓案(略)
- 第一期工事計畫貳千參百五拾萬圓案(略)

是日 ○明治卅七年紀元二 直木倫太郎更ニ隅田川口改良意見書ヲ

隅田川口改良意見書提出

提出ス。○隅田川口改良意見書。

隅田川口改良意見書提出 隅田川口改良意見書云フ、

帝都時代ノ港灣



良意見書提出事項

山良意見書提出事項

東京市史稿

隅田川口改良意見書

對出、附圖 壹葉

右送達候也。

明治三十七年六月七日

東京市參事會

東京市長尾崎行雄殿

隅田川口改良意見

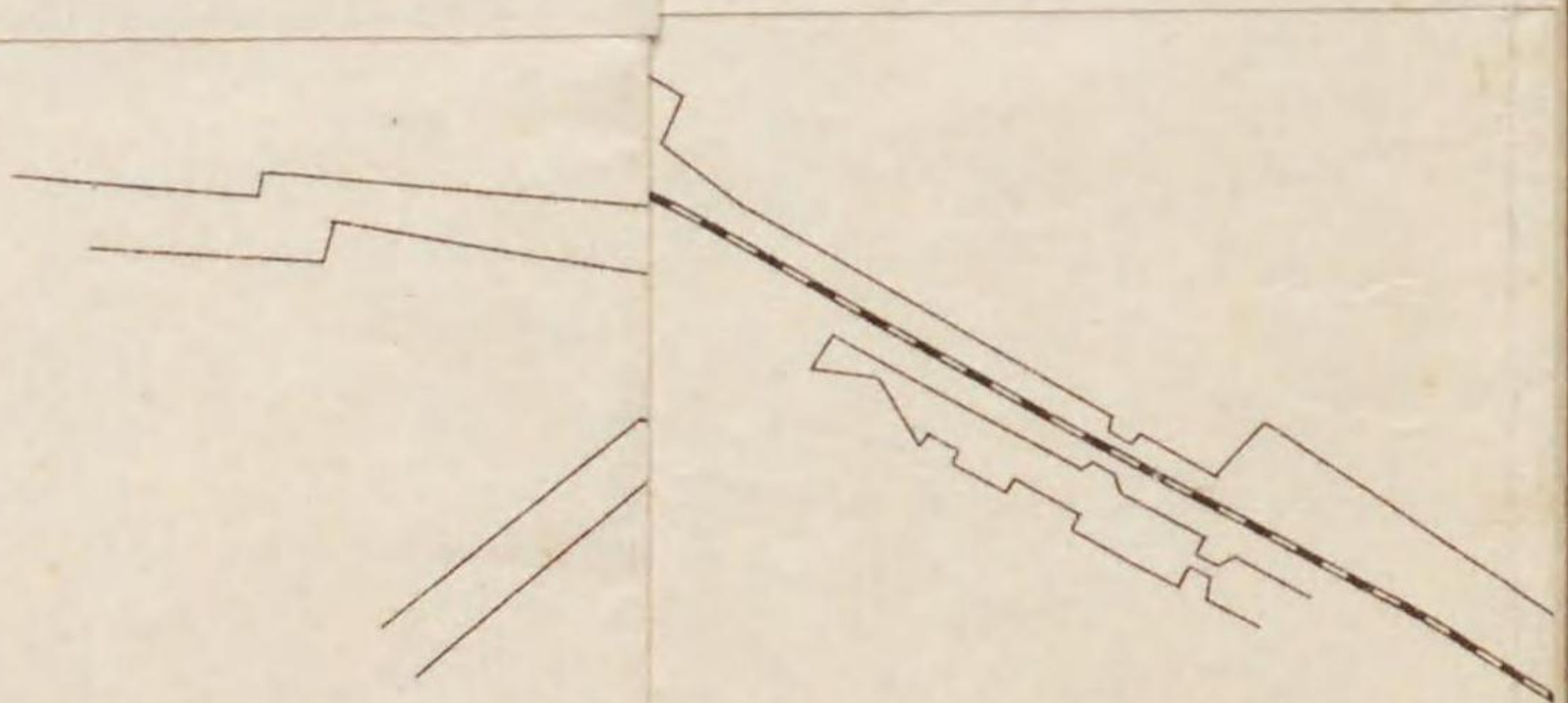
第一章 改良ノ必要

隅田川口ヲ改善シテ其水運上ノ不便ヲ除却スルノミナラズ、併セテ相當ト認ムル程度ニ於テ之ニ積極的改良ヲ施スハ、貨物輸送ノ現況ニ照シテ最モ緊要ノ措置ナルヲ信ズ。

乃チ試ニ該河口現在ノ缺點ヲ舉グレバ其著大ナルモノニアリ、航路ノ埋没及河内水面ノ欠乏之ナリ。

第一、航路ノ埋没 隅田川口埋没ノ程度如何ハ、新ニ測量調査ヲ遂グルニ非ズンバ、精細ヲ知悉シ難シト雖モ、其大體ハ、本市ニ於テ嘗テ施行シタル東京灣浚浚工事ノ效果ヲ現況ニ對比スルニ於テ、略々之ヲ推定スルヲ得ベシ。即

技師直木倫太郎



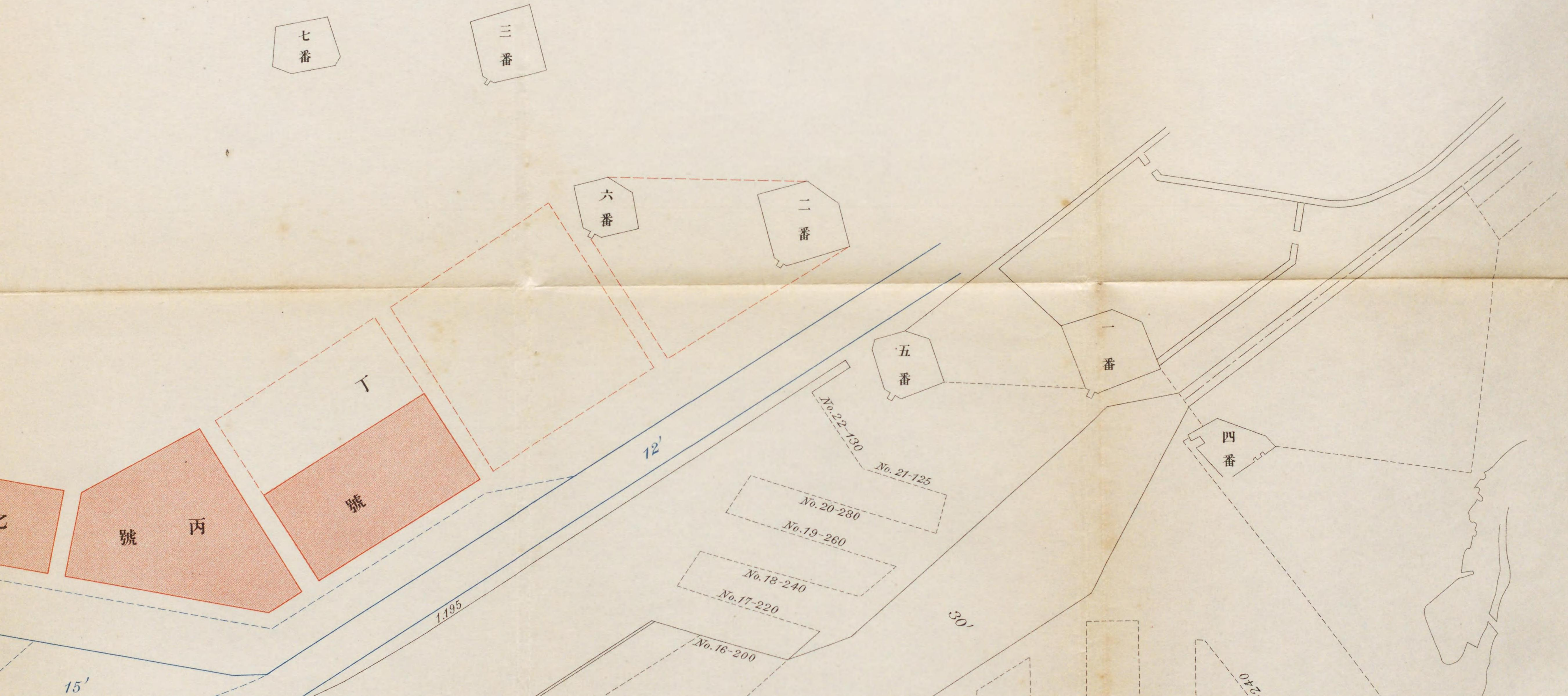
新橋停車場





隅田川改口良意見書附圖

縮尺一萬二千分一



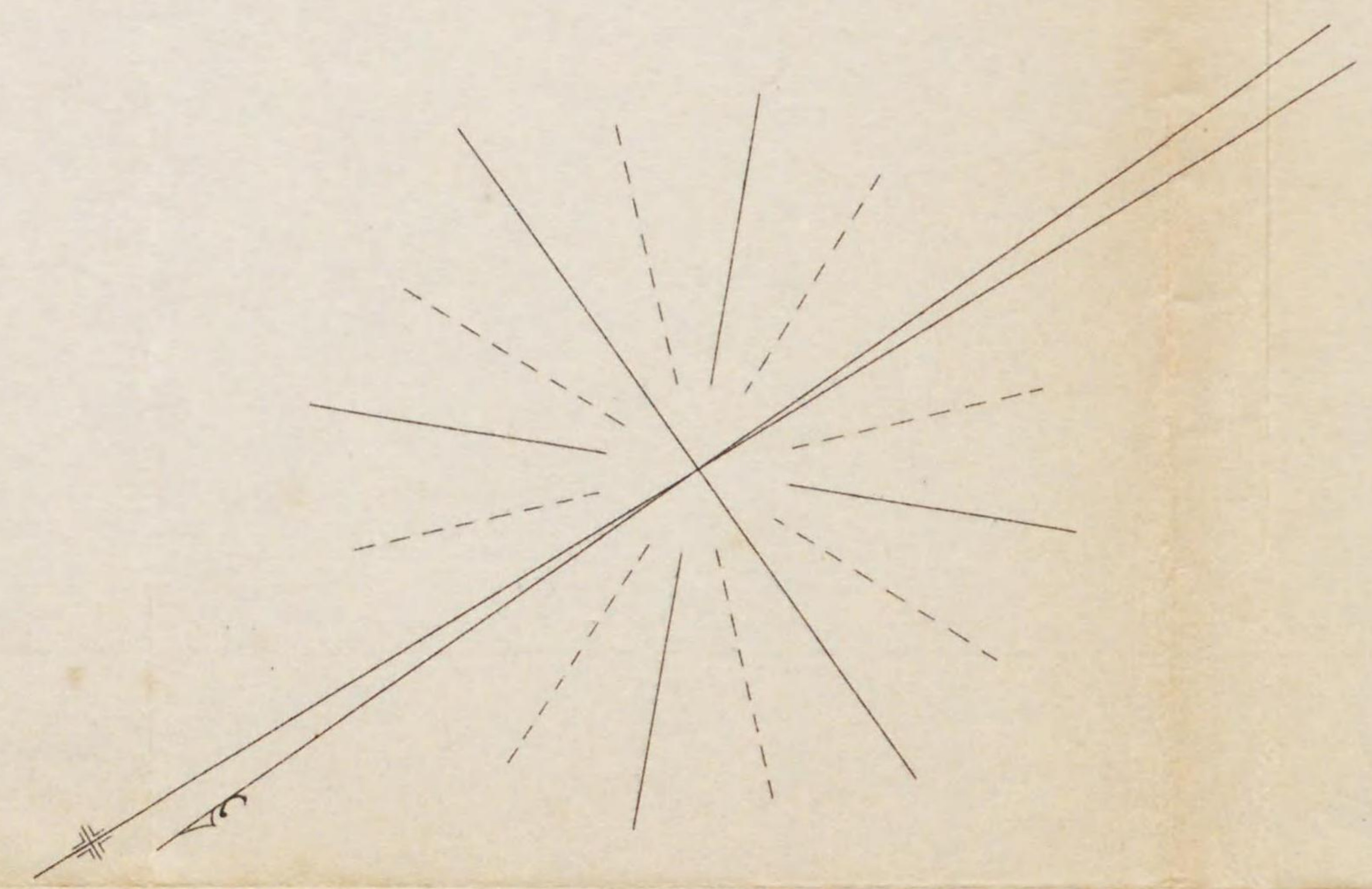
灣  
 港  
 浚  
 工  
 事  
 の  
 效  
 果  
 を  
 現  
 況  
 に  
 對  
 し  
 難  
 し  
 知  
 悉  
 し  
 難  
 し  
 精  
 細  
 な  
 工  
 事  
 不  
 可  
 少  
 ず  
 現  
 況  
 に  
 對  
 し





隅田川口改良意見見書附圖

縮尺一萬二千分一



七番

三番

六番

二番

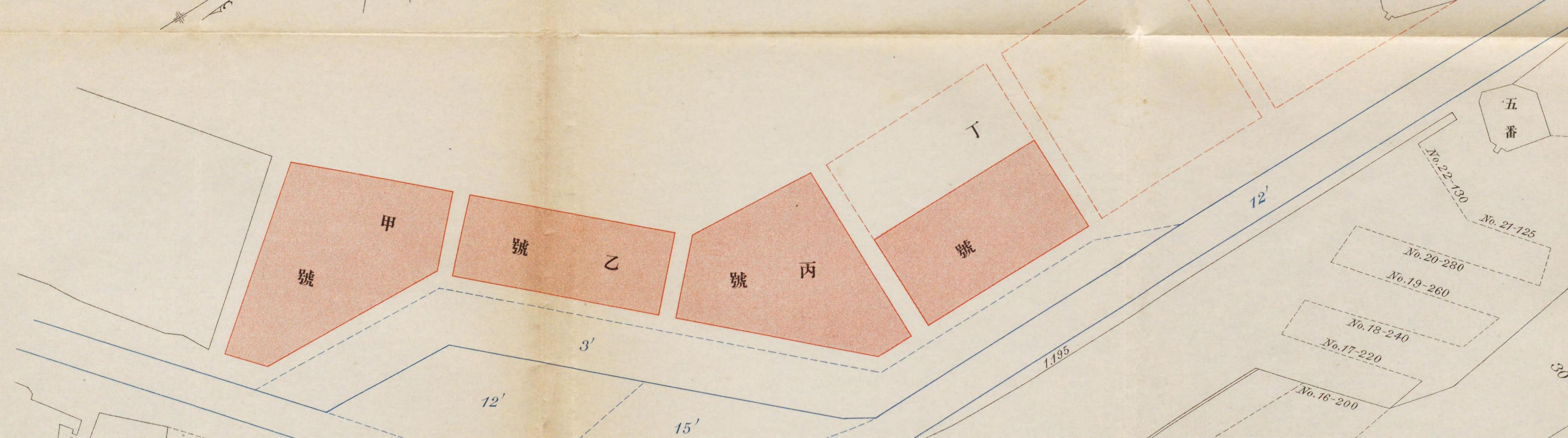
五番

甲  
號

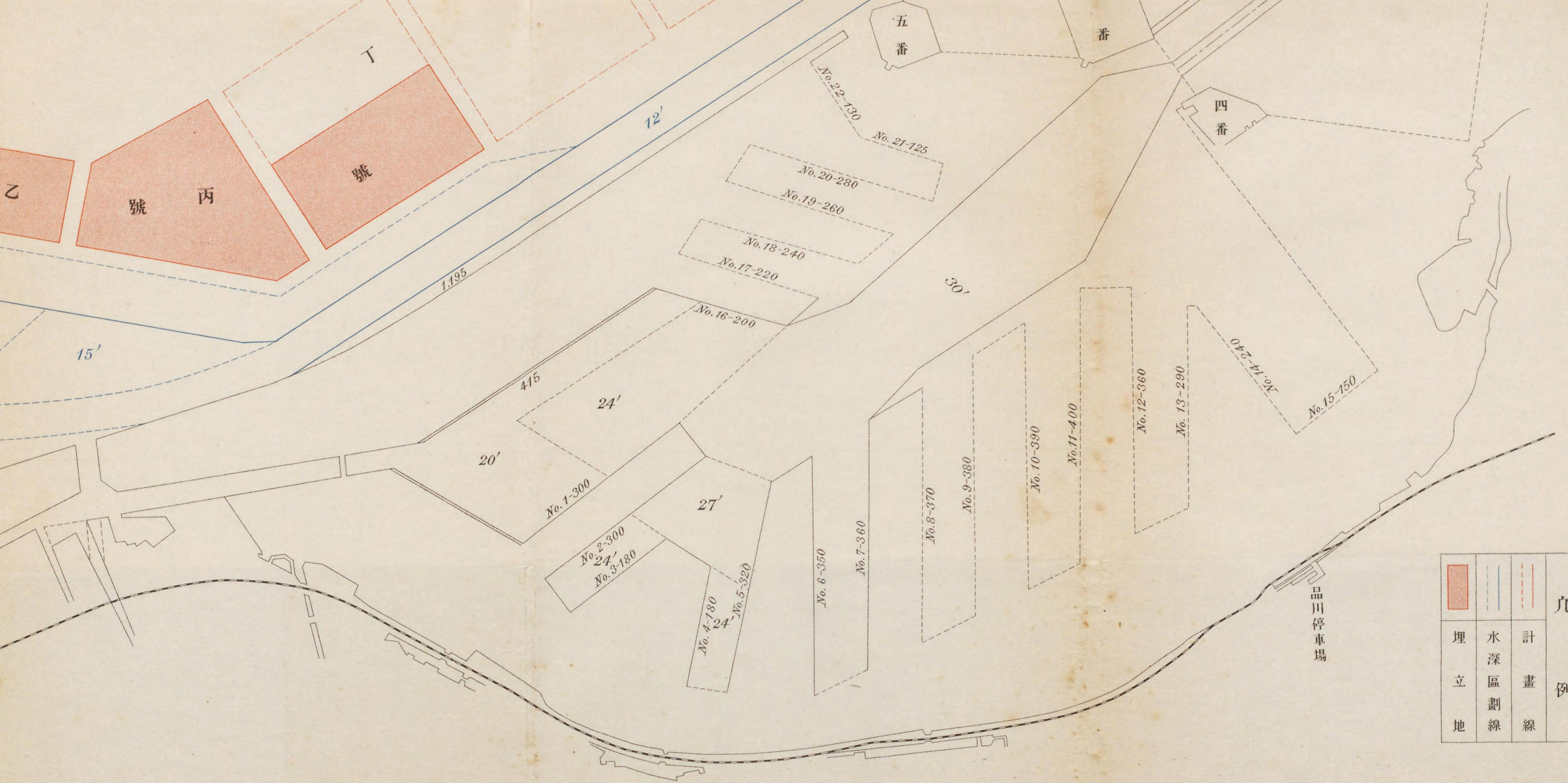
乙  
號


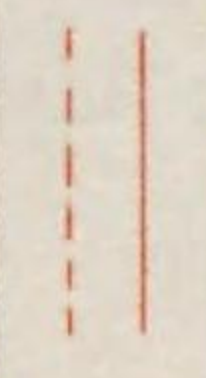
丙  
號

丁  
號



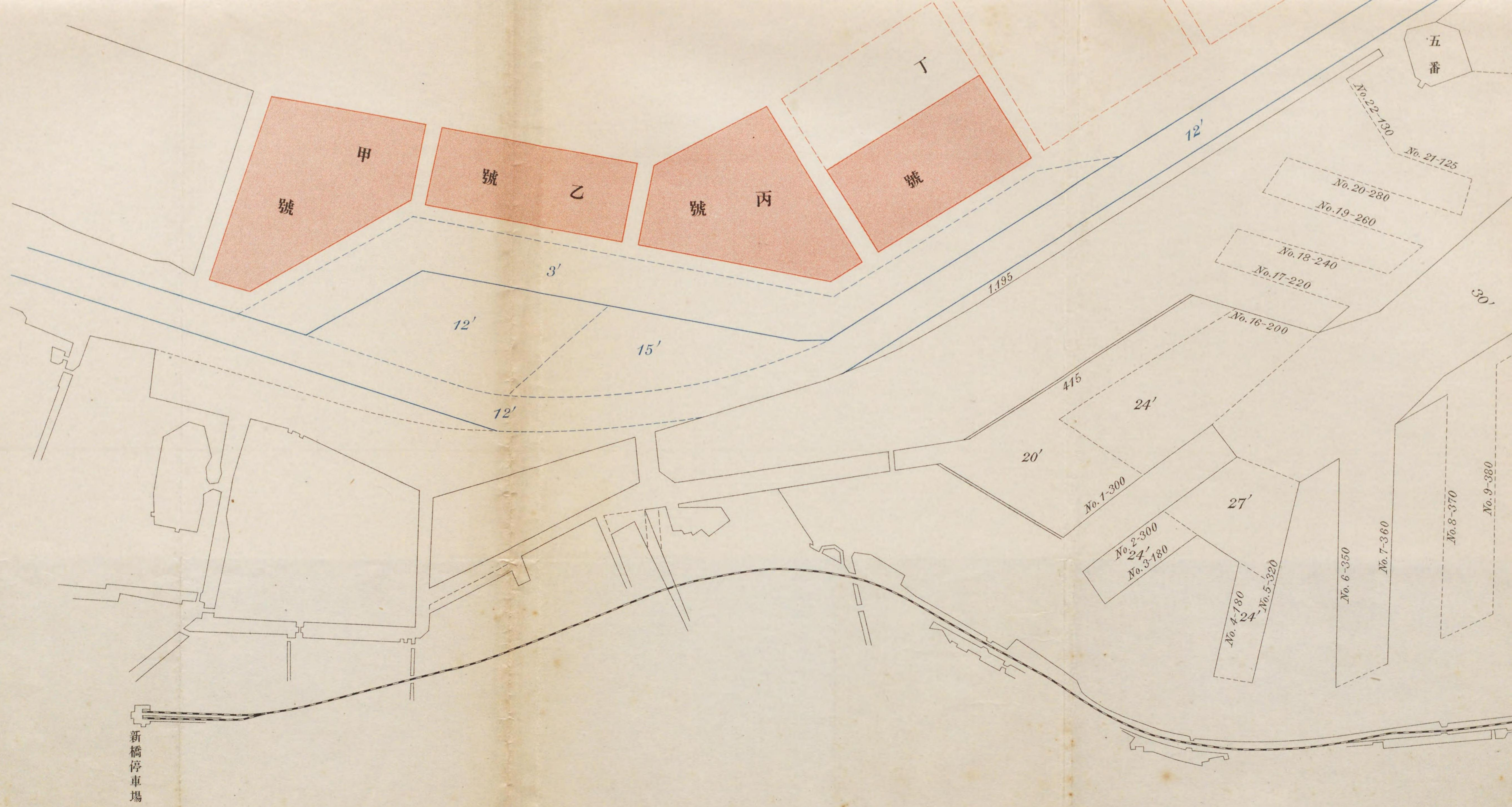




			凡 例
埋 立 地	水 深 區 劃 線	計 畫 線	

灣浚浚工事ノ效果ヲ現況ニ對比スルニ於テ、略々之ヲ推定スルヲ得ベシ。即  
 ザンハ精細ヲ知悉シ難シト雖、其ノ大體ハ、  
 品川  
 品川





新橋停車場

五番

甲號

乙號

丙號

丁號

No. 20-280

No. 19-260

No. 18-240

No. 17-220

No. 16-200

No. 1-300  
No. 2-300  
No. 3-180

No. 4-180  
No. 5-320

No. 6-350

No. 7-360

No. 8-370

No. 9-380

12'

15'

12'

3'

1195

415

20'

24'

27'

12'

30'



チ該工事ハ去ル明治二十年度ヨリ同二十八年ニ互リ、工費約四十五萬圓ヲ投ジテ、航路濶三十間乃至七十間ヲ靈岸島干潮面以下十二尺ニ浚深シタルモノナルガ故ニ、若シ今尙其航路ニ右浚深當時ノ水深ヲ保持スルニ於テハ、能ク壹百噸内外ノ船舶ヲ永代橋附近迄自由ニ通航セシメ得ベキ筈ナリ。サレド事實ニ於テハ、今日僅カニ百噸此載荷吃水平均六尺ナリトス以下ノ小形船舶ヲ通ズルニ止マリ、其以上ノモノニ在リテハ、搭載荷物ヲ輕減スルカ若クハ空船ノ場合ニノミ辛フジテ出入シ得ベキニ過ギズ。即チ此ノ如キハ既ニ隅田川ノ利用ニ對シテ遺憾尠ナカラザルノミナラス、其後尙現状ノ儘ニ放置シテ顧ミザルニ於テハ、間斷ナキ航路ノ埋没ニヨリテ、水運上益々其不便ノ増大スベキヲ必ス。故ニ今ニ於テ適當ノ計畫ヲ定メ航路ノ浚深ヲ施スベキヲ、既ニ其必要甚敷切迫セルヲ知ルベシ。

第二、水面ノ欠乏 現時河内ニ出入スル小形船舶數ハ一年平均一萬一千艘〔内汽船四千艘、帆船及日本形船七千艘〕ニ達シ、其往來極メテ頻繁ナルニ拘ラズ、水面甚ダ狹隘ナルヲ以テ、自ラ航路及碇泊ノ區劃截然タルヲ能ハズ。從テ河内ノ混雜名狀スベカラザルニ加ヘテ、往々不測ノ災禍ヲ惹起スルヲ見ル。



故ニ今日河口適當ノ位置ニ船溜ヲ新設シテ河内水面ノ擴大ヲ圖リ、且ツ之ニ良好ナル庇障ヲ與ヘテ船舶ノ碇泊ヲ安全ナラシムルハ、航路ノ浚渫ト相俟テ、河口改良上其必要缺クベカラザルヲ認ム。況ンヤ該船溜ノ新設ハ、更ニ現在品川沖ガ、碇泊地又ハ荷役地トシテ有スル幾多ノ不備缺點ヲ或程度迄、比較的容易ニ補修シ得ベキトノ利アルニ於テオヤ。

(第二章第二節參照)

備考 試ニ品川沖荷役ノ實況ヲ見ルニ、本船ハ常ニ陸ヲ距ル凡三哩ノ沖合ニ碇泊スルヲ要シ、其位置風波ヲ遮ルベキ何等ノ障屏ヲ有セザルヲ以テ、何レノ風雨ニテモ十分ノ荷役整ハズ、空シク船舶ヲ掩留セシムル場合甚ダ多シ。從テ船舶中、品川沖荷役ヲ利トスルモノアルニ拘ラズ、其多數ハ近來益々横濱ニ入港シ、同地ヨリ舩舟ニ依リテ貨物ヲ東京ニ輸送スルノ傾向ヲ増進セリ。元ヨリ品川錨地ニ於ケル以上不備ノ點ハ、懸テ東京築港ノ速成ヲ促ス原因ノ一タルコト、言ヲ俟タザル處ニシテ、大船巨舶ニ對シテハ、到底築港ヲ施スニアラザレバ其不備缺點ヲ除却スル能ハズ。然リト雖ドモ、河口ノ改良ヲ施行スルニ際シ、適當ノ地ヲ撰ムテ船溜ヲ新設スルニ於テハ、從來品川沖ニ假泊シ、若干ノ積荷ヲ輕減シテ河内ニ出入シタル汽船帆船ハ勿論、其他、品川沖若クハ横濱ニ入港スルヲ常トシタル船舶中ノ一部分ニ對シテモ、直ニ隅田川口ニ安全ナル碇泊地ヲ與フルコトヲ得テ、本市ノ蒙ルベキ直接間接ノ利益尠ナカラザルヲ證ス。又將來築港落成後ニ於テモ、該船溜ハ、依然河内ニ出入ス

ル小形船舶ノ碇繫場トシテ多大ノ價值ヲ有スベキコト明確ナリトス。

隅田川口改良ノ理由實ニ此ノ如シ。而モ其著手ノ容易ナルト、事業ノ有利ナルトハ、更ニ少シク之ヲ辨ゼザル可カラズ。蓋シ本工事ニ要スル工費豫算ハ、該河口竝ニ附近海面ノ測量調査ヲ完了シ、且ツ其改良計畫ヲ決定スルニ非ルヨリハ、未ダ俄ニ斷言シ得ラズト雖ドモ、大凡二百萬内外ヲ要スルニ止マリ、且ツ其工期モ五年ニシテ足ルベシ。而シテ更ニ本工事ヨリ生ズル必然ノ結果トシテ、二十萬坪近キ新埋立地ヲ築造シ得ベキガ故ニ、其埋立地ノ位置ヲ最モ有利ナル地域ニ撰定スルニ於テハ、自然工費ヲ回收シ得ベキノミナラズ、更ニ將來本市ニ附與スルニ好個ノ一財源ヲ以テスベシ。即チ其直接ノ利益トシテハ、(一)現在水運上ノ不便ヲ除却シ、(二)隅田川利用ノ範圍ヲ擴大シ、(三)市街地區ヲ増加シ、(四)且ツ其工費回收ノ途ヲ有スルガ如キ、實ニ明カニ一舉兩得ノ事業タラザランヤ。

且ツ、隅田川口ノ浚渫及ビ新船溜ノ築設ハ、毫モ東京築港ノ目的及ビ設計ト抵觸スルモノニ非ズ。蓋シ築港落成後ト雖ドモ、芝浦繫船處ハ專ラ之ヲ大船ノ用ニ供スルガ故ニ、小形船舶ハ依然トシテ隅田川筋ニ出入スベク、而シテ



統計上、是等小船ニ依ル輸送貨物ノ數量著大ナルニ見レバ、其利用ハ將來築港ト相俟テ寧ロ愈々増進スベキモノタリ。故ニ築港計畫ノ進捗如何ニ關セズ、隅田川口ノ改良ヲ計營シテ、以テ東京市水運ノ一半ニ對スル利便ヲ啓發スルモ、相互ノ關係上何等ノ不可ナキヲ知ルベシ。

第三章 計劃ノ大要

第一 航路

隅田川ノ利用ニ就テハ經濟上自ラ其適度ヲ存ス。是ヲ之レ顧ミズシテ、茲計深水港ヲ營ミ、以テ直ニ大船ノ出入ニ利セントスルガ如キハ、其不得策ナルヲト固ヨリ言フ俟タズ。故ニ本計畫ニ於テハ、該河ノ利用竝ニ改良ノ程度ヲ付、專ラ經濟上ノ得失ヲ稽査シテ、今日ニ最モ適切ナルモノヲ撰ビ、乃チ永代橋以下、航路ノ幅員ヲ五十間トシ、之ヲ第四砲臺干潮面以下十二尺(靈岸島干潮面以下十三尺五寸ニ當ル)ニ浚渫スルコトハセリ。然リ而シテ隅田川ニ本程度ノ改良ヲ施スニ於テハ、現時河内ニ出ハズル大船以噸數百噸(尙以上ノ船舶ニシテ入津スルモノアレドモ搭載荷)ナルニ對シ、約五百噸迄ノ船舶ヲ滿載ノ儘、自由ニ入港セシメ得ベキヲ以テ、該川利用ノ

範圍ハ、爲メニ著シク増加スベキナリ。

第二 船溜

新船溜ノ位置ハ、之ヲ月島ノ南ニ隣レル沿地ニ撰ビ、三個ノ島嶼埋立地ニヨリテ其水面ヲ抱擁セシム。蓋シ該船溜ハ、可成河内ニ進入セル地點ニ置クヲ以テ利益トスレドモ、永代橋又ハ靈岸島附近ニ於テハ到底此種ノ施設ヲ爲スベキ餘地ナシ。否ラザレハ、現在ノ市街地ニ多大ノ潰地ヲ生ジ、經濟上得失相償ハザルモノト認ム。

船溜ノ水面積ハ凡十五萬五千坪ニシテ、内三萬三千坪ヲ干潮面以下十五尺ニ、四萬七千坪ヲ同十二尺ニ浚渫シ、爾餘ハ之ヲ干潮面以下三尺ニ止メントス。但シ航路ノ水深干潮面下十三尺ナルニ係ラズ、船溜ノ一部ニ十五尺ノ水深ヲ保タシムル所以ノモノハ、之レ特ニ千噸内外ノ船舶ニ對シ、半潮時ヲ利用シテ航路ヲ通過スルニ於テハ、直接該船溜ニ出入碇泊スルヲ得セシメンガ爲メナリ。從テ現時、品川沖荷役ノ困難ニ苦ミ、若クハ已ムナク横濱ニ入港シテ舢舨運漕ノ不便ヲ借レル千噸内外ノ船舶ハ、自然右船溜ニ來往スル傾向ヲ惹起スベク、其利用ノ範圍ハ漸次増大セラレベケン。然レドモ地勢上、其



擴張ハ必要ニ應ジテ容易ニ工風シ能フベキガ故ニ、茲ニハ電メテ工費ノ節約ヲ行ヒ、即チ全水面積ノ一半ヲ十二尺乃至十五尺ニ浚渫スルニ止ム。

第三 埋立地

本改良工事ヨリシテ生ズベキ浚渫土量ハ大凡四十五萬坪ナルベシ。乃チ之ヲ以テ船溜周圍ノ埋築ニ充ツルトキハ、圖面上實線ニテ示セル如ク、甲乙丙號埋立地ノ全部及ビ丁號ノ一半ヲ完了スルニ足り、其地坪約十八萬八千坪ナリトス。

埋立地坪内譯

稱 號	面 積
甲號埋立地	五六、三〇〇 <sup>坪</sup>
乙號埋立地	三六、七〇〇
丙號埋立地	五三、九〇〇
丁號埋立地 (區域)	四一、二〇〇
合 計	一八八、一〇〇

惟フニ甲乙丙號埋立地ハ、其前面直ニ新船溜ヲ擁スルヲ以テ、自然船舶ノ出入及碇泊ニ關シテ幾多有利ナル施設經營ヲ爲スニ適シ、且ツ市街地又ハ製

造工業地トシテ、等シク優勝ノ地區タラシムルヲ得ベク、從テ其貸地料若クハ賣却價格ノ如キモ、全ク現時ノ月島ヲ以テ律ス可ラザルヤ明カナリ。而シテ特ニ該埋立地ヲ三箇ニ區分シ、其間小運河ヲ貫通シタルハ、畢竟接水面ヲ増加シテ、該地域ノ利便ヲ多カラシメンガ爲メトス。

第三章 收支概算

以上ハ略々隅田川口ニ對シ、今日適切ナリト認ムル程度ノ改良意見ヲ開陳シ得タリト信ズ。唯其計畫ニ關シテハ、現在之ガ基礎トスベキ參考材料不備ノ爲メ、單ニ大體ノ方針ヲ述ベタルニ止マリ、不日河口竝ニ附近海面ノ測量調査ヲ結了スルニ非ルヨリハ、之ヲ決定スルコト能ハズ。從テ今茲ニ掲ゲントスル收支概算ノ如キモ、他日其設計ト共ニ多少變更スベキヲ免レズト雖ドモ、只試ニ以上ノ規模ニ就テ之ヲ計量シ、以テ其大要ヲ察知スルニ資センカ。

(一) 工費豫算表

一、金百九拾萬圓

總 工 費

内譯

帝都時代ノ港灣



金九拾萬圓  
 金三拾萬圓  
 金六萬圓  
 金四拾六萬圓  
 金六萬圓  
 金拾貳萬圓  
 而シテ該工事ハ五ヶ年ヲ以テ之ヲ完成スベシ。乃チ其工費年度割ヲ擧グレバ、  
 第一、二年、三、四年、五年、六、七、八、九、十年、計、六拾、四萬圓  
 第三、四年、五年、計、三拾、二萬圓  
 第四、五年、計、三拾、二萬圓  
 第五、六年、計、百、九拾、萬圓  
 合計、百、九拾、萬圓  
 次ニ進デ本工事ヨリ生ズル収入ヲ見ルニ、(一)貸地料、(二)賣却地代、(三)不用品賣

却代等ナリ。  
 若シ埋立地中、特ニ水面ニ隣接セル最良地帯ヲ撰ビテ、物揚場、上屋及ビ倉庫敷トシ、之ヲ市ニ保有シテ賣却セザルモノトセバ、埋立地坪ハ更ニ左ノ如ク區分スルヲ得ベシ。  
 埋立地區分表

合	地貸			甲號埋立地	乙號埋立地	丙號埋立地	丁號一部埋立地	計
	倉庫敷	上屋敷	物揚場敷					
道				一、一〇〇坪	一、一〇〇坪	一、一〇〇坪	一、一〇〇坪	四、六〇〇坪
賣却地	三、三〇〇	二、四〇〇	二、四〇〇	二、九〇〇	二、八〇〇	二、八〇〇	二、五〇〇	一〇、六〇〇
路敷	二七、九〇〇	一、四〇〇	一、四〇〇	一七、〇〇〇	一四、二〇〇	二七、六〇〇	二〇、三〇〇	九三、〇〇〇
合	二一、六〇〇	一四、二〇〇	一四、二〇〇	三六、七〇〇	一九、〇〇〇	五三、九〇〇	四一、二〇〇	一八八、一〇〇
合	五六、三〇〇	三六、七〇〇	五三、九〇〇	四一、二〇〇	一八八、一〇〇			

即チ  
 貸地總坪數 二萬五千坪  
 賣却地總坪數 九萬三千坪  
 帝都時代ノ港灣 二八七



ナリ。從テ本工事ヨリ生ズル收入額ハ、大略左ノ如クナルベシ。

(一)貸地料

一年一坪ニ付一圓トシテ、二萬五千圓。

(二)賣却代

一坪ニ付十圓トシテ、九十三萬圓。

(三)不用機械類賣却代

原價ノ一割トシテ、二萬三千圓。

仍テ今試ニ公債(六分利付)ヲ募集シ、且ツ毎年市稅拾萬圓宛ノ補助ヲ得テ起工スルモノト假定スルトキハ、工事落成後十三年目ニ債務全部ヲ償還スベク、若シ一年拾五萬圓宛ノ市稅補助ヲ得バ、即チ落成後五年ニシテ之ヲ完了スルニ足り、其他之ヲ目安トシテ、更ニ幾様ニモ其償還方法ヲ工風スルヲ得ベキヲ以テ、工費又ハ貸地料、賣却地代等ノ見込額ニシテ若干ノ差異アランモ、收支計算上、敢テ困難ナラザルモノト云フヲ得ベシ。

或ハ若シ是等ノ工事ニ際シ、海外諸港ニ屢々見ル處ノ如ク、且ツ現ニ大阪市諸川口ニ適用セルモノ、如ク、改良ニヨリテ利益ヲ享クベキ船舶ニ、一定ノ入津料ヲ賦課シテ、以テ工事費及維持修繕費ノ負擔ヲ輕減スル方法ヲ採ラシカ、其著手ハ更ニ容易ニシテ、而モ其施設ハ一層積極的ナルヲ得ベク、本市水運ノ一半ニ對スル隅田川ノ價值、是ト共ニ愈々重カルベキヲ必ス。(次章第三節參照)

第四章 餘論

茲ニ本意見書ヲ終ルニ際シ、尙一二ノ事項ニ付テ附記スベキモノアリ。

第一 築港事業トノ關係ニ就テ

隅田川口改良事業ハ築港事業ト共ニ、各東京市水運ノ一半ニ對スル任務ヲ負擔シ、相互ノ關係極メテ密接ナリト雖ドモ、亦其事業ノ性質ヨリシテ、到底相犯カスコト能ハザルヤ、前既ニ之ヲ述ベタリ。即チ二者同時ニ其經營ニ進ムルモ可ナリ。又ハ相前後シテ之ヲ行フモ可ナリ。其利害ハ毫モ牴觸スル處ナク、其事業ヤ各自獨立セリ。夫レ然リ、然レモ萬一、築港事業ノ決行ニシテ、現下ノ財況等ヨリ未ダ容易ニ其機ヲ得ザルニ方リテハ、寧ロ右ノ二事業ヲシテ幾分カ便宜相關聯セシムルノ利益却テ著大ナルベキヲ信ズ。即チ先ヅ、此點ニ就テ有スル予ノ考察ヲ擧グレバ、

今回施行セントスル隅田川口改良事業ヲシテ尙一層有利ナラシメ、由テ以テ得ル處ノ利益ハ、擧ゲテ築港工費財源ノ一部ニ投ズベキコト之ナリ。サラバ、如何ニシテ右改良事業ノ利益ヲ更ニ著大ナラシメ得ベキカ。曰ク、新ニ築成スベキ埋立地ノ位置ヲ撰定スルニ方リ、一層有利ナル地域ヲ以テ之



ニ充テシコトヲ要ス。今此主意ニヨリ、隅田川口附近ノ海中、最有望ナル地區ヲ詮索スルニ於テハ、予ハ斷ジテ、彼ノ築港計畫上、將來市街地トシテ埋築賣却ヲ豫想セル砲臺以內ノ地域、殊ニ其芝浦地先ノ埋立地ニ匹儔スベキモノアルヲ知ラズ。即チ若シ之ヲ以テ、本設計書ニ掲ゲシ我船溜周圍ノ埋立地區ニ比センカ、其位置上、隅田川濬筋ヲ隔ツルト否ト、陸路直接本市トノ連絡ナキト否トハ、其地區ノ利便ニ關スルモノ實ニ鮮少ナラズ。從テ其地價ノ如キモ、將來ノ發達ト共ニ、又著大ノ差異ナキ能ハズ。故ニ船溜周圍ノ埋立地ハ、暫ク之ヲ必要ニシテ且ツ有利ナル沿岸一帯ノ部分ノミニ止メ、爾餘ノ土砂ヲ舉ゲテ、寧ロ芝浦地先ノ埋築ニ使用スルヲ得バ、其措置ノ最有利ナルヲ極メテ明白ナリ。

更ニ之ヲ築港事業ノ方面ヨリ見シカ。今日先ヅ此部分ヲ埋築スルノ利益ハ、豫メ其地區ノ發達ヲ促スニヨリ、他日築港工事ト共ニ、初メテ埋築ヲ竣ルニ比スレバ、著シク其地價ヲ騰貴セシメ得ベキニアリ。且ツ其埋立地區ハ毫モ將來港ノ附屬地タルベキ部分ニ跨ガラザルヲ以テ、築港工事中及ビ其落成後ト雖ドモ、之ニ何等ノ障礙ヲ與フルコトナク、只便宜上其本末ヲ遂行シテ、先

ヅ著手ノ易キニ就クノ便アリ。故ニ若シ東京市全般ノ利益ヨリ打算シテ之ヲ觀シカ。隅田川改良工事ハ、其埋築事業ニ就テ、築港事業ト相關聯セシムルヲ以テ、初メテ其價值最モ大ナリトスベシ。只併シナガラ之等ノ埋築地タル、固ヨリ築港ノ場合其賣却ニヨリテ、工費償還資金ノ主要ナル部分ニ充ツベキ豫定ニシテ、然ラズンバ將來築港事業ノ經濟ニ大蹉跌ヲ生ズベキヲ必ス。故ニ之ヲ同事業以外ノ目的ノ爲メニ賣却ス可ラザルハ正シク其所ニシテ、必ズヤ常ニ市有地トシテ之ヲ保管シ、以テ他日築港ノ大目的ニ提供センコトヲ要ス。コモ亦、東京市ノ利益ヨリシテ之ヲ觀レバ、則チ明白ニ一毫ノ不利ナキヲ判ズルヲ得ベシト雖ドモ、只爲メニ隅田川口改良事業ヲシテ經濟上、獨立經營シ能ハザルニ至ラシムベキヲ如何。

茲ニ於テカ最後ノ結論ニ達ス。曰ク、右改良事業ニ對シ、強テ經濟上ノ獨立ヲ必要ナリトセバ、即チ比較的不利ナル船溜周圍ノ埋築ヲ以テ満足スルノ外ナシ、然レドモ若シ眞ニ東京市全般ノ利益ヨリシテ之ニ想到セバ、宜敷、右改良事業ノ經濟的獨立如何ニ係ラズ、先ヅ芝浦地先埋築ノ巨利ヲ收メ、而シテ



其收得スル利益ノ全部ヲ舉ゲテ、築港工費財源ノ一部トナサンコトヲ要ス。即チ豫メ右埋立地ヲ善用シテ地價ノ騰貴ヲ圖リ、以テ築港工費償還ノ效果ヲ大ニシ、又ハ其賣却ニ至ル迄年々收得スベキ貸地料(築港ノ際初メテ埋築スルニ比スレバ、全然餘分ノ利得トシテ算スベキモノ)ヲ以テ、築港工事遂行上必要ナル特別市稅輕減ノ一手段タラシムルヲ得バ、之レ即チ側面ヨリシテ築港事業ノ遂行ヲ促スベキモノト云フベシ。而シテ一方、隅田川口改良事業ハ、既ニ航路ノ改良及ビ船溜ノ新設ニヨリテ、本來ノ目的ヲ達シ、其工費ニ相當セル利便ヲ舉ゲタルモノ、豈更ニ工費經濟ノ獨立ニ拘泥シテ、其以上ノ效果ヲ沒却セシムルヲ要トセンヤ。

第二 築港工費基金増大ノ工風ニ就テ  
若シ更ニ本改良工事ト關係シテ、築港工費金ノ増加ヲ算スルアラシカ。宜敷築港事業ノ爲メニ、東京市内官有敷地ノ目下荒蕪ニ屬スルモノ一切ヲ舉ゲテ、市ニ無料下附ヲ受クベキハ勿論、更ニ官有地中現ニ或目的ニ使用サレ、若クハ使用サレントシ、又ハ其地内ニ現在若干ノ營造物アルモノト雖ドモ、特ニ其位置ヲ必要トスルニ非ル限リハ、本改良工事ニ於ケル新船溜周圍ノ埋

立地又ハ其以南ニ必要ノ地區ヲ埋築シ、代地トシテ其交換ヲ得テ、以テ現在市街地ノ經濟的整理ヲ行ヒ、且ツ之ニ由リテ得ベキ利益ヲ築港經營ニ資スベキコト之ナリ。乃チ其一例ヲ舉グレバ、京橋區築地四丁目所在海軍省用地(海軍大學所在地ニシテ其面積七萬七千餘坪)ノ如キ、單ニ隅田川筋利用ノ點ヨリ見ルモ、之ヲ市街地タラシムルノ利益ナルコト元ヨリ多言ヲ俟タズ。而モ其代地ヲ、一層水運ノ便アル所ニ撰ブニ於テハ、海軍省ニ取ルモ亦甚シキ遺憾ナカラシ而已。

第三 船舶入津料ニ就テ

今先ツ船舶入津料ニ關シ、最モ手近キ一例トシテ、大阪市諸川口ニ於ケル徵收ノ實況ヲ舉ゲンニ、

(一)入津料徵收規則(抜萃)

大阪府令第二十一號(明治卅二年二月廿五日發布)

同 年四月一日施行

第一條 安治、木津、尻無、三川、鯖、尾、杭以內ニ入津スル船舶ハ、左ノ料率ニ依リ入津料金ヲ徵收ス。

日本形(間數船ノ部)



二間以下	一艘ニ付	金二錢
三間船	同	金四錢
四間船以上	同	金七錢
同 (石量船ノ部)		
五十石以上	十石ニ付	金三錢
百石以上	同	金五錢
百五十石以上	同	金七錢
二百石以上	同	金七錢三厘
三百石以上	同	金七錢七厘
五百石以上	同	金九錢七厘

西洋形船

百噸未滿 一噸ニ付 金五錢貳厘  
 百噸以上 同 金五錢七厘

間石船積高對照表

(備考)間船ノ積石ハ、其構造、形狀等ニヨリ一定シ難キモ、大要左ノ如クナルベシ。  
 二間船 五十石積  
 三間船 百石積  
 四間船 百五十石積

五間船 二百石積  
 六間船 二百七十八石積  
 (二)入津料及船數表

年 度 區 分	船 數	入 津 料
二 十 二 年 度	八四、二一五	六五、六七五・五四〇
二 十 三 年 度	八五、一九九	四八、四〇二・一五九
二 十 四 年 度	八五、九二二	五二、八三三・〇七六
二 十 五 年 度	八六、七三九	五六、〇九七・七四七
二 十 六 年 度	九六、八八七	五五、五九九・二七六
二 十 七 年 度	九七、五一二	五二、八七三・一六九
二 十 八 年 度	一〇三、二五四	六二、一〇二・二五五
二 十 九 年 度	一〇三、八〇九	五五、五〇九・一〇三
三 十 年 度	一二三、六五三	九三、六三九・八九〇
三 十 一 年 度	一〇八、七〇八	一〇三、〇四五・八四五
三 十 二 年 度	一一四、二五八	一一四、〇一八・二三六
三 十 三 年 度	一一七、一五九	一一七、三五二・四一七
三 十 四 年 度	一二二、一二六	一二四、一〇五・四七六
三 十 五 年 度	一一四、八三五	一二九、七八六・三三六



合 計	一、四三四、二七六	一、一三一、〇四〇・五二五
以上十四年間平均一年ニ付	一〇二、四四八	八〇、七八八・六〇九
最近五年間平均一年ニ付	一一三、四一七	一一七、六六一・六六二

是ニ由テ觀レバ、近時大阪府ハ、毎年約拾壹萬參千艘ノ船舶(此噸數大凡百九十六萬噸)ヨリ、十一萬七千餘圓ノ入津ヲ徵シ、更ニ其收入ヲ、航路、浚渫、燈標築設維持等ノ經費ニ充テ、以テ一般船舶ニ對スル便益ヲ、著々増大シツ、アルヲ知ルベシ。

而シテ試ニ其效果ヲ以テ、各船舶ノ負擔額ニ對比センカ、恐ラク何人ト雖ドモ容易ニ其負擔ノ輕少ニシテ、其價值ノ多大ナルヲ首領スベク、水運ノ具備未ダ十分ナラザル場合、其進捗ヲ圖ルノ道トシテ、寔ニ當然ノ措置タルヲ信ゼズンバアラス。之レ海外諸港ト雖ドモ未ダ此種ノ課稅ヲ全廢スルニ至ラズ、寧ロ以テ運輸機關ノ發達ヲ急速ナラシメンコトヲ所期セル所以、偶々近ク大阪市一於テ其適例ヲ見ルモノ、亦以テ其改良方針ノ積極的ナルヲ察スルニ餘リアラン。

然ラバ則チ我東京市ノ如キ、今日航路改良ノ事業未ダ寸毫モ其緒ニ就カザルモノ、若シ徒ラニ退嬰萎縮ヲ事トシテ之ニ甘ンセントセバ即チ止ム。然ラズンバ宜敷其將來ノ長計ヲ講ズルニ方リ、又此點ニ向ツテ研究スル處ナクシテ可ナランヤ。若シ夫レ或ハ卒然トシテ是ニ對シ、直ニ此種ノ課稅ヲ以テ、物價ノ騰貴ヲ來シ、實業ノ發達ヲ阻害スル虞アリト爲サンカ、之レ航路ノ不備缺點ニ伴フ幾多ノ不便ト危險トヲ知ラズ、其實際上ノ損害更ニ巨大ナルモノアルヲ察セザルニ由ル。況ンヤ其賦課ハ寔ニ少額ニシテ、敢テ實業ヲ阻害シ、若クハ物價ニ影響スベキ程ノモノニ非ザルノミカ、又貨物ト共ニ、自然廣大ナル範圍ニ轉課セラレテ、直接納稅者ノ負擔スル所タラザルオヤ。故ニ縱令、此種ノ課稅ガ直ニ幾倍ノ利益トナリテ再ビ負擔者ノ所得ニ歸スベキ所以、又ハ之ガ爲メニ生ズル一般經濟上ノ積極的利益ノ如キハ、或ハ之ヲ解シ得ズトセンモ、只現時水運上ノ損害ヲ除却スルガ爲メニ避ク可ラザル工費負擔ノ方法トシテ、先ヅ其最モ適當ナル一稅目タルヲ會得シ得ベケンナリ。

試ニ東京河内及品川一年ノ入港船舶數ヲ擧グレバ、左ノ如シ。



(一)東京河内入津船舶表

年	汽船		帆船及日本形船		合計	
	艘數	噸數	艘數	噸數	艘數	噸數
三十三年	三、七八〇	二三五、一三九	六、五二一	三三〇、四四三	一〇、三〇一	五六五、五八二
三十四年	四、〇七九	二四七、七九三	六、七二〇	三三五、二九五	一〇、七九九	五八三、〇八八
三十五年	四、四六六	二七五、二八三	六、八九四	三三三、〇七三	一一、三六〇	六〇八、三五六
以上平均 一年ニ付	四、一〇八	二五二、七三八	六、七一二	三三二、九三七	一〇、八二〇	五八五、六七五

(二)品川入津船舶表

年	汽船		帆船及日本形船		合計	
	艘數	噸數	艘數	噸數	艘數	噸數
三十三年	二五四	一二七、五四一	一四四	二七、七一四	三九八	一五五、二五五
三十四年	二六〇	一二四、七四二	一四八	二七、二三六	四〇八	一五一、九七八
三十五年	二八七	一四四、六八一	一〇二	一九、七三七	三八九	一六四、四一八
以上平均 一年ニ付	二六七	一三二、三二一	一三一	二四、八九六	三九八	二五七、二一七

即チ平均一年ノ入港船舶ハ、右兩者ヲ合シテ、艘數一萬壹千貳百餘艘、噸數約

七十四萬三千噸ナリ。故ニ若シ此噸數ニ對シ、假リニ大阪府ノ入津料率ヲ適用セバ一年ノ徵收額八萬圓ニ達スベシ。

但シ予ハ今本問題ニ就テ之ヲ評論スルノ意ナシ、只カ、ル新課税ノ實施ニ能ク今次ノ如キ改良工事決行ノ機會ニ參スルヲ利トスルヲ以テ、乃チ茲ニ改良工事計畫ノ提起ニ會シテ、特ニ本問題ノ多少研究スベキ價値アルコトヲ述、進ンデハ隅田川ノ積極的經營ニ對シ、將來ノ方針ヲ確定スルニ資セント欲スルノミ。

第四 隅田川浚筋ノ水深維持ニ就テ  
隅田川浚筋埋没ノ程度如何ハ今回ノ測量ノ結果ヲ俟ツニ非ンバ、未ダ之ヲ明知シ難シト雖ドモ、灣頭地勢、該河ノ性質、附近諸川ノ位置、及ビ潮流潮位等ノ關係ハ、略々以テ其水深維持ノ困難ヲ示スニ足り、從テ其埋没作用ハ、今後ト雖ドモ到底之ヲ避クルヲ得ザラン。故ニ縱令今日若干ノ浚渫工事ヲ施スモ、爾後再ビ之ヲ抛擲シテ顧ミザルニ於テハ、又自ラ現時ノ不便ヲ再現シ、其結果、恰モ曩ニ本市ガ施行シタル浚渫工事ノ現在ニ示セル狀況ト撰ヅ所ナキニ至ランヲ必ス。然リト雖ドモ亦今日全然此作用ヲ禁遏センガ爲メニ、特



ニ河筋ニ多大ノ工事ヲ附加スルガ如キハ、經濟上甚ダ不得策ナリト認ム。故  
 ニ改良工事施行後ハ、寧ロ浚渫船一艘ヲ常備シテ年々河底ノ沈澱物ヲ除去  
 シ、以テ其水深維持ニ充ツルノ要アルベシ。

〔参考〕時事新報 明治卅八年七月八日。

隅田河口の入津帆船、前水上市署長野田耕夫氏が、同署在勤中、親しく調査せる所に依れば、昨年三  
 月より本年二月に至る満一箇年間に、隅田河口品川沖に入津せる帆船數  
 は、總計三千六百六十四艘にして、内西洋形三千零三十艘、此搭載貨物三十  
 一萬三千百八十八噸餘、日本形六百三十四艘、此貨物十七萬七千零四十五  
 石となり、其仕出地は二百九十二港を數へ、之を國別すれば左の如くなる  
 が、船は概して百噸未満の小形なれども、悠々貨物を満載して大洋を縦横  
 し、中には米領ウエーク島より鮫鱈、獨逸領西カロリンパローより貝殻、同  
 サイパン島より椰子實、マシカス及南鳥島より鳥糞を搭載し來るもあり  
 たりといふ。

仕出地

入津船數

搭載貨物

武藏	五五	石灰、セメント、支那米、酒、石炭、コークス
相模	五八〇	木炭、石、薪、竹、米、材木、鹽
伊豆	一二〇七	薪、石、木炭
駿河	一二八	材木、石、磨砂、薪、木炭、米、茶、干鯛
遠江	二六〇	杉皮、石、材木、疊表、石灰、セメント
三河	一五	セメント、材木、石灰、陶器、土管
尾張	二三三	土管、磨砂、米、瓦、鑛石、陶器、石灰、材木、セメント、種 土、肥料
伊勢	五	セメント、材木、磨砂
志摩	一六	セメント、材木、板、木炭
紀伊	三二四	材木、木炭、石灰、鑛石、板、砥石
和泉	二	硫酸
攝津	四一	コークス、硫酸、石灰、石材、雜貨
淡路	三三	鹽
播磨	一一〇	鹽
備前	四三	石材、鹽、瓦、鑛石



備中	二	石材
備後	一六	鹽、石材
安藝	三六	鹽、石材
周防	四八	鹽
長門	七	セメント、鹽、材木
越前	三二	板、米
越中	一	米
陸中	二五	煉瓦、銑鐵、石材、材木
陸前	四二	薪、石材、木炭
磐城	一七	石炭、材木
常陸	一三	板、材木
上總	二八	魚類、鐵材
安房	一三	木炭、磨砂、石、薪、海草、白土、材木
阿波	六三	鹽、材木
讚岐	四三	石材、鹽

〔附記一〕中水先區

逓信省令第四十五號

明治三十二年七月逓信省令第三十三號水先法施行細則中、左ノ通改正ス。  
明治三十七年六月十八日

帝都時代ノ港灣

伊豫	三六	石材、石炭、硫黃、鹽
土佐	二七	木炭、材木、石材、礦石、石灰
筑前	九	石炭、セメント
肥前	四	石材、石炭
肥後	六	セメント、石炭
薩摩	一	材木
日向	二一	材木
豊前	一	石炭
北海道	三九	材木、鱒、鮭、硫黃、魚油、昆布、獺虎、臘、臍
南洋	一五	鮫鱈、鳥糞、貝殼、椰子實
不詳	一五	石材、材木、鹽、石灰、木炭



第十三條 水先區ハ左ノ六種トス。

一、東京灣水先區 安房國洲ノ埼ヨリ相模國城ヶ島西端ヲ經テ諸磯  
埼ニ引キタル線ヲ以テ境界トス。略。中

第一號表中東京灣ノ欄帆船水先案内料四五ヲ五〇ニ改メ、内海ノ欄ヲ左  
ノ通改ム。略。下

法令全書

〔附記、二〕 游泳場取締

附記、二  
游泳場  
取締

警視廳令第十八號

游泳場取締規則左ノ通定ム。本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス。

明治三十七年七月六日

警視總監安立綱之

第一章 通 則

第一條 本則ニ於テ游泳場ト稱スルハ、河海ニ區域ヲ定メ、公衆ヲシテ游  
泳ヲ爲サシムル場所ヲ謂フ。

第二條 游泳場ヲ設ケムトスル者ハ、住所氏名生年月日團體ニ在リテハ、其  
名稱、事務所、所在地

代表者ノ氏名ヲ添附スシ、定款ヲ記シ、左ノ事項ヲ具シ、所轄水上警察署ニ願出許  
可ヲ受クベシ。

第一號第二號第四號第五號ノ事項ヲ變更セムトスルトキ、亦同ジ。

一、游泳場ノ位置及區域竝圖面。

二、更衣所、休憩所ノ位置、及構造仕様書、竝圖面。

三、更衣所休憩所ニシテ、官有地又ハ公有地ニ係ルトキハ、其ノ使用許可  
書ノ寫、他人ノ所有地ナルトキハ其ノ承諾書。

四、開場期間及開場時限。

五、游泳料。

第三條 更衣所休憩所ノ工事落成シタルトキハ、所轄警察署ニ届出、使用  
ノ認可ヲ受クベシ。

第四條 游泳場ニハ、游泳者ノ員數ニ對シ、適當員數ノ游泳教師ヲ置クベ  
シ。

第五條 教師ヲ雇入レムトスルトキハ、其ノ住所、氏名、生年月日、履歷書ヲ  
添へ、所轄水上警察署ニ届出、認可ヲ受クベシ。場主ノ自ラ教師タラムトス



ルトキ、亦同ジ。

第六條 游泳場ニハ、救命具及救助船ヲ備付ケ、其ノ種類及個數ハ、所轄水上警察署ノ指定ニ從フベシ。

游泳中ハ、赤色ノ帽子ヲ冠載シタル教師ヲシテ救助船ニ乗込マシメ、游泳者ヲ監視セシムベシ。

第七條 游泳場ヲ讓受ケ又ハ借タル者ハ、住所氏名生年月日ヲ記シ、讓渡人貸渡ノ連署ヲ以テ、三日以内ニ所轄水上警察署ニ届出ベシ。

第八條 左ノ場合ニ於テハ、三日以内ニ所轄水上警察署ニ届出ベシ。但シ第四號ノ場合ハ、戸主又ハ家族ヨリ其ノ手續ヲ爲スベシ。

一、場主ノ住所氏名團體ニ在リテハ、其ノ名稱、事務所所在地、代表者ノ氏名、定款若ハ規則ヲ變更シタルトキ。

二、法定代理人、保證人、夫又ハ其ノ氏名ヲ變更シタルトキ。

三、休場又ハ廢場シタルトキ。

四、場主死亡シ、又ハ所在不明ナルトキ。

五、教師ヲ解雇シタルトキ。

第九條 未成年者禁治産者ノ爲ス願届書ニハ、法定代理人ノ連署、準禁治産者、妻ノ爲ス第二條ノ願書、及第七條ノ届書ニハ、保證人又ハ夫ノ連署ヲ要ス。

第十條 游泳者ニシテ死傷シ、又ハ行衛不明トナリタルトキハ、相當ノ處置ヲナシ、速ニ所轄水上警察官署、又ハ最寄ノ巡查派出所、若ハ巡行巡查ニ届出ベシ。

第十一條 游泳場ハ時々掃除ヲ爲シ、蘆芥其ノ他ノ汚穢物ヲ停滯セシムベカラズ。

第十二條 游泳料以外ニ金錢物品ヲ請求スベカラズ。

第十三條 左ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ許可ヲ取消スコトアルベシ。

一、正當ノ事由ナクシテ許可ノ日ヨリ三十日以内ニ開場セズ。又ハ三十日以上休場シタルトキ。

二、本則ニ違背シ又ハ公安若クハ風俗ヲ害スルノ虞アリト認めタルトキ。

三、法定代理人又ハ夫ノ許可若ハ保佐人ノ同意ヲ取消サレタルトキ。

第十四條 所轄水上警察官署ニ於テ、危険豫防又ハ風紀保持若ハ衛生ノ



爲必要アリト認メタルトキハ、游泳場區域ノ變更又ハ更衣所、休憩所ノ改造修繕若ハ游泳ノ停止ヲ命ズルコトアルベシ。

第二章 游泳場ノ區域

第十五條 游泳時限内ハ、赤色ノ標旗又ハ浮器ヲ以テ游泳場ノ區域ヲ表示スベシ。

第十六條 未熟練者ノ游泳場ハ、特ニ區劃ヲ設ケ、其ノ水ノ深サハ胸部ヲ限度トスベシ。

第三章 游泳ノ制限

第十七條 游泳中左ノ行爲ヲ爲シ又ハ爲サシムベカラズ。

一、舟筏ノ航行ヲ妨害スルコト。

二、區域外ニ出テ游泳ヲナスコト。

三、風俗ヲ害スル行爲ヲナスコト。

四、他人ノ妨害トナルベキ行爲ヲナスコト。

第十八條 遠泳ヲナサムトスルトキハ、其ノ線路、日時及人員ヲ記シ、所轄水上警察官署ニ届出認可ヲ受クベシ。

第十九條 前條ノ場合ニハ游泳者ノ人員ニ應ジ教師及救助船ヲ附スベシ。

第二十條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ、游泳ヲ爲シ又ハ爲サシムベカラズ。

一、泥酔者。

二、精神病者。

三、附添人ナキ八才未滿ノ幼者、老衰者、病後衰弱者。

四、猿股禪若ハ浴衣ヲ着用セザル者。

第四章 更衣所、休憩所

第二十一條 更衣所、休憩所ハ外部ヨリ見透シ得ザル装置ヲナスベシ。

第二十二條 更衣所、休憩所ニハ、游泳料、游泳時限及第十七條第二十條ノ各條文ヲ揭示スベシ。

第二十三條 更衣所ニハ看守人ヲ置キ衣類、携帶品等ヲ管理セシメ、遺留品等アルトキハ、賭易キ場所ニ揭示スベシ。

第五章 罰則



第二十四條 本則ニ違背シタル者ハ拘留又ハ科料ニ處ス。  
 第二十五條 十二年未滿ノ者又ハ禁治産者ニシテ本則ニ違背シタルト  
 キハ、前條ノ科料ヲ其ノ法定代理人ニ科スルコトアルベシ。  
 第二十六條 法人ノ業務ニ關シ法人ノ代表者其他ノ從業者又ハ雇人ニ  
 シテ本則ニ違背シタルトキハ、第二十四條ノ科料ヲ其ノ法人ニ科ス。

〔附記、三〕 燈竿移轉

遞信省告示第四百六十二號

東京海灣浦賀水道第三海堡燈竿（陸軍省所轄）ハ、今般左記之通移轉ノ旨、陸軍省  
 ヨリ報告アリタリ。

明治三十七年十一月五日

遞信大臣大浦兼武

一、位置 従前ノ位置ヨリ磁針方位南四十六分東距離百二十五間一尺ノ  
 所ニ移轉ス。

一、自水面至燈火高サ 六丈六尺。

一、燈竿附近船舶航行區域 本燈竿ヨリ北及西方ハ三鏈、東及南方ハ二鏈  
 以外ノ所ヲ通航スヘシ。

一、前各項ノ外ハ、總テ従前ノ通り。

法令全書

廿八年○明治〇紀元  
二五六年二月八日東京灣築港調査常設委員隅田川口

改良工事設計ヲ討議シ、更ニ精査スルニ決ス。○東京灣築港調査  
常設委員會日記。

隅田川口改良工事設計討議 是ヨリ先東京市技手小川織三隅田川口改良意

見書ヲ出シタルコトハ既ニ之ヲ記ス。明治卅八年二月八日ノ東京灣築港調査  
 常設委員會、直木技師提出ノ隅田川口改良工事設計ヲ討議ス、引續キ之ヲ精議  
 スルニ決ス。

明治三十八年二月八日府參事會室ニテ開會。

委員長 大石正巳君 委員(二番)銀林綱男君  
 出席者委 員(四番)伊東與三次郎君 同 員(五番)木村莊平君  
 同 (七番)杉原榮三郎君

午後二時開會。大石委員長以下各委員著席シ、直木技師提出「隅田川口改良工  
 事設計概要」ヲ議題トス。

直木技師 隅田川口改良工事設計ノ内容ヲ説明ス。

大石委員長 直木技師ノ設計ニ係ル隅田川口改良工事ハ、本市ノ事業トシ

帝都時代ノ港灣



テ最モ必要ナルノミナラズ、其工費豫算亦多額ヲ要セザルヲ以テ、東京築港事業ノ著手容易ナラザル今日、先ヅ現在ノ隅田川口ヲ改良シ、以テ水運ニ關スル一部ノ便利ヲ期スルハ極メテ適切ナルベシトノ旨ヲ述ブ。

二番(銀林委員) 右改良工事ヨリ生ズル埋立地ノ坪數及市有地トナスベキ坪數及賣却地ノ單價等ニ關スル質問アリ。

大石委員長 設計ノ要點ニ就テ巨細ノ質問アリ。

七番(杉原委員) 工費豫算ニ關スル質問アリ。又現在隅田川ニ出入スル船舶ノ種類、竝ニ其噸數、及右改良工事施行後ノ出入貨物噸數見込額ニ就テ質問セリ。

二番(銀林委員) 改良工事完成後ノ維持費額ニ關スル質問アリ。

直木技師及小川技師一々之ニ答フ。

直木技師 隅田川口現在ノ不利不便ノ實況ニ關シ、市内運漕業者ノ主ナル人々ヲ集メ其意見ヲ聽取アリ度旨ヲ要求ス。

一同異議ナク其手續キヲ運バンコトヲ定ム。

七番(杉原委員) 右ノ聽取ニ關シテ注意スベキ事項ヲ述ブ。

大石委員長 本改良工事設計ニ對シ、委員會ハ爾今數回會合シテ充分調査ヲ遂ゲ、市參事會及市會ニ提出シテ以テ事業ノ著手ヲ促ガスベキヲ望ム旨ヲ述ブ。

一同贊成。

午後三時閉會。

明治三十八年三月三日府參事會室ニテ開會。

委員長	大石正巳君	委員(二番)	銀林綱男君
出席者	委員(四番)	伊東與三郎君	同
	委員(五番)	木村莊平君	
	同	(七番)	杉原榮三郎君

尾崎市長 渡邊助役 河田助役 直木土木課長  
午前十一時三十分開會。大石委員長以下各委員著席、三十八年度築港調査費豫算ヲ議題トス。

大石委員長 築港調査ノ繼續ハ必要ナリ、而シテ其調査費ハ從來通臨時費トシテ置キタシ、之ニ關スル本會ノ意見竝ニ希望ヲ市參事會ニ臨ミテ陳述シ、其參考ニ供スルヲ至當ト思考ス。

元來本市築港ノ如キ大事業ノ調査ハ、更ニ尙充分ノ調査ヲナスヲ要シ、又ナ



シテ可ナリ。

二番(銀林委員) 委員長ノ説ニ賛成ス。

大石委員長 來年度豫算ニ關シ市長ノ意見如何。

尾崎市長 來年度豫算表ニアル通り、調査繼續ハ最モ必要ナリト認メ居レ

リ。

大石委員長 築港ト隅田川トハ相關聯シテ居ルモノ故、隅田川口改良ニ關

スル調査ハ築港ノ一部トシテ調査スベキモノト思考ス。而シテ前委員會ニ

テ決定セシ現在隅田川ノ不便ニ對スル市内運漕業者ノ意見聽取ノ如キハ

速ニナシ、進ンデハ隅田川口改良ニ關シ具體的ニ調査書ヲ作ル必要アリト

認ム。

二番(銀林委員) 築港ト隅田川トノ關聯セルハ委員長ノ述ベラレタル意見

ニテ明カナリ。而シテ余ハ隅田川口改良工事ニ著手スル運ヲナサンコトヲ

望ム。

大石委員長 隅田川口改良ニ就テハ、本年末頃ニハ、砲臺以外ノ航路浚渫工

事ニ著手スル位ノ見込ニテ調査センコトヲ望ム。

附記、一  
内務省官  
制追加

附記、二  
築港建議

更ニ本日委員會ニ於ケル議決ノ要項、左ノ如シ。

一、明治三十八年度築港調査費豫算ハ是認スルコト。

一、隅田川口ノ改良ニ關シテハ、築港ノ一部ト認メ調査スルコト。

午後零時三十分閉會。

東京灣築港調査常設委員會日記

〔附記、一〕 内務省官制追加

法令全書ニ據レバ明治卅八年三月廿八日勅令第八十七號ヲ以テ内務省官

制第七條ニ左ノ一號ヲ加フ。

六、河川、道路、港灣及砂防ニ係ル事業ノ調査ニ關スル事項。

〔附記、二〕 築港建議

建議書

東京築港計畫ニ關聯シ、芝區金杉ヨリ本芝田町高輪品川ニ至ル幅員參拾  
間延長貳千八百間運河開設建議ニ付、其費用額。

種目	摘要	數量	價單	金額	員
堀鑿		八〇、〇〇〇坪	一、五〇〇	一、二〇、〇〇〇・〇〇〇	



護岸	埋立地土留工	橋(梁(鐵))	同(木)	土地買收	家屋移轉料	合計
四、一〇〇〇〇 <sub>明</sub>	一、三〇〇〇 <sub>明</sub>	二ヶ所	六ヶ所	九、〇〇〇 <sub>坪</sub>	七、〇〇〇 <sub>坪</sub>	
一〇〇・〇〇〇	五〇・〇〇〇	一二〇、〇〇〇・〇〇〇	一〇、〇〇〇・〇〇〇	一〇・〇〇〇	二五・〇〇〇	
四一〇、〇〇〇・〇〇〇	六五、〇〇〇・〇〇〇	二四〇、〇〇〇・〇〇〇	六〇、〇〇〇・〇〇〇	九〇、〇〇〇・〇〇〇	一七五、〇〇〇・〇〇〇	一、二六〇、〇〇〇・〇〇〇

運河堀鑿地本港内ニ六萬坪ヲ減シ、埋立九萬五千坪ヲ増、差引參萬五千坪増埋立ス。

理由

東京築港芝金杉本芝高輪品川ニ至ル海面埋立地ニ運河開設ノ利害、左ニ、  
 第一、埋立地芝浦ヨリ品川ニ至ル海面南北凡貳千八百間東西四百間乃至貳百間總坪凡六拾萬坪埋立地トナルルハ、芝金杉高輪品川鮫州ニ至

ル漁業者ハ轉業スルノ外ナシ。其人戸壹千戸ト見積リ、壹戸壹日金壹圓ヲ得ルモノトスレバ、其損害壹ヶ年金參拾六萬圓トナル。之レニ俱フ海産物ノ減却スルモノナリ。

運河開設スレバ漁業者ハ營業ノ繼續スルハ勿論、以前ニ換リ安全ヲ保チ海産物モ亦異動ナク其利益大ナリトス。

第二、海面埋立ノ上、鐵道外面ノ地ハ、鐵道線路ニ遮ラレ、其地況ハ迂回シ不便ノ地トナルガ故ニ、地價壹坪當リ金拾圓内外ヲ相當ナリトス。而シテ芝田町高輪品川ニ至テハ水路ノ便ナク、地況ハ一變シテ地價ニ貳圓内外ノ低落アルハ當然ナリトス。

運河開設スレバ河岸地ハ地價貳拾圓以上トナルハ辨明ヲ要セス。之レニ準ジ田町高輪品川等ノ地所ハ貳割以上ノ高價ヲ見ルヲ疑ナシ。

第三、埋立ニ付テハ、隅田川多摩川及ビ各沿岸地ヨリ荷物運送ノ小舟ハ、築港埋立ノ爲メニ羽田沖ノ濠ハ東北ニ轉ジ、築港運河外羽田沖ニハ大船ノ滯泊場トナリ、小船通路ハ沖六千間以外ヲ行通スルニ至ル。然ルルハ風波ノ難以前ニ倍シ、物品又ハ人命等ノ損害尠ナカラズ。



運河開設ノ上ハ、風波ノ難ヲ避ケ船舶行通ノ便ヲ開ク。此ノ如キ利益ノ大ナルコト之ニ過ギズ。

第四、埋立ニ付テハ其總坪數六拾萬坪ナリ。此豫定價額ヲ見ルニ、築港海岸壹坪當リ六拾圓ト見積リ、高輪品川鐵道線外ノ地ハ海岸ヘハ六百間乃至八百間ノ遠キニ至リ不便ノ地トナルヲ以テ、壹坪當リ拾圓ト見積リ、海岸地ト合スレバ七拾圓トナル。之レヲ折半スレバ平均參拾五圓トナル。

運河開設ノ上ハ、鐵道線路外河岸地々價壹坪當リ貳拾圓ト見積リ、海岸地六拾圓ト合シ八拾圓トナル。之ヲ折半シ其半額金四拾圓トナル。即チ前項ト増金スルコト壹坪當リ金五圓、之レヲ六拾萬坪乘ズレバ其金參百萬圓ナリ。

第五、埋立ニ付テハ其坪六拾萬坪南北貳千四百間(四十丁)東西三百六拾間(六丁)排水工事大下水暗渠等ハ一大困難ヲ極メ、之レニ要スル費額ハ凡六拾萬圓ト見積ル。

運河開設ノ上ハ、排水工事ハ小下水ヲ以テシ、其費額ノ内四拾萬圓ヲ減ズ。而シテ運河開設ノ爲メニ三萬五千坪ハ埋立地ニ増加ス。此地價壹坪當リ金拾圓ト見積リ其金三拾五萬圓ナリ。

第六、埋立地ト運河開設トノ利害ヲ見ルニ、運河開設費ハ金百拾六萬圓、之レガ爲メニ生ズル金高ハ埋立地六拾萬坪ニ對スル前四項參百萬圓、及第五項排水工事減額金四拾萬圓、竝ニ埋立増坪三萬五千坪地價金參拾五萬圓、三口合金三百七拾五萬圓、此内先キノ百拾六萬圓ヲ差引トキハ金貳百五拾九萬圓ノ利益トナル。其他各項記載ノ利益算スルニ違アラズ。

右ハ調査ノ結果、前項理由書ノ通りニ御座候間、築港計畫ニ關聯シ、本議案ニ加ヘ確定アラシムコトヲ切望シ、此段建議ス。

明治三十八年五月廿六日

東京築港調査委員長  
大石正巳殿

東京築港調査委員  
木村莊平

〔附記三〕 川崎浮標交換

逓信省告示第三百八十七號

東京灣羽根田洲ノ南端川崎浮標ハ、從來水面上高サ一丈ノ處、今般該高サ



一丈五尺ノ浮標ト交換セリ。

但、位置及著色構造ハ従前ノ通。

明治三十八年六月三日

逓信大臣大浦兼武

法令全書

附記、四  
量水標返  
戻

〔附記、四〕量水標返戻

明治卅一年來土木監督局ニ貸與シ在リタル水位觀測用量水標五箇所ヲ返戻シ來ル。明治卅八年六月廿七日ノ東京灣築港調査常設委員會承ケテ觀測ヲ繼續スルニ決ス。東京灣築港調査常設委員會日記ニ、

明治三十八年五月二十六日府參事會室ニテ開會。

委員長 大石正巳君 委員(三番)大岡育造君  
出席者 委員(四番)伊東與三郎君 同 委員(五番)木村莊平君  
同(六番)和田屯君 同 同(七番)杉原榮三郎君  
渡邊助役 河田助役 直木土木課長

午前十一時二十分開會。大石委員長以下各委員著席、明治三十八年度築港調査費追加豫算ヲ議題トス。

小川技手 靈巖島羽田燈臺兩驗潮場及ビ鐘ヶ淵小臺戸田橋三量水標ハ、

元築港調査上必要アリトシテ去明治二十三年頃設置サレタルモノニシテ、設置後明治三十一年四月迄ハ東京府ニ於テ水位ノ觀測ヲナシ居タル處、同年四月ヨリハ第一區土木監督署ニ於テ觀測スルコト、ナリ、乃チ各量水標ニ於ケル番人詰所量水標竝其附屬品等ヲ東京府ヨリ第一區土木監督署ニ貸與セリ。然ルニ右番人詰所量水標竝其附屬品等ハ、同年東京府ヨリ本市ニ引繼ヲ受ケタル處ニシテ、現在ニ於テハ本市ノ所有ニ屬スルモノナリ。然ル所第一區土木監督署ニ於テハ、本年三月限り土木監督署廢止トナリタルト共ニ、前記五ヶ所量水事業ヲ廢止シタルヲ以テ、過般番人詰所、量水標竝其附屬品ヲ東京府ヲ經テ本市ニ返戻シ來リタリ。依テ前記五ヶ所ノ量水ハ、本市ニ於テ引繼施行スルモノトシ、本追加豫算ヲ編成セリ。

三番(大岡委員) 是迄水位觀測繼續シ來リタル其成績ニ就キ説明ヲ求ム。直木土木課長 鐘ヶ淵靈巖島羽田ノ三ヶ所ハ、東京市ノ事業トシテ觀測ヲ繼續スルコト必要ナリ。而シテ小臺戸田橋ノ二ヶ所ハ、一時本市ニ於テ水位觀測ヲ繼續シ、追テ東京府ニ交渉シテ引渡ヲナシタキ考ナリ。尙是迄



觀シ來レル成績ニ就テハ、從來其必要ノ都度第一區土木監督署ニ就キ承合シ居レリ。

六番(和田委員) 大岡委員ノ質問シタル如ク從來施行シタル水位觀測ノ成績ヲ充分取調ベシコトヲ望ム。

大石委員長 水位觀測ノ成績ハ、土木監督署ヨリ關係書類ヲ借受ケ至急其取調ヲナスコト、ナシ、尙靈巖島羽田兩驗潮場ハ本市築港調査上甚ダ必要ナルガ故ニ、向後引續キ本市ニ於テ水位ノ觀測ヲナスコト無論必要ナリト信ズレドモ、鐘ヶ淵外二ヶ所ハ東京府ニモ其必要アルコト故、理事者ヨリ一應東京府ニ交渉アリタシ。

三番(大岡委員) 昨今隅田川ニ大分新埋立地ヲ生ジタルガ如シ。是等ハ河流ニ及ボス影響大ナルコト、思考スルガ故ニ、此ノ如キ事業ヲ起サントスル場合ニハ、只徒ラニ單純ナル考ヲ以テ決定スルコトナク、技師ニ於テ豫メ充分其利害ヲ研究調査セシコトヲ望ム。

大石委員長 前陳ノ各量水標ニ於ケル水位觀測ノ成績ヲ取調ベ、且ツ東京府トノ交渉ヲ遂ゲタル後、更ニ本會ヲ開キテ本日提出ノ追加豫算ヲ再

議ニ附スルコト、セン。

各員異議ナク、正午十二時閉會。

明治三十八年六月二十七日府參事會室ニテ開會。

- 委員長 江間俊一君 委員(一番)大貫傳兵衛君
- 出席者 委員(二番)銀林綱男君 同 (三番)肥塚龍君
- 同 (四番)松村祥一郎君 同 (五番)青木庄太郎君
- 同 (六番)和田屯君

直木土木課長

午前九時四十分開會。江間委員長以下各委員著席、前回委員會ニテ未決ノ明治三十八年度築港調査費追加豫算ヲ議題トス。

江間委員長 是迄調査シ來レル築港調査ノ經過ニ就キ説明ヲ求ム。

直木土木課長 築港設計及貨物ニ關スル調査書類ハ別冊調査書類ニア  
ル通りニテ、設計ハ工費參千四百萬圓ノ案ト四千壹百萬圓案ノ内、曩ニ築  
港調査委員會ノ採擇シタルハ、後者即チ工事ノ全部ヲ完成スルモノトシ  
テ、之ニ要スル工費ヲ四千百萬圓トシタルガ、其後試ニ工費ヲ可及的減縮  
シテ貳千參百五拾萬圓案ノ計畫ヲ立テタルモ、之ヲ未ダ委員會ニ於テ採



否等ニ關シ何等決定シタル處アルナシ。尤モ參千四百萬圓ト云ヒ、貳千參百五十拾萬圓ト云フモ、結局四千壹百萬圓案ノ縮少計畫故、漸次擴張工事ヲ施ストキハ四千壹百萬圓案ト同一ニナルベキモノナリ。尙ホ地質調査ノ結果多少最初ノ設計ニ變更ヲ來シタル旨ヲ述ブ。各員交々築港設計上及貨物出入數等ニ就キ質問アリ。直木土木課長、小川技手夫々説明ス。六番(和田委員) 築港調査ニ就テハ、築港豫定地海面ノ視察ヲ必要ト認ムルニヨリ、各委員ノ實地視察如何。五番(青木委員) 今ヤ吾築港ノ如キ之ニ著手スベキヤ好時機到來シタリト思考ス。故ニ此際積極的ニ調査ヲ進メ、速ニ工事著手ノ運ニ至ランコトヲ望ム。

江間委員長 築港計畫ニ就テ埋立地ノ位置ハ可及的經濟上有利ナル場所ニ施シ、其賣却代ニヨリテ築港資金回收ノ途ヲ容易ナラシメタシ。

三番(肥塚委員) 委員長ノ説ニ贊成。

小川技手 三十八年度築港調査費追加豫算ヲ提出シタルハ、本年三月迄

第一區土木監督署ニ於テ觀測シタル量水標五ヶ所ハ、元本市ガ築港調査上必要ナリトノ理由ニヨリ東京府ニ於テ設置シタルモノニシテ、其後東京府ヨリ引繼ヲ受ケ、目下本市ノ所有ニ屬スルモノナルガ、三十一年以來土木監督署ニ貸與シアリシニ、同署ガ本年三月限り廢止トナリタルト同時ニ、量水標水位觀測モ廢止シ、量水器其他附屬物件一切東京府ヲ經テ返戻シ來リタルニ依リ、本市築港調査上必要ニ付、之ガ水位觀測ヲ繼續ナスモノトシテ、本豫算ヲ提出セリ。而シテ又前回ノ委員會ノ御決議ノ趣旨ニ基キ、東京府ニ交渉ヲ遂ゲタル其往復書類ハ、別冊ニ綴込ミアリ。

三番(肥塚委員) 量水標觀測費ノ費目ハ、從來ノ築港調査費ニ無之哉。

小川技手 從來引繼キ觀測シ來リタル量水標三ヶ所アリ。其費用ハ本年度築港調査費ニ編入シアルモ、前陳ノ量水標五ヶ所ハ、豫算編成當時ニ何等ノ事モナク、其後ニ至リ土木監督署ヨリ返戻アリタルニ依リ、今回追加豫算トシテ茲ニ提出シタルモノナリ。

六番(和田委員) 本案ハ理事者ノ説明ニヨレバ、素ト築港調査上必要ニテ設置シタルモノナルニ、尙目下モ必要ヲ認ムル以上ハ原案ノ通過ヲ望ム。



二番(銀林委員) 隅田川口改良ニ就テハ築港ト相關聯シ居ルコトニモアリ、右五ヶ所量水標水位觀測繼續ハ必要ト認ムルニ依リ原案ニ贊成。

江間委員長 然ラバ量水標水位觀測繼續ハ必要ト認ムルヲ以テ、追加豫算ハ原案ノ通り決定セントス。

各委員異議ナシ。

追加豫算可決。

江間委員長 直木技師ガ會テ歐米各國ヲ巡視調査セシトキノ各國港灣ニ於ケル築港費支出方法ノ説明ヲ求ム。

直木土木課長 歐米ニ於テ現今用キ居レル築港費支辨方法ヲ述ブ。

江間委員長 向後ハ積極的ニ築港調査ヲナシ、設計書中ノ埋立地及倉庫等ニ關スル件ハ、一層精確ニシテ經濟上有利ナル方法ヲ調査考究セントス。

又築港豫定地海面視察ハ、最モ必要ナル事故、委員一同來ル七月一日ヲ以テ出張スルコト、セン。

各委員異議ナシ。

築港豫定地海面視察

江間委員長 然ラバ時間及乗船場所ハ、潮汐ニ關係アル事故、理事者ニ於テ取調確定ノ上、各委員へ通知スルコト、セン。

本日元築港調査委員木村莊平提出「運河開設ニ付建議書」ヲ委員ノ一覽ニ供ス。

午後零時三十分閉會。

築港豫定地海面視察

明治卅八年六月廿七日ニ於ケル東京灣築港調査常設委員會ノ議決ニ基キ、七月六日江間委員長以下、東京港築造豫定地芝浦ヲ視察ス、東京灣築港調査常設委員會日記ニ、

明治三十八年七月六日築港豫定地海面視察ノ爲、出張セシ委員左ノ如シ。

- 委員長 江間 俊一君
- 委員 大貫傳兵衛君
- 委員 銀林 綱男君
- 委員 松村祥一郎君
- 同 青木庄太郎君
- 同 和田 屯君

以上。

八月十日

○明治卅八年(紀元二五六五年) 帝都時代ノ港灣

東京商業會議所東京府知事及東京市長



ニ書ヲ呈シテ、隅田川口浚渫改修ヲ建議ス。

○隅田川口埋没調査材料書類。東京灣築港調査常設

委員會  
日記。

隅田川口浚渫改修建議 東京商業會議所ハ、隅田河口埋没實況調査委員會ヲ設ケテ調査ノ結果、明治卅八年八月十日之ガ浚渫改修ヲ東京府知事及東京市長ニ建議ス。即チ隅田川口埋没調査材料書類ニ、

隅田河口埋没實況調査委員會經過報告

明治三十八年七月十日午後三時第一回委員會ヲ開キ、委員長ヲ選舉ス。

同年七月十四日午後三時第二回委員會ヲ開キ、東京市當局者及ビ關係當業者ヲ招キ、參考ノ爲メ市ノ方針及ビ實際ノ狀況ヲ聞キタリ。

同年七月二十一日午前十一時第三回委員會ヲ開キ、市當局者及ビ關係當業者ト共ニ實地踏査ヲ爲シタリ。

同年八月四日午後三時第四回委員會ヲ開キ、建議案及報告書ヲ議定シ、總會ニ提出スルコト、爲シタリ。

右報告候也。

明治三十八年八月十日

委員長大橋新太郎

(議案)

建議

隅田川口ハ東京市ノ咽喉ニシテ、水運ニ依リ市内ニ出入スル貨物ノ大部分ハ、總テ此河口ヲ利用セザルモノナシ。隨テ其設備如何ハ輸送ノ便否ニ至大ノ關係ヲ有シ、市内一般經濟ニ少ナカザル影響ヲ及ボスヤ論ヲ俟タズ。然ルニ同河口ハ、明治二十年ヨリ同二十八年ニ至ル八年間東京府及ビ東京市ガ繼續事業トシテ工費四千餘萬圓ヲ支出シ之ガ浚渫ヲ爲シタル以來、茲ニ十年間之ヲ自然ニ放任シテ顧ミザル結果、土砂堆積、河底年々埋没シテ、甚ダシク其水深ヲ減ジ、今ヤ大ニ船舶ノ出入ヲ妨グルニ至レリ。加之ナラズ河口ヨリ更ニ京橋日本橋堅川等ノ倉庫所在地ニ通ズル枝川ハ、河底埋没一層甚ダシクシテ、滿潮時ヲ除クノ外ハ全ク舟運ノ便ヲ缺クニ至ル。是等ノ結果ハ、獨リ輸送ヲ澁滯シ、危險ヲ増加スルノミナラズ、爲ニ商工業ノ機宜ヲ謬リ、一般經濟ニ損失ヲ蒙ラシムルモノ亦鮮少ナラザルナリ。而シテ今ニシテ尙ホ之ヲ自然ニ放任シ去レバ、東京市ニ於ケル海運ノ便宜ハ遂ニ全ク杜絶スル悲運ニ陥ルベシ。是レ本會議所ノ深ク憂慮スル所ニシテ、切ニ其浚渫改修



ヲ希望スル所以ナリ。茲ニ河口及ビ枝川ノ實況調査ニ關スル書類ヲ添へ、本會議所ノ意見ヲ開陳ス。

右建議候也。

明治三十八年八月十日

東京商業會議所  
會頭中野武營

東京府知事  
東京市長 宛(各通)

隅田河口及枝川埋沒實況調査報告

一、過去ノ事實

隅田河口ハ、明治二十年ヨリ明治二十八年マデ八ケ年間東京市ニ於テ繼續事業トシテ工費約四十五萬圓ヲ支出シ、靈岸島ヨリ第五臺場沖ニ至ル落筋延長約四千五百間幅三十間乃至七十間ヲ、干潮面水深十二尺ノ豫定ヲ以テ浚渫シタルモ、當時臺場沖金杉沖等ノ一部ハ、他ノ事情ノ爲メニ豫定ノ浚渫ヲ爲スニ至ラザルノ觀アリテ、尙ホ其事業繼續中ナルニ拘ハラズ、郵船會社東京灣汽船會社解業者其他一般ノ關係者ハ、明治二十六年頃既ニ再ビ之ヲ浚渫センコトヲ當局者ニ建議シタルモ容ラレザリシコトアリ。然レモ尙ホ右浚渫ノ結果ハ能ク三百噸内外ノ船舶ヲ出入セシムルニ足ルコト爲リ、之ガ爲

メ一般ニ少ナカラザル便利ヲ得タルモノノ如シ。

二、現在ノ狀況

明治二十八年ヨリ明治三十八年ノ今日マデ十年間、隅田河口ハ一度モ浚渫若クハ其修浚ノ目的ヲ以テ何等ノ設備ヲ施シタルコトナキヲ以テ、土砂塵芥ハ日ニ月ニ流出シテ、河口ニ堆積シ、落筋ノ水深幅員共ニ甚シク減少セリ。東京市當局者ノ調査ニ依レバ、一箇年ノ埋沒程度ハ平均三寸五分ナルベシトノコナルモ、航海業者ノ調査ニ依リ、又實地ヲ踏査シ見ルニ、臺場沖及ビ落先ハ干潮面以下三尺五寸乃至四尺、濱離宮附近ハ五尺乃至五尺五寸ニシテ、最モ深キ臺場内芝浦沖ニ於テモ僅ニ六尺五寸乃至七尺五寸ノ水深ヲ保ツニ過ギズ。而カノミナラズ落幅モ著シク減縮シテ、甚ダシキハ僅々十間ヲ超ヘザル處アリ。左レバ干潮時ニ於テハ總噸數百噸内外ノ船舶スラ航行スルヲ得ザルノミナラズ、京濱間往復ノ解船タル五大力達摩折中形等ノ如キモ、貨物ヲ積載セバ到底出入スル能ハズシテ、滿潮時ヲ待ツノ止ムヲ得ザル狀ニ在リ。

三、枝川ノ狀況



河口ヲ入り各區ニ通ズル枝川中、日本橋區ニ於テハ豐海橋ヨリ一石橋、兜橋ヨリ新場橋、思案橋ヨリ萬橋、荒布橋ヨリ中ノ橋等ニ通ズルモノ、京橋區ニ於テハ高橋ヨリ靈岸橋、稻荷橋ヨリ彈正橋ヲ經テ久安橋ニ通ズルモノ、深川區ニ於テハ練兵橋ヨリ越中橋ヲ經テ汐見橋ニ至ルモノ、下ノ橋ヨリ和倉町ヲ迂迴シテ木場町ニ至ルモノ、上ノ橋ヨリ崎川橋ニ至ルモノ、萬年橋ヨリ直線ニ南葛飾郡ニ至ルモノ、及ビ是等ノ縱線ヲ連結スル橫線ノ河川ハ、場處ニ依リ東京市ニ於テ時ニ浚渫ヲ爲スノミナラズ、關係當業者モ適宜自費浚渫ヲ行フコトアル由ナルモ、僅ニ一部分ニ就キ姑息ノ方法ヲ行フニ過ギザレバ、日ナラズシテ又埋沒シ、現在ノ水深ハ淺キハ干潮面一尺五寸ヨリ深キモ四尺ヲ超ユルモノナシ。而シテ右三區ニ通ズル河岸地ニハ倉庫約六七萬坪アリテ、何レモ枝川ノ水運ニ依リテ貨物ヲ收納シ居レリ。然ルニ之ヲ輸送スル解船ノ多クハ、吃水凡ソ五尺五寸(五大力)六尺(達摩船)六尺二三寸(折中形)ナレバ、滿潮以外ニハ到底出入スルヲ能ハズシテ、非常ナル不便ヲ感ジツツアリ。

四、出入船舶ト貨物

東京市ヲ目的トシテ來ル船舶ハ、隅田河口ヲ除クノ外沿岸皆淺瀬ニシテ一ツノ寄泊地ナシ。故ニ其大小ヲ問ハズ悉ク此河口ニ集ル。而カモ年々多少ノ相違アリテ正確ナル數字ニ依リ其數ヲ示ス能ハザルモ、當局者當業者等ノ調査ニ依ルニ、一箇年間ニ於ケル出入船舶ハ凡ソ左ノ如シ。

汽船	四、一〇〇隻	二五三、〇〇〇噸
帆船及日本形船	六、七〇〇隻	三三三、〇〇〇噸
合計	一〇、八〇〇隻	五八六、〇〇〇噸
各種解船	五六、〇六四隻	此船數千六百六十八隻ニシテ一月ニ橫濱東京間四回往復ノ計算

次ニ前記船舶ノ登載出入スル數量モ年々差違アリテ一定ノ數ヲ得ザルモ、其概數ハ左ノ如シ。

本船橫濱ニ在リ解船ニ依ルモノ	二三〇、五〇〇噸	一、五〇七、五〇〇噸	一、七三八、〇〇〇噸
單ニ京濱間ノ解船ニ依ルモノ	一一二、五〇〇噸	五、〇〇〇噸	一一七、五〇〇噸
品川沖ヨリ解船ニ依ルモノ	二七、五〇〇噸	一八七、〇〇〇噸	二一四、五〇〇噸
本船ニテ河口ニ入ルモノ	一五一、五〇〇噸	五〇五、五〇〇噸	六五七、〇〇〇噸
合計	五二二、〇〇〇噸	二、二〇五、〇〇〇噸	二、七二七、〇〇〇噸

以上ノ船舶貨物ニ就キ逐一其品目數量ヲ明記スルハ到底不可能ノトニ屬スト雖モ、汽船々貨トシテハ遠ク歐米各國ヨリ來ルモノアリ、帆船日本形船帝都時代ノ港灣



々貨モ尙ホ米領ウエーク島獨領西カロライン群島サイバン島等ヨリ來ルモノ少ナカラズ。況ンヤ清韓及ビ内地等各出港地ヲ示セバ無慮三四百ノ多キニ及ブベシ、隨テ船貨ノ種類ハ微細ノ日用品ヨリ穀物薪炭機械器具土木建築ノ材料等ニ至ルマデ、殆ンド網羅シテ漏サル有様ナリ。

五、河底埋没ノ影響

前記ノ如ク巨額ノ貨物ハ常ニ水運ノ便宜ニ依リ東京市ヲ出入シツ、アルニ拘ハラズ、之ガ關門タル隅田河口及ビ其枝川ハ河底埋没シテ今日ノ状態ヲ呈セルニ於テハ、間接直接影響ヲ及ボスベキモノ一ニシテ止マザルモ、今其主ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ。

(イ) 危險 水深ノ減少ト河幅ノ短縮ハ、船舶航行ヲ危險ナラシムルハ當然ノトナルモ、之ガ爲メ其航行ヲ禁止スル能ハザルハ勿論、今日ノ場合市民需用物貨ノ大部分ハ之ニ由テ供給セラレツ、アルニ於テ、航業者ハ勢ヒ危險ヲ冒スノ弊ヲ生ジ、隨ツテ種々ノ災害ニ陷ルモノ少ナカラズ。例令ハ干潮ノ爲メ潮待チヲ爲ス際、暴風雨ニ遭遇スルト、水深濅幅ノ狭少ナル爲メ衝突顛覆坐洲スルト、昨年中品川町役場京橋區役所ニ届出デタル水難

船舶ノ數ヲ見ルニ總數約三百二十隻ニシテ、其他ノモノ及ビ届出ナキモノヲ加フレバ、一年四百隻ヲ下ラザルベシ。之レ固ヨリ水深ノミニ原因スルモノニアラザルベキモ、如何ニ危險ノ甚ダシキカヲ證スルニ餘アリ。

(ロ) 輸送ノ遲延 河口枝川共ニ水深ナク潮待チヲナス爲メ、往々豫期ノ輸送ヲ爲ス能ハザルトアリ。例令ハ横濱東京間ノ航海ハ、普通六時間ヲ以テ足ルニ拘ハラズ、現ニ十一時間ヲ要シツ、アルト。横濱ヨリ來ル大形曳船ハ、品川ニテ小形曳船ト交替シ、更ニ舢舨ヲ分割シテ二三隻ヅ、入港スルト。日没前トナレバ危險多キヲ以テ一切翌朝ニ繰延シ、之ガ爲メ商機ヲ逸スルト。二十年ヨリ二十八年浚渫當時ハ、三百噸内外ノ船舶出入自在ナリシモ、今日ハ滿潮時ト雖モ百噸内外ノモノニアラザレバ出入シアタハズシテ、入港スルモノハ總テ品川沖ニテ舢舨ニ積替ユルト。

(ハ) 經濟上ノ損害 海運ニ障害アレバ横濱東京間ノ如キハ汽車便ヲ以テ之ヲ充ツルヲ得ルガ如ク思考セラル、モ、假リニ七噸積貨車十輛ヲ連結シタルモノト大舢舨一隻若クハ一隻半ノ載貨ト相匹敵スルト、及ビ運送費ニ於ケル船車高低同日ノ論ニアラザル等ヲ思ベバ、汽車便ニ依ルノ不



經濟ナルヲ明カナルノミナラズ、今日京濱間ヨリノ汽車ハ到底需用貨物ノ半額ヲモ輸送スルカナキナリ。尙ホ前記ノ危險輸送遲延等ノ爲メ直接間接ニ經濟上ニ及ボス影響ハ枚擧ニ違アラズト雖モ、卑近ノ一例ヲ示セバ、魚河岸市場ニ來ル生魚ニテ、其數量ハ一個年三千五百五十八萬六千七百七十四斤、百八十二萬四百二十二個ノ多キニ上ル。而シテ夏期ニ於ケル是等生魚ノ輸入セラル、場合、河口ノ干潮若クハ日没ニ際セバ、多クハ之ヲ氷詰ト爲シ、以テ翌日ノ市場ニ上スモノ少ナカラズ。其結果ハ單ニ價格ヲ騰昂セシムルノミナラズ、品質モ亦變化シテ少カラザル損害ヲ生ズ。而カモ一般市民ハ常ニ間接ニ其損害ヲ負擔シツ、アルナリ。而シテ是等ハ必ズシモ生魚ノミニ限ラズシテ、其他貨物ト雖モ往々此例ニ依ルモノ少ナカラズ。

六、浚渫ノ必要

前記ノ事情ヨリ推論シテ、隅田河口及ビ日本橋、京橋、深川其他各區ノ倉庫所在地ニ通ズル枝川ハ、到底今日ノ儘放任スベカラザルモノニシテ、一日モ早ク其浚渫ヲ經營スベキモノナリ。而シテ浚渫ノ程度ハ左ノ如ク爲スヲ相當

ナリト認ム。

- 一、河口ニ於テハ、落幅四十間以上水深干潮面十二尺トスルコト、斯クセバ干潮時ニハ五百噸、滿潮時ニハ千噸内外ノ船舶ヲ出入スルニ足ル。
  - 二、枝川ニ於テハ出入解船ノ吃水最大現在六尺二三寸ナレバ、標準トシテ少クトモ干潮面七尺ニ浚渫スベシ。
  - 三、繫船ノ便宜ニ供スル爲メ、適當ノ場處ニ於テ落筋ノ兩側ヲ浚渫シ繫船所ニ充ツルコト。
  - 四、前各項浚渫ヲ爲スノ時期ハ目下已ニ迫リ居レバ、可及的迅速ヲ要スルノミナラズ、竣工期間ハ長ク三年ヲ越ユベカラズ。
- 右ノ如ク浚渫ヲ爲シタル後ハ、浚渫船ヲ常備シテ埋没ヲ防止スルハ當然ノ施設ナリト信ズ。
- 右建議案相添へ報告候也。

明治三十八年八月十日

隅田河口埋没實況調査委員長  
大橋新太郎

會頭中野武營殿

(參考書)

帝都時代ノ港灣



各枝川河底調査

通路之部

- 一、越中島練兵橋ヨリ入口南側角ヨリ十五間程離レタル河底小石瓦等多ク沈ミアリ、碇泊ハ危険ナリ。
- 一、同練兵橋水面ヨリ橋桁下迄高サ十六尺水面ヨリ河底迄深サ三尺五寸、以下同シ。
- 一、同練兵橋ヨリ郵船會社倉庫西境迄、護岸ヨリ四間離レテ深サ一尺五寸中央三尺五寸、河底沈石多ク且ツ堅土ニシテ碇泊ハ危険ナリ。
- 一、同郵船會社倉庫東境ヨリ越中島橋マデ中央深サ三尺五寸ニシテ、大小ノ石瓦等沈ミアリ、碇泊危険ナリ。
- 一、越中島橋高サ十五尺五寸深サ五尺。
- 一、石島橋高サ十三尺五寸深サ三尺五寸、河底堅土ニシテ碇泊出來ズ。
- 一、黒井橋高サ十四尺深サ一尺五寸。
- 一、牡丹町へ入口西側土管瓦置場河岸迄、石及土管破片沈ミタルモノ多シ。碇泊出來ズ。中央深サ三尺。

- 一、同入口東側中外倉庫河岸迄、障礙物ナシ。
- 一、中央倉庫門前ノ橋高サ十五尺三寸深サ三尺五寸。
- 一、中外倉庫へ渡ル橋高サ十六尺五寸深サ四尺五寸。
- 一、市街鐵道發電所手前ヨリ第一番ノ橋高サ十一尺五寸深サ五寸。
- 一、同二番ノ橋高サ十三尺五寸深サ五寸。
- 一、同三番ノ橋高サ十三尺五寸深サ五寸。
- 一、同四番ノ橋高サ十二尺八寸深サ五寸。
- 一、金比羅橋高サ十五尺五寸深サ二尺。
- 一、平ノ橋高サ十尺五寸深サ一尺五寸。
- 一、蓬萊橋高サ十五尺深サ三尺八寸。
- 一、汐見橋(土橋)高サ十三尺深サ三尺。
- 一、鶴步橋高サ十五尺深サ四尺。
- 一、湊橋(和倉堀割入口ノ橋)高サ十四尺深三尺五寸。
- 一、江川橋高サ十三尺深サ三尺。
- 一、油堀入口南側護岸二間離レ深サ三尺、北側護岸二間離レ深サ二尺五寸、中



央五尺五寸。

一、油堀入口下ノ橋高サ十六尺三寸深サ三尺五寸。

一、千鳥橋高サ十五尺七寸深サ三尺五寸。

一、豊島橋裏堀入口高十五尺二寸深二尺三寸。

一、**三**倉前ヨリ中ノ橋迄ノ間中央深サ五寸乃至一尺五寸。

一、中ノ橋高サ十二尺深一尺五寸。

一、仙臺堀入口上ノ橋高サ十七尺深サ四尺。

一、西永代町へ入口松田橋高サ十三尺五寸深サ二尺。

一、泉堀入口相生橋高サ十三尺深二尺七寸、但東側ニ大石沈ミアリ、拾ヒ上ゲザレバ危険ナリ。

一、泉倉庫堀割入口橋高サ十三尺深サ一尺五寸。

一、要橋高サ十五尺五寸深サ三尺。

一、大榮橋高サ十七尺深サ五尺。

一、扇橋高サ十四尺深サ一尺五寸。

一、猿江橋高サ十四尺深サ二尺五寸。

一、菊川橋高サ十四尺深サ三尺。

一、崎川橋高サ十四尺深サ三尺。

一、四ッ目橋高サ十七尺三寸深サ四尺五寸。

一、四ノ橋高サ十七尺深サ六尺。

一、豎川筋ヨリ平岡工場へ入口ノ橋高サ十四尺五寸深サ五尺。

一、龜井戸ニ通ズル鐵道橋高サ十三尺深サ四尺。

一、二ノ橋高サ十八尺深サ四尺五寸。

一、新堀川入口豊海橋高サ十七尺深サ一尺六寸。

一、湊橋高サ十五尺八寸深二尺。

一、箱崎橋高サ十七尺深サ三尺。

一、鎧橋高サ十七尺深サ三尺三寸。

一、思案橋高サ十三尺五寸深サ一尺五寸。

一、江戸橋少シ下流深サ三尺五寸、橋下南側落筋三尺、橋臺ヨリ四間離レ二尺五寸、同北側落筋三尺、橋臺ヨリ六間離レ二尺、橋下中央ヨリ二間程南寄りノ處頗ル淺シ、之レ元石橋眼鏡橋中央臺石取揚殘リアル爲メニシテ、此處深サ



- 一、尺五寸通行最モ危険ナリ。
- 一、日本橋高サ十八尺五寸深サ三尺五寸。
- 一、西川岸橋高サ十四尺深サ二尺五寸。
- 一、一石橋高サ十七尺深サ三尺五寸。
- 一、錢瓶橋高サ十七尺深サ二尺。
- 一、兜橋高サ十六尺深サ二尺。
- 一、海運橋高サ十六尺深サ二尺五寸。
- 一、新場橋高サ十四尺八寸深サ二尺。
- 一、久安橋高サ十四尺深サ二尺。
- 一、松幡橋高サ十四尺五寸深サ二尺。
- 一、彈正橋高サ十六尺五寸深サ三尺。
- 一、白魚橋高サ十六尺五寸深サ三尺。
- 一、豐倉橋高サ十六尺深サ三尺。
- 一、紀伊國橋高サ十五尺三寸深サ三尺二寸。
- 一、旭橋高サ十六尺深サ三尺五寸。

- 一、三原橋高サ十六尺三寸深サ三尺四寸。
  - 一、木挽橋高サ十五尺深サ三尺。
  - 一、出雲橋高サ十六尺五寸深サ三尺八寸。
  - 一、蓬萊橋高サ十五尺深サ四尺。
  - 一、新橋鐵道局へ通ズル橋高サ十五尺深サ二尺。
  - 一、汐留橋高サ十七尺深サ四尺。
  - 一、離宮橋高サ十五尺五寸深サ三尺五寸。
  - 一、金杉川入口深サ一尺五寸。
  - 一、金杉鐵橋高サ十三尺深サ二尺。
  - 一、金杉橋高サ十四尺三寸深サ二尺。
  - 一、將監橋高サ十二尺五寸深サ二尺。
  - 一、鐘ヶ淵橋高サ十四尺五寸深サ三尺。
  - 一、枕橋高サ十三尺二寸深サ二尺七寸。
  - 一、同奥水門高サ十五尺深サ三尺。
- 碇泊之部



一、越中島郵船會社倉庫西境ヨリ東境マデ、護岸ヨリ二間離レテ四尺二寸、中央四尺二寸、碇泊差支ナシ。水深六尺以上ニアラザレバ完全ナル碇泊ハ出來ザレド、同處ハ河底泥土ナルヲ以テ、干潮ト共ニ船底ヲ泥中ニ没セシメ、漸クニ碇泊スルコトヲ得、而シテ同處ハ比較的水深ノ深キハ毎年我社ニテ浚渫スルニヨル。

一、**箱**倉庫河岸及蛤町二丁目河岸石島橋迄ハ、河底堅土ニシテ碇泊出來ズ。  
 一、古市場町**田**倉庫護岸二間離レ深サ二尺、中央四尺、河底堅土ニシテ碇泊出來ズ。

一、栖原油倉護岸二間離レ深サ二尺、中央四尺、河底堅土ニシテ碇泊出來ズ。  
 一、中央倉庫前河幅四十八尺深サ二尺五寸。

一、佃町**分**倉庫**〇**庫河岸護岸三間離レ深サ二尺ナリ。

一、秋田**ニ**倉河岸護岸二間離レ深サ八寸ナリ。

一、**加**倉前河岸右ト同斷。

一、田中鐵積揚場護岸四間離レ二尺四寸、河底堅土ニシテ碇泊出來ズ。

一、油堀**久**森六店前中央深三尺、碇泊差支ナシ。河底泥土ヲ以テ前記ノ理由ニ

依リ碇繫スルコトヲ得。

一、同商業倉庫河岸中央深サ三尺、地盤不良、碇泊出來ズ。

一、佐賀町大川端筋入惣倉前棧橋ヨリ三間離レ深一尺五寸、河底堅土且ツ大小沈石多ク、碇泊危険ナリ。

一、同**キ**倉前三間離レ深サ二尺、前ト同斷。

一、同**山**倉前棧橋ヨリ二間離レ深サ五寸、前同斷。

一、同**秀**岩崎倉前棧橋ヨリ二間離レ深サ一尺五寸、前同斷。

一、油堀白井店前ヨリ東方横田前河岸迄護岸三間離レ深サ二尺、中央三尺、地盤堅ク碇泊出來ズ。

一、同堀田倉前二間離レ深サ二尺五寸、中央三尺、浚渫ノ上ナラデハ碇泊出來ズ。

一、**倉**倉庫(俗稱ダテ)前深サ三尺。

一、堀川町郵船會社倉庫前(油堀通り)護岸二間離レ深サ二尺、中央三尺。

一、郵船會社堀川町横倉河岸護岸二間離レ深サ一尺五寸、中央四尺三寸、河底高低悪敷、碇泊ニ不便ナリ。



- 一、郵船會社裏堀護岸二間離レ深サ一尺、中央二尺。
- 一、仙臺堀白井倉前護岸二間離レ水ナシ。三間離レ深サ五寸、中央四尺、堅土ニシテ碇泊出來ズ。
- 一、同 **〇** 倉護岸二間離レ深サ一尺五寸。
- 一、同 **ハ** 倉護岸三間離レ深サ一尺五寸。
- 一、清住町 **倉** 煉瓦倉護岸三間離レ深サ二尺、河底傾斜惡敷、浚渫ノ上ナラデハ碇泊出來ズ。
- 一、永堀町 **〇** 倉護岸三間離レ三尺。
- 一、同 **松** 倉モ右同斷。
- 一、伊勢崎町 **ホ** 倉前河岸ハ傾斜惡敷、浚渫ノ上ナラデハ碇泊出來ズ。
- 一、仙臺堀通リ **〇** **伊** **△** 倉前地盤不良、碇泊出來ズ。
- 一、仙臺堀通リ **イ** **キ** 澁澤倉庫護岸二間離レ深サ二尺。
- 一、田中(冬木町)鐵置場護岸三間離レ深サ一尺五寸、中央四尺。
- 一、鶴步町荳積場 **七** 倉前護岸二間離レ深サ二尺、中央四尺。
- 一、古川溶銅所護岸四間離レ深サ一尺五寸、中央二尺。

- 一、平岡工場積揚場棧橋護岸二間離レ深サ二尺、中央二尺五寸、但兩方ニ溝ノ流出口ニヨリ、此邊非常ニ高低アリ、浚渫セザレバ危險ナリ。
  - 一、茅場町第七十七銀行河岸護岸四間離レ深サ一尺、中央三尺。
  - 一、郵船會社倉前護岸一間離レ四尺、中央四尺七寸。
  - 一、江戸橋郵船會社倉前東方護岸二間離レ深サ一尺五寸、中央三尺五寸、同西方護岸二間離レ三尺七寸、中央三尺。
  - 一、新橋鐵道揚荷場護岸一間離レ深サ二尺、中央三尺。
  - 一、芝浦製作所積場護岸三間離レ深サ一尺、中央二尺。
  - 一、月島保税倉庫大川筋荷揚場護岸三間離レ深サ一尺、底堅土ニシテ碇泊出來ズ。
  - 一、鐘ヶ淵紡績會社入口天野鐵工場護岸二間離レ深サ二尺五寸、中央四尺五寸。右深淺ハ大潮時ノ干潮ニ測定セシモノナリ。
- 〔參考〕隅田川口埋沒調査材料書類ニ、  
 過般御委囑相成候隅田川下流調査ノ件ハ、何分短時日間ニ精密ナル調査ヲ了シ兼候得共、大要別紙之通ニ有之候。御參考迄差出候也。



明治三十八年七月七日

東京商業會議所會頭  
中野武營殿

三四八  
日本郵船株式會社  
加藤正義

追而、品川灣海圖、日本橋京橋深川各區全圖、竝ニ深川及大川筋略圖、都合六通相添差出申候。

隅田川口航路埋没ノ景況ハ、實地鍾測スルニアラザレバ精密ナル處ヲ知ルヲ難ク、實地調査ヲナサントスルニハ到底三、五日ノ短時日ニ爲シ得ル所ニアラザレドモ、京濱間往復ノ衝ニ當リ、實地見聞シタル所ニ由リ、其實況ヲ知ルヲ亦決シテ難キニアラズ。今其實地見聞シタル所ノ實況ニ徴シ、川口航路埋没ノ景況ヲ調査スルニ、月島界隅々臺場先ニ至ル落筋ハ、先年月島埋立ノ工事ニ際シ、幅二十間水深干潮時ニ於テ一丈五尺以上(或ハ一丈二尺以上トモ云フ)ニ浚渫シタリト雖モ、爾來幾年月ノ經過スルニ隨テ、年々歳々埋没シ來リ、昨今ニ至リテハ、幅員モ僅々其半分ニ減縮シ、平均十間内外ニ過キズ。水深ニ至テハ更ニ一層甚ダシク、落先ノ如キハ水流ノ爲メ土砂ヲ流失セシムル結果、僅々三尺五寸位ニ埋没シタル箇處アリ。別紙品川灣「チャート」ニ依リ彩色ヲ以テ其水深ヲ區別シタルガ如ク、紫ハ三尺

五寸、青ハ四尺、薄黄ハ五尺五寸、水色ハ六尺五寸ニシテ、何レモ干潮時ニ於ケル水深ナリトス。左レバ干潮時ニ於テハ百噸内外ノ船舶ヲ交通セシムルヲ能ハザルハ云フ迄モナク、五大力達摩船ノ如キ、喫水淺キ艇船ニテモ、落先ノ如キハ潮待ヲナスニアラザレバ出入スルヲ得ザル有様ニシテ、而モ其落床ハ藥研形ニ埋没シ居ルヲ以テ、船舶行違ヒノ際ニ於テ舷々相觸レ、爲メニ膠著シ、又ハ損傷ヲ來タスヲアリ。故ニ之ヲ浚渫スルハ水路航運ノ便宜上頗ル急務ニシテ、少クモ前年月島埋設ノ時ニ於ケルガ如ク、幅員二十間以上水深十二尺以上ヲ極度トシテ浚渫スルヲ必要ナリ。永代橋下流越前堀ヨリ築地明石町ニ至ル沿岸及佃島ヨリ月島ニ至ル沿岸モ、亦タ著シク埋没シ、護岸間際ハ干潮瀉トナル箇處アリ。此邊ハ一體ニ川幅廣キヲ以テ、沿岸ノ埋没ハ河川航通ニ便ヲ缺カザルガ如クナレドモ、流域ノ深キ所ハ合ノ子船、帆船等ノ繋リ場トナリ、常ニ多數ノ船舶輻輳シ居ルヲ以テ、此邊ヲ航通スル船舶ハ勢ヒ沿岸ニ接シタル流域ヲ航通セザルヲ得ザルガ故ニ、潮ノ干満ニヨリ甚ダシキ不便ヲ感ズルヲアリ。少クモ七尺以上ニ浚渫スルヲ必要ナリ。



京橋、日本橋、深川區等倉庫所在地ニ通ズル河川ハ、是亦年々埋没ノ一方ニシテ、別紙ヘ三區切圖ニ朱點線ヲ畫シ、更ニ數字ヲ以テ記入シタルガ如ク、其最モ淺キ部分ハ干潮二尺ニ滿タザル箇所アリ、深キ部分ニテモ四尺ヲ越ヘザル有様ナレバ、何レノ倉庫ニ舢舨ヲ送ルトシテモ潮待ヲナスニアラザレバ舟ヲ入ル、ト能ハザルハ勿論、所ニヨリテハ瓦石等埋積シ、舢舨ヲ碇泊セシムルニ危險ナル場所アリ。深川方面ハ、先年洲崎埋立ノ際或部分ノ浚渫ヲ行ヒ、更ニ又去卅一年關係商業者ノ建議ニヨリ浚渫シタレドモ、泥土埋没ノ勢ヒ甚ダシク、今日ニ至リテハ何レモ二尺ヨリ三、四尺之ニ埋没スルニ至リタリ。然ルニ是等倉庫ニ荷物ヲ運搬スベキ舢舨ハ五大力、達摩、折中形等種々アレドモ、概シテ近來大形舢舨ヲ用ユル傾アリ。其數ニ至テモ年々増加ノ一方ナルヲ以テ水運上川床埋没ヨリ感ズル不便ハ更ニ一層大ナルモノアリ。今ヤ各種大形舢舨ノ喫水ヲ調査スルニ、五大力ハ五尺五寸、達摩船ハ六尺、折中形ハ六尺二三寸ニシテ、何レモ貨物積載ニ於ケル喫水ナリトス。故ニ其浚渫水深ハ干潮時ニ於テ七尺以上タルヲ必要ナリ。前述ノ如キ水深ナルヲ以テ、干潮時ハ舢舨船ノ航通杜絶ノ有様ナレドモ、當

社ニテハ其間、荷役ヲ休止スル譯ニ行カザルヲ以テ、必要上自ラ浚渫スルノ止ムヲ得ザルニ至リ、江戸橋、南茅場町ハ毎年、深川ハ一ケ年目毎ニ浚渫ヲ行ヒ、辛クモ干潮時ノ荷役ニ差支ナキ様計畫シ居レドモ、河中ノ泥土ハ深キニ流レ込ミ到底充分ノ效果ヲ來サバルハ今更當惑スル所ニシテ、其他ニモ自費ヲ投ジテ此後浚渫ヲ行フ有志者ナキニアラザレドモ、其浚渫タルヤ水中ノ泥土ハ淺所ヨリ深所ヲ填充シ、忽チニシテ河床ヲ平均セシムルガ故ニ、一時ニ全體ヲ浚渫スルニアラザレバ、其效ナシトシテ斷念スルモノ多キ實況ナリ。

東京市ニ出入スル所ノ貨物數量ハ、其調査區々ニシテ今其精確ナル統計ヲ得ル能ハザレドモ、大略一ケ年ノ出入總額ハ二百七八十萬噸ト見テ大差ナキガ如ク、而モ其巨額ノ貨物ハ隅田川口ヨリ枝流水運ニヨリ倉庫所在地ニ回漕セラル、モノニシテ、當社扱ノ出入貨物ノミニテモ、既往三ケ年ノ統計ニ依ルニ、一ケ年六十萬噸ノ多數ニ達シタリ。更ニ深川方面ニ於テハ貨物集散ノ數、比年増進ノ結果倉庫ノ増築ヲ促シ、現今ニ至リテハ倉庫ノミニテ四萬餘坪ヲ算シ、之ニ納屋ヲ加フレバ優ニ五萬餘坪ヲ越ヘ、近



ク十年前ニ比スルニ殆ンド一倍以上ニ達シ、猶以テ貨物ノ集積所ナキニ苦ムガ如キ有様ナリト云フ。斯ル巨額ノ貨物ヲ水深三尺ニ滿タザル川流ニヨリ出入セシムルノ不便ハ、一見想像ニ難カラザル處ニシテ、航運疏通ノ途ヲ講ズルハ實ニ刻下ノ急務ナリトス。○各河底調書ハ、上文載スル所ノ建議ニ添タル者ニ同ジキヲ以テ

東京灣汽船會社提出  
隅田河口

一、漸次埋没シテ、現今ニテハ、干潮時ニ於ケル濬筋ノ最モ淺キ處ハ四尺内外ニシテ、幅又々狹クシテ、船舶ノ進退自由ナラズ。爲メニ稍モスレバ帆船等ノ濬筋ニ堅洲スル時ハ、各船舶ノ通行ヲ妨ゲ、殆ンド舟路ヲ杜絶シ、滿潮ヲ待ツニアラザレバ出入スルヲ得ザルヲ往々アリ。

一、其他濬幅ノ狹キト水底ノ淺キトニヨリ危險多シ。少シク風浪アレバ船體動搖激シク、舷々相摩シ、或ハ船底ヲ損ズル等、被害頻々タリ。延テハ人命ヲ損ジ、乘載貨物ノ濡損スル等枚擧ニ遑アラズ。

一、河口ノ埋没ハ、自然ニ品川沖ヲ埋メ、大船ノ碇泊場所ハ既往ニ比シ遙カノ沖合ニ轉ゼザルノ止ヲ得ザルニ到レリ。之レ本船ト陸上トノ費用ヲ増

大ナラシムルモノニシテ、市ノ繁榮ヲ害スル大原因トス。甚シキハ品川ヲ避ケ横濱ニ入船地ヲ轉ズル船舶少トセズ。

一、鮮魚運搬ノ大困難 豆相房總ノ沿海ヨリ輸入スル鮮魚ハ、汽船又ハ押送船ニテ輸送スルモノトス。然ルニ前述ノ如ク支障ノ爲メ、品川沖又ハ河内ニ入りナガラ空シク停船シテ其腐敗ニ委スルノ憾ミ少ナシトセズ。當業者ノ困難ハ云ブモ更ナリ、延テ市民衛生上ノ一考ニ與ヒセザランヤ。

一、如上ノ理由ハ、河口浚渫ヲ急務トスル今ヤ言ヲ用ヒズシテ明カナリトス。築港トハ自カラ別問題ニシテ、河口ニ依ルノ船舶ハ築港内貴重ノ面積ニ入ラシムルモノニアラザレバ、速カニ之ガ改良浚渫ノ方ヲ設ケ、將來維持方ニ付テハ船籍ヲ市外ニ有スル船舶ノ出入スルモノヨリ相當ノ出入税ヲ徵スルトキハ足レリトス。

川内取締規則ヲ設クルコト。

一、濬ノ深サ 最大干潮時拾貳尺ノヲ

一、濬ノ幅 最大干潮時六十間ノヲ。

一、帆船ノ碇泊場ヲ一定スルヲ。



一、現に東京市の問題たる隅田川々口浚渫の儀は、航通を便にし、貨物の陸揚げを容易ならしむるにあり。貨物の陸揚を容易ならしむるには、倉庫地に達する川線の航通をも均しく便にして、始めて川口浚渫の目的を達し、其利益を収め得べきなり。

一、然るに、東京市の倉庫地たる深川の川々も、隅田川々口の如くに年々埋積して不便殆んど其極度に達せり。故に先づ深川(川上)を浚渫して、次に隅田川口(川下)の浚渫に及ぼすを適當の順序なりと思考す。

一、去々十一年解業、運漕業、保險業、倉庫業、肥料問屋、廻米問屋、糠問屋、其他各團體連署して、深川區内川口の浚渫を東京市に請願したるに、市は此の請願を容れ、同年直ちに浚渫せしと雖ども、當時護岸石垣の保護工事を施さず、其儘危険の虞れなき限りの程度に於て不完全の浚渫を爲したるが故に、爾來僅々數年にして忽ち舊に復し、現に不便を感ずるの甚しきに至れり。依て更に浚渫の場合には石垣保護の準備(假令ば護岸面へ杭打をなす等其他適當の用意をなし、充分に浚渫せられんことを切望す。

一、深川區内倉庫地の川口埋積の爲めに現實に不便を感じつゝ、ある一二の例を示せば、左の如し。

(一)横濱又は品川沖に於て一旦解に積取りたる貨物を、深川にて再び小解と稱する傳馬船に積移し、以て倉庫へ輸送するの不便あり。

(二)元解が深川に入りてより通例三日を要す。若し貨物輻輳其他の事情あるときは、碇船五六日間に及ぶ。此の場合には碇船料を損するのみならず、不取締なる解に貨物を數日間委ぬるの不便あり。

(三)右碇船に通路を閉塞されたる傳馬船(十噸乃至二十噸)は、自由を失ひ、或は全く傳馬船自らも潮待ちする等の爲め、非常に時間を要し、隨て深川と各區間に於ても運賃は近年著しく騰貴せり。

(四)前項の理由に依り、不得止高價なる馬力に據り陸上運搬するもの漸く多きを致せり。

右の内第一項は、荷造りを損じ、中味を害し、若くは脱漏し、加之積換の費用と時日の損耗は勿論、此積換と同時に、保險契約は無効となるの危険あり。第二項解碇船日數平均四日間を二日間に減ずるときは、今の解の運搬力



は倍加す。舩の運搬力として倍加するときは、本船の荷役に頗る便利を加へ、小規模の築港に優るの利益あり、第三項の障害は川床浚渫と共に排除せられ、運賃は自から遞減するに至るべし。殊に第四項の高價にして而かも比較的貨物毀損の虞ある馬力運搬を減縮するに至るべし。加ふるに荷馬車の爲めに深川區内の道路と橋梁を破損すること實に甚し。元來深川の倉庫地は、河線多くして戸口少なく、又商業地にも非ざるが故に、來往極めて稀疎なるにも不拘、道路破損の甚しきは、主として馬車の重量貨物を運搬するもの多きに因る。故に若し此川口を道路の如く注意を拂ひ、常に僅少なる經費を投じて浚渫せば、自ら水運に據るもの多きを致し、道路橋梁の破損隨て減少し、市經濟上に益する處又少からざるべし。要するに、隅田川々口と共に東京市の倉庫地たる深川の川口を浚渫して航通を便にするときは、各舩の經費と時日を節約し、危険を減じ、隨て東京市場の物價を低減し、直接には市民が現に失ひつゝある利益を回收し、間接には市を經て各地方に對する總ての取引額を増加するの利益彌々多きを加へ、市の繁榮期すべきなり。

## 附

隅田川々口浚渫に伴ふ附帶工事として、芝濱に船溜りを設け、永代橋附近へ千噸以上千五百噸の船舶を横附に爲すの設計は、直接に關係ある營業者間に於いて其の效果に疑を挾む者少なきにあらず。其の要左の如し。

(一) 東京と各地方との間に航通する船舶は、百噸乃至二百噸より一躍二千噸以上にして、千噸若くは千五百噸の船舶は極めて少數なり。是等大坂以西の如き主として五百噸乃至千噸の船舶を使用するものと航路を異にするが故に、現在將來ともに東京と取引する地方の商業事情は、千噸若くは千五百噸の船舶は中途半端に屬するを以て、之に適應する船溜り又は永代附近へ横附の設計は未だ其利を認むる能はず。

(二) 今假りに千五百噸迄の船舶等多數航行し、永代附近へ横附して荷役し得るものとするも、其荷物は更に舩或は馬車に據り再び倉庫地へ運搬せざるべからざるを以て、其經費と荷傷みの損失は従前と大差なかるべし。